那　珂　50

－ 那珂遺跡群第115次調査の報告 －

福岡市埋蔵文化財調査報告書第983集

2008

福岡市教育委員会

序

福岡市は、古くから大陸との文化交流の門戸として、また対外交易や外交の窓口として栄えてきた地域であります。このような歴史的環境のもとに市内には数多くの史跡や文化財が残されており、本市におきましては保護と活用に努めているところであります。しかしながら、都市の発展に伴う開発行為によりやむを得ず失われていく埋蔵文化財もあり、これらについては事前に発掘調査を実施し、記録保存を行っています。

本書は、博多区那珂1丁目地内における個人専用住宅兼共同住宅の建設に先だって行われた那珂遺跡群第115次調査の成果の報告書です。

本調査では、弥生時代から古代にいたる非常に濃密な分布を示す集落跡を検出しました。特に、今回発見された初期の瓦を伴う飛鳥時代の大型建物群は、古代における最初期の役所（官衙）の一部である可能性があり、この地域の歴史を考える上で非常に重要なものと考えられ、今後の歴史的な評価や検討が待たれる貴重なものであります。

本書が、文化財保護への理解と認識を深める一助となり、また研究資料としても活用して頂きましたら幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査の実施についてご理解をいただき、調査費用の負担をはじめとする多大なご協力を賜った廣田誠司氏をはじめとする関係各位の方々に対し、心より感謝の意を表する次第であります。

平成20年3月17日

福岡市教育委員会

教育長　山田　裕嗣

例 言

1．本書は、福岡市教育委員会が、平成19（2007）年1月18日から同年3月16日まで発掘調査を実施した、個人専用住宅兼共同住宅の建設に伴う那珂遺跡群第115次調査の報告書である。なお発掘調査費用の一部は国庫補助金を適用している。

2．遺構の呼称は記号化し、掘立柱建物をＳＢ、竪穴住居をＳＣ、溝状遺構をＳＤ、土坑（貯蔵穴を含む）をＳＫ、性格不明遺構をＳＸ、柱穴をＳＰとしている。また遺構番号は、調査時における番号をもとに一部整理し、修正して報告している。

3．本書の遺構図に用いる方位北は磁北である。調査区の座標は任意のものである。ただし、福岡市教育委員会埋蔵文化財課が那珂地区に設置した測量基準杭より国土座標を移動して調査区の国土座標上の位置を求めている（Fig. 3）この座標系は日本測地系による（ただし巻末抄録は世界測地系である）。またレベルは、上記の測量基準杭の標高から移動して用いている。

4．本書に用いる遺構図の作成は、久住猛雄、荒牧宏行（調査時埋蔵文化財第１課）、阿部泰之（埋蔵文化財第2課）が行ったほか、九州大学、別府大学、早稲田大学の学生・大学院生の協力を得た。遺物の実測は、本田浩二郎（埋蔵文化財第1課）、平ノ内武史（別府大学大学院）が主に行った。そのほか、瓦の実測は比嘉えりか（福岡大学大学院）、石器・石製品は山口譲治（埋蔵文化財第１課課長）、山口朱美、平ノ内が、鉄製品・ガラス玉は比佐陽一郎（埋蔵文化財センター）が行い、一部を久住が実測した。拓本の採取は坂井かおり、宇野美嘉、宗近健太郎、成清直子が行った。製図は坂井、平ノ内、比嘉、成清、久住が行った。遺構写真および遺物写真は久住が撮影した。本書の編集と執筆は久住が行ったが、瓦に関する記述と観察表の作成は比嘉の協力を得たほか、石器・石製品は山口譲治が執筆した。

5．本調査に関わる出土遺物と記録類は、全て福岡市埋蔵文化財センターにおいて収蔵・管理される予定である。

目　次

Ⅰ．はじめに・・・

1. はじめに

１．調査に至る経緯と調査の経過

平成18（2006）年5月15日付で、　田誠司氏より、博多区那珂一丁目707番地内における個人専用住宅兼共同住宅の建設工事に関して、文化財保護法に基づく届出が福岡市教育委員会埋蔵文化財第１課に提出された（事前審査番号18-2-162）。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である那珂遺跡群（分布地図番号37-0085）に含まれており、周囲の発掘調査の成果から、埋蔵文化財が存在する可能性がきわめて高いと判断し、予定される工事内容はこれに影響を及ぼすと推定できた。そのため申請者に対し、確認調査の実施を要請し、協議の結果、平成18年5月18日に確認調査を行った。

確認調査の結果、地表下－30cmにおいて遺物包含層および遺構を検出し、比較的浅い深度において多くの遺構が良好に遺存していることが判明した。したがって、予定される建設工事はこれに影響することが明らかとなったため、工事を行う場合には事前に埋蔵文化財の記録保存が必要であると判断した。このため、埋蔵文化財第1課と申請者との間で協議を重ね、記録保存のための発掘調査を行うことで合意を得た。そして平成19（2007）年1月9日付けで、　田誠司氏を委託者とする埋蔵文化財発掘調査業務委託契約書を福岡市教育委員会との間で締結した。平成19年1月17日から同年2月28日に本調査を行い、平成19年度に整理・報告を行うこととした。また調査費用については、調査事務所設置費用など一部を委託者が負担するが、当該事業には委託者の個人専用住宅部分があり、また共同住宅建設も委託者による個人事業であるため、国庫補助金適用要項に基づき、他は国庫補助金を適用することになった。

本調査は、契約上の開始日より1日遅れ、1月18日から重機による表土掘削を開始した。翌1月19日には機材搬入を行い、現場設営や遺構検出など、調査作業を本格的に開始した。遺構は地表下－20～40cmで検出でき、ここで重機による掘削を止めたが、予想以上の濃密な遺構の重複のため個々の遺構のプランが不明確で遺物包含層状となっており、やむなくこれから全体的にさらに約10cm前後を人力で掘削した。また調査地の包含層や遺構覆土が非常に堅くしまっており、全て人力掘削では時間的に厳しいと判断し、この包含層の一部についてはやむを得ず小型重機を用いて掘削し、廃土から遺物を採集した部分もある。このようにまず包含層掘削が必要となり、また密集した遺構の重複の判断も難しく、遺構検出までに多くの時間を費やすことになった。２月初めに全体の遺構検出をやっと終えたが、非常に複雑な遺構の重複のため、遺構掘削とその記録作業の進行は時間的、労力的にかなり厳しいものとなった。この状況の中、２月上旬の段階で、遺構の記録作業や重複する遺構の下部遺構の掘削・精査を考慮すると２月末までの本調査期間では調査の完遂が困難であると考えられた。またこの頃、遺構群の中に飛鳥時代の初期瓦を伴う掘立柱建物が存在することが明らかになり、歴史的な重要性を持つことから、十分な精査の必要性も生じた。このため調査期間の延長を要請する必要性が生じ、委託者の廣田誠司氏や委託者側の工事請負業者に対し、調査の進捗状況や遺構の重要性について説明しつつ、断続的に協議を行った。この結果、埋蔵文化財の調査についての深いご理解をいただき、３月半ばを目途とする調査期間の延長についての承諾とご協力を得ることができた。この後、２月下旬までに遺構の大部分を掘削し、２月28日に調査区全景の写真撮影を行った。3月に入り、図化記録作業を進行しつつ、遺構の重複で隠れていた下部遺構の調査を行い、これらを掘削・精査し順次図化記録を行った。この間、埋蔵文化財第１・２課の職員の応援も得ることができ、平成19（2007）年３月16日までに現場における全ての調査作業を終了させ、機材などを撤収し、廃土を重機により埋め戻して本調査を終了した。

なお、整理作業と報告書作成は平成19年度に行った。

2．調査の組織

調査委託　廣田誠司

調査主体　福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財第1課

調査総括　埋蔵文化財第１課長　山口譲治

埋蔵文化財第１課調査係長　山崎龍雄（平成18年度）、米倉秀紀（平成19年度）

調査庶務　文化財管理課管理係　鈴木由喜

事前審査　埋蔵文化財第１課事前審査係　本田浩二郎（平成18年度）、上角智希（平成19年度）

調査担当　埋蔵文化財第１課調査係　久住猛雄

本調査においては多くの発掘作業員の方々や九州大学、別府大学、早稲田大学の学生の協力を得た。遺構実測においては、荒牧宏行（本調査時埋蔵文化財第１課）、阿部泰之（埋蔵文化財第２課）の協力を得た。整理作業においては、坂井かおり、宇野美嘉、宗近健太郎、成清直子の手を煩わせた。遺物の実測は、主に本田浩二郎（埋蔵文化財第1課）、平ノ内武史（別府大学大学院）に行って頂いたほか、瓦の実測は比嘉えりか（福岡大学大学院）、石器の実測は山口譲治（埋蔵文化財第1課長）の協力を得た。また瓦類については、小田富士雄（福岡大学名誉教授）、岩永省三（九州大学総合博物館教授）、舟山良一、石木秀啓（大野城市教育委員会）、山村信榮（太宰府市教育委員会）、齋部麻矢（福岡県教育委員会）、中村昇平（春日市教育委員会）、菅波正人（埋蔵文化財第２課）、比嘉えりかほかによる検討とご教示を得た。これら各氏からは多くの貴重なご教示を頂いたが、事実報告を最大限に行うことを優先した結果、紙面の都合上それらの成果を本報告の中で十分に生かすことが出来なかったことをお詫び申し上げたい。また最後に、本調査に至る協議および条件整備、また本調査期間の延長などについて、委託者である廣田誠司氏とご家族の方々、および仲介者である株式会社ダイワハウス九州の担当者の深いご理解とご協力を得た。これら関係各位の方々に対し、特に記してあらためて感謝申し上げたい。

3．遺跡の立地と歴史的環境

那珂遺跡群は、福岡平野の中央、西を那珂川、東を御笠川・諸岡川に挟まれた洪積丘陵（段丘）の北端部に立地する（Fig.1）。北側の比恵遺跡群や南側の五十川遺跡とは連続した位置にあり、いずれも同様の立地である。特に比恵遺跡群とは、その間に段丘間の鞍部（浅い谷状地形）があるが、遺構分布や時期的な展開様相から、弥生時代から古代においては実質的に同一の遺跡群と考えられ、「比恵・那珂遺跡群」とも総称されている。近年は、比恵・那珂を貫通する弥生時代終末から古墳時代前期の道路遺構の存在も判明している（久住猛雄1999「弥生時代終末期「道路」の検出」『九州考古学』第74号）。比恵・那珂遺跡群は、中世以降の開墾や屋敷地（城館）の造成、近現代の区画整理や都市化による地形の改変や削平が著しく、遺構の残存状況は必ずしも良好ではない場合が多いが、それでも地点によっては非常に多くの遺構が密集して遺存していることもあり、本報告の那珂115次もそうした例の一つである。比恵・那珂遺跡群の標高は地形の削平部分も考慮すると、5～12m前後である。

比恵・那珂遺跡群の範囲は、南北2.4km×東西0.5～0.8kmの100ha以上に及び、特に弥生時代から古墳時代の遺跡としては全国的にも有数な大規模な部類に入るものである。本報告においては、紙面の都合上、弥生時代から古墳時代前半期の比恵・那珂の概要や周辺遺跡の解説については省略する。これらについては、福岡市埋蔵文化財調査報告書（以下、「市報告」とする）第639集（『那珂25』）、第713集（『那珂32』）、第956集（『比恵47』）に詳述したことがあるので参照されたい。以下、那珂115次で検出された古墳時代後期から飛鳥時代の遺構群に関わる遺跡の概要を記す。

弥生時代中期から古墳時代前期前半に非常に大規模集落が形成された後、古墳時代前期後半には遺構が激減し、古墳時代中期の遺構・遺物は非常に少なくなる。しかし、古墳時代中期末（須恵器TK23-TK47期）頃に剣塚北前方後円墳が築造される前後に集落の再形成が始まる。6世紀中頃（TK10期）には、三重周溝を有する大型前方後円墳の東光寺剣塚が築造され、その直後から比恵・那珂は再

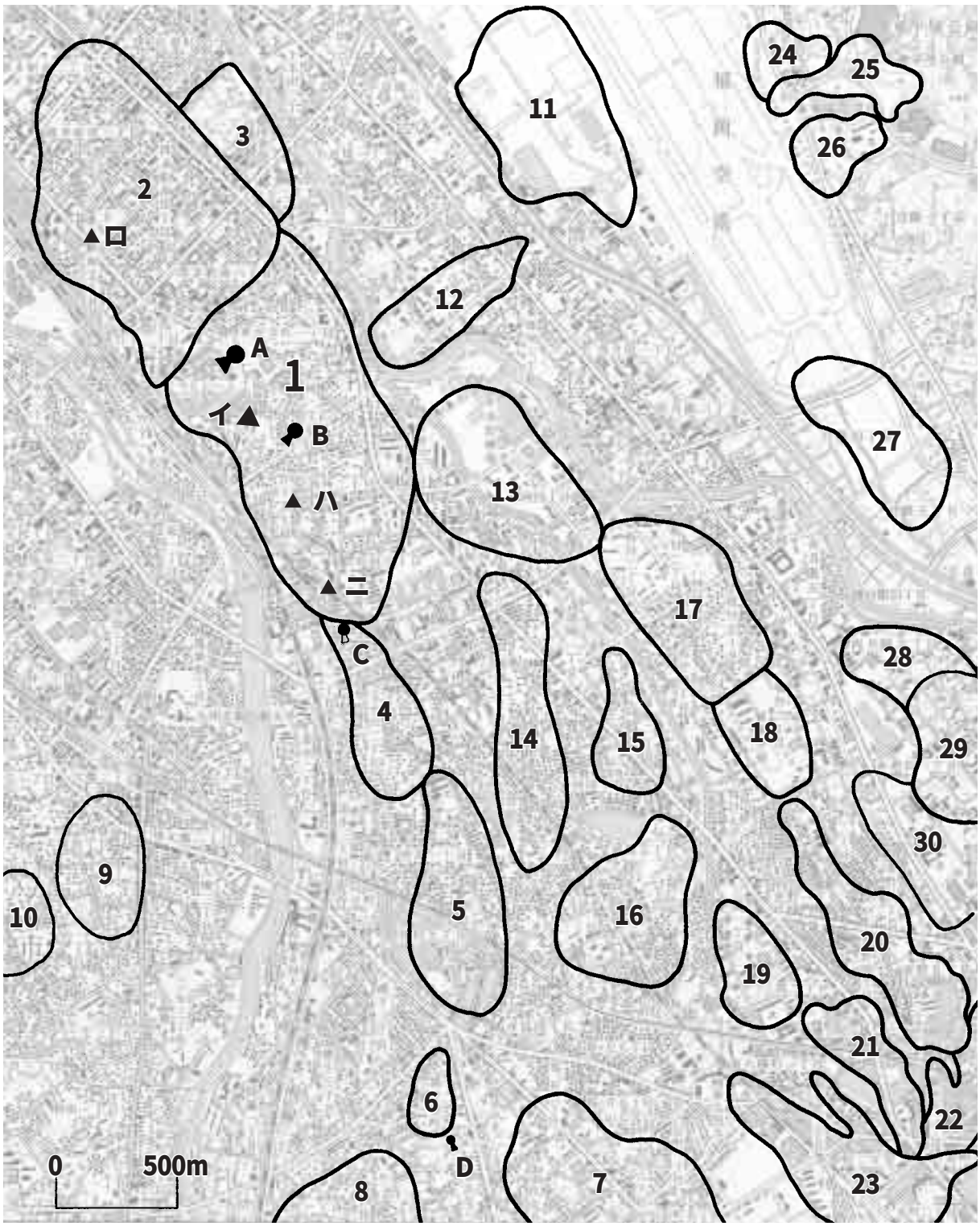


Fig.1　那珂遺跡群の位置と周辺の遺跡分布図（1/25,000）

1. 那珂遺跡群　2．比恵遺跡群　3．山王遺跡　4．五十川遺跡　5．井尻B遺跡群　6．寺島遺跡　7．須玖・岡本遺跡群　8．曰佐遺跡群　9．大橋E遺跡　10．三宅A遺跡・三宅廃寺　11．雀居遺跡　12．東那珂遺跡　13．那珂君休遺跡（那珂深ヲサ，那珂久平ほか）　14．諸岡A遺跡　15．諸岡B遺跡　16．笹原遺跡　17．板付遺跡　18．高畑遺跡　19．三筑遺跡　20．麦野A遺跡　21．麦野B遺跡　22．麦野C遺跡　23．麦野C遺跡　24．久保園遺跡　25．席田大谷遺跡（・赤穂ノ浦遺跡）　26．宝満尾遺跡　（24～26　席田遺跡群）　27. 下月隈C遺跡　28．井相田D遺跡　29．仲島遺跡　30．井相田C遺跡　A.東光寺剣塚古墳（6 世紀中頃）　B.那珂八幡古墳（古墳時代早期～前期初頭）　C.今宮神社古墳（前期古墳？）　D.須玖御陵古墳（前期初頭）　**イ．那珂115次調査**　ロ．比恵8・72次調査（「那津官家」国指定史跡）　ハ．那珂114次調査　ニ．那珂37・117次ほか調査

※上図の遺跡範囲はおよその範囲を示したものであり，埋蔵文化財事前審査窓口における分布地図上の埋蔵文化財包蔵地の範囲とはやや異なる場合があり，また調査の進展により範囲が変動する場合もあり注意されたい。

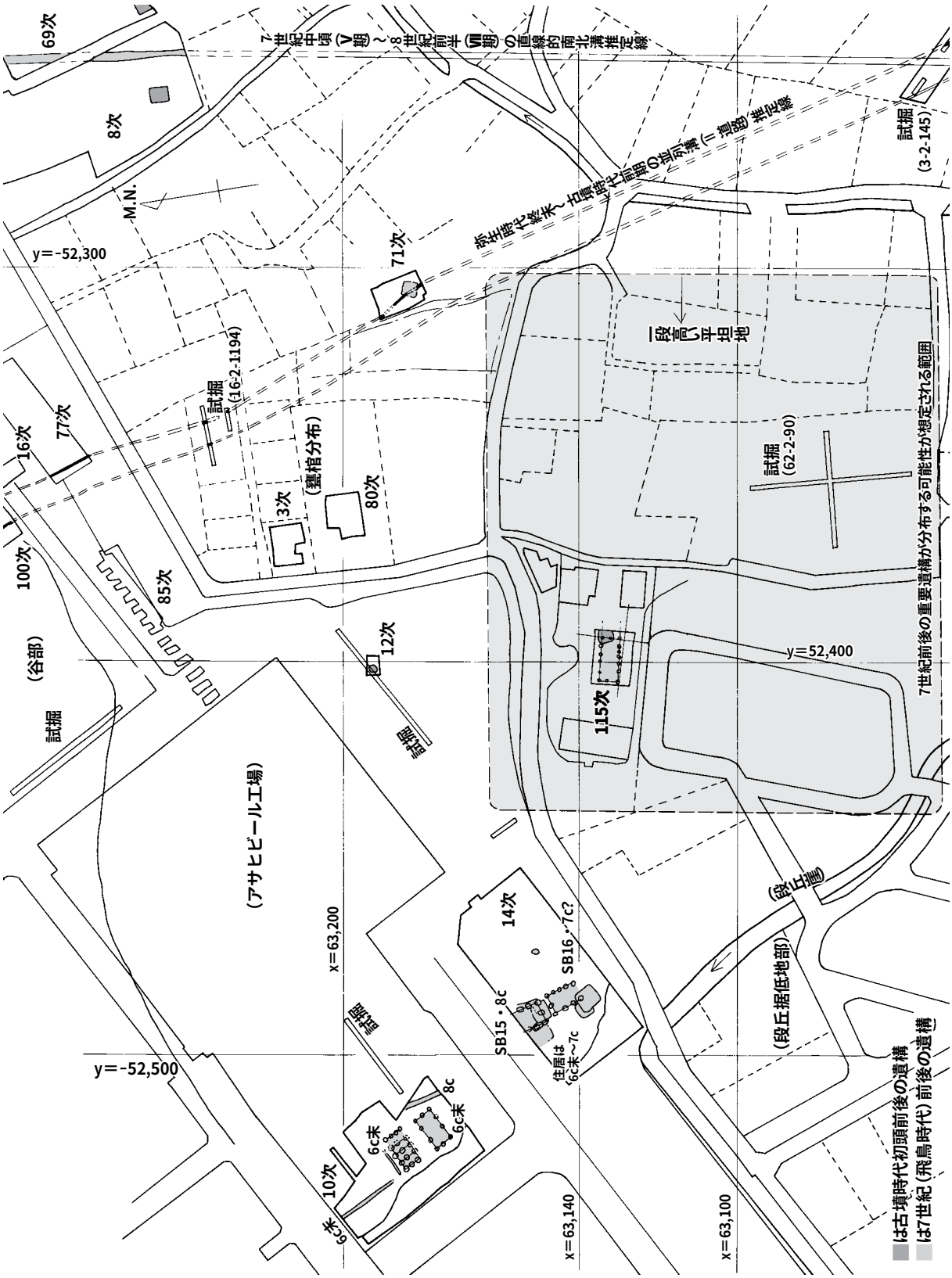


Fig. 2　那珂115次調査区の位置と周辺の調査地点（1/1,500）

び大集落となる。6世紀後半～末（MT85～TK43＝ⅢA期新相～ⅢB期）には比恵8・72次の三本柱柵列区画を伴う大型倉庫群が造営されるが（～7世紀中頃まで存続か）、『日本書紀』に見える「那津官家」の可能性が評価され、同地点は国指定史跡として保存されている（市報告第663集）。比恵の他の数地点でも同時期前後の大型倉庫建物や別の三本柱柵列区画が検出されており、その範囲と実態解明

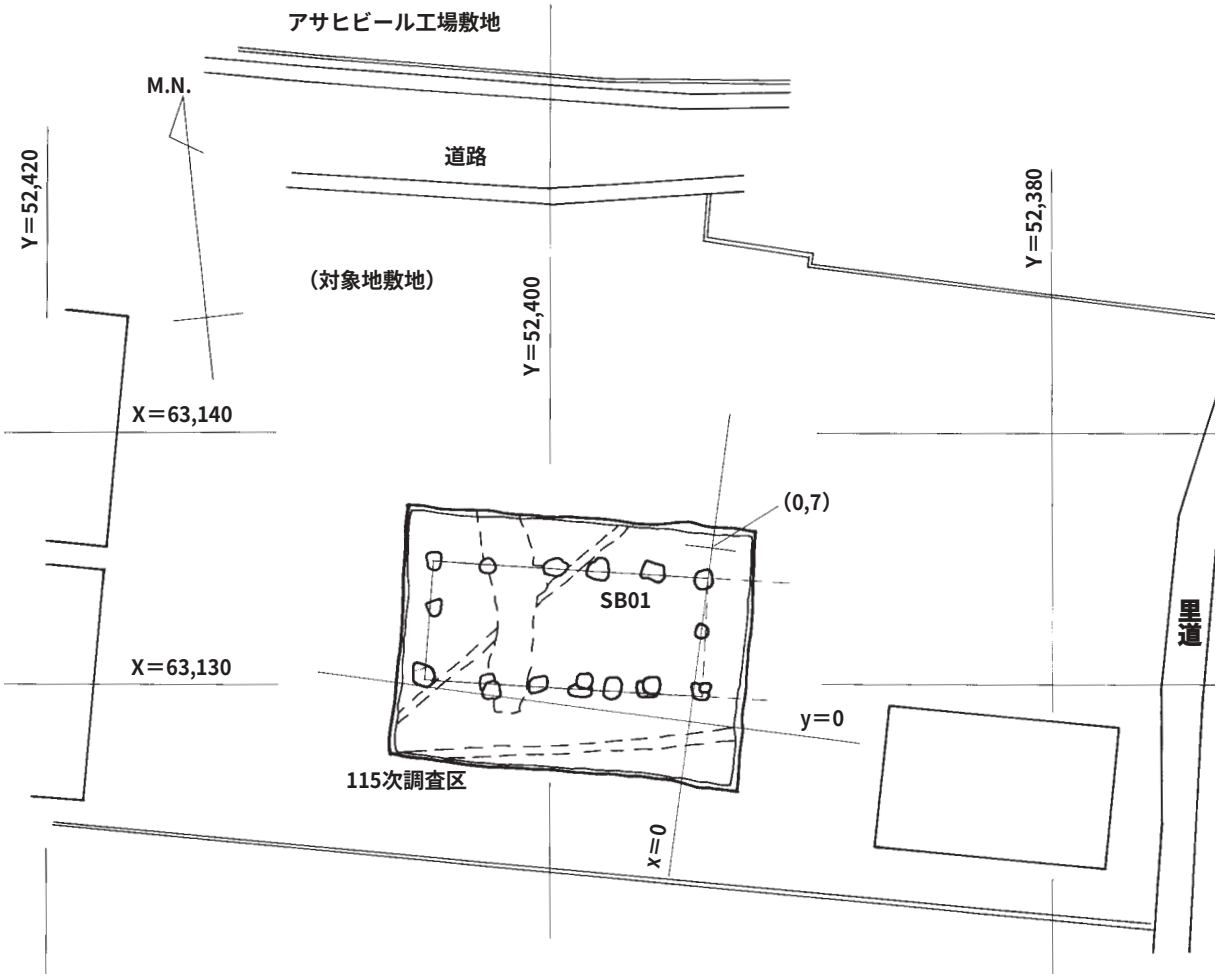


Fig. 3　那珂115次調査区位置図（1/300）

が待たれる。6世紀末から7世紀後半にかけて、初期瓦とされる特異な瓦類を含む古代瓦が那珂遺跡群の多くの調査地点で出土している（菅波正人1994「那珂遺跡群出土の古瓦について」市報告第365集）。22次では牛頸窯跡群神ノ前窯と同じ須恵器成形の「神ノ前タイプ」瓦が出土し、600年前後の土器（Ⅳ期古相）を伴い、九州最古の瓦と評価される。「神ノ前タイプ」と、より瓦として確立した次の「月ノ浦タイプ」までを出土した23次の溝は、近年の114次の成果から大型建物を伴う一辺90mの方形区画の一部となることが判明し、6世紀末から7世紀中頃の初期の官衙遺構となる可能性が高い。また那珂の南端になる37・51・56・117次等でも7世紀中頃～後半の大型建物ないし二本柱柵列が検出されている。さらに本調査（115次）では初期瓦を伴う7世紀中頃～後半の大型建物と重複する6世紀末～7世紀末の建物群が検出された。他にも比恵を含めて大型建物を含む建物群が複数地点で検出されている（菅波正人1996「那津の口の大型建物群について」『博多研究会誌』第4号、那珂68次報告＝市報告第639集参照）このような初期瓦を含む7世紀（＝飛鳥時代）の特異な遺構・遺物の性格については、「那津官家」はもちろん、初期の「評衙」、さらには大宰府政庁成立以前の「筑紫大宰」、あるいは「長津宮（＝磐瀬宮）」、「筑紫大郡」といった国家的機関（施設）の可能性も含めて検討されるべきであろう。少なくとも7世紀代中頃までにおける瓦の出土は畿内の寺院以外では非常に稀少なものでありその意味が問われ、『日本書紀』の記述から「那津」に外交・軍事拠点があったのは間違いなく、遺跡群の様相からそれは比恵・那珂遺跡群が該当する蓋然性が高い（白井克也1998「博多出土高句麗土器と7世紀の北部九州」『考古学雑誌』第83巻第4号、長洋一1994「新城「大宰府」の成立」『日本の古代国家と城』）。7世紀後半から8世紀にかけても、古代瓦や硯の出土、井戸が多いなど

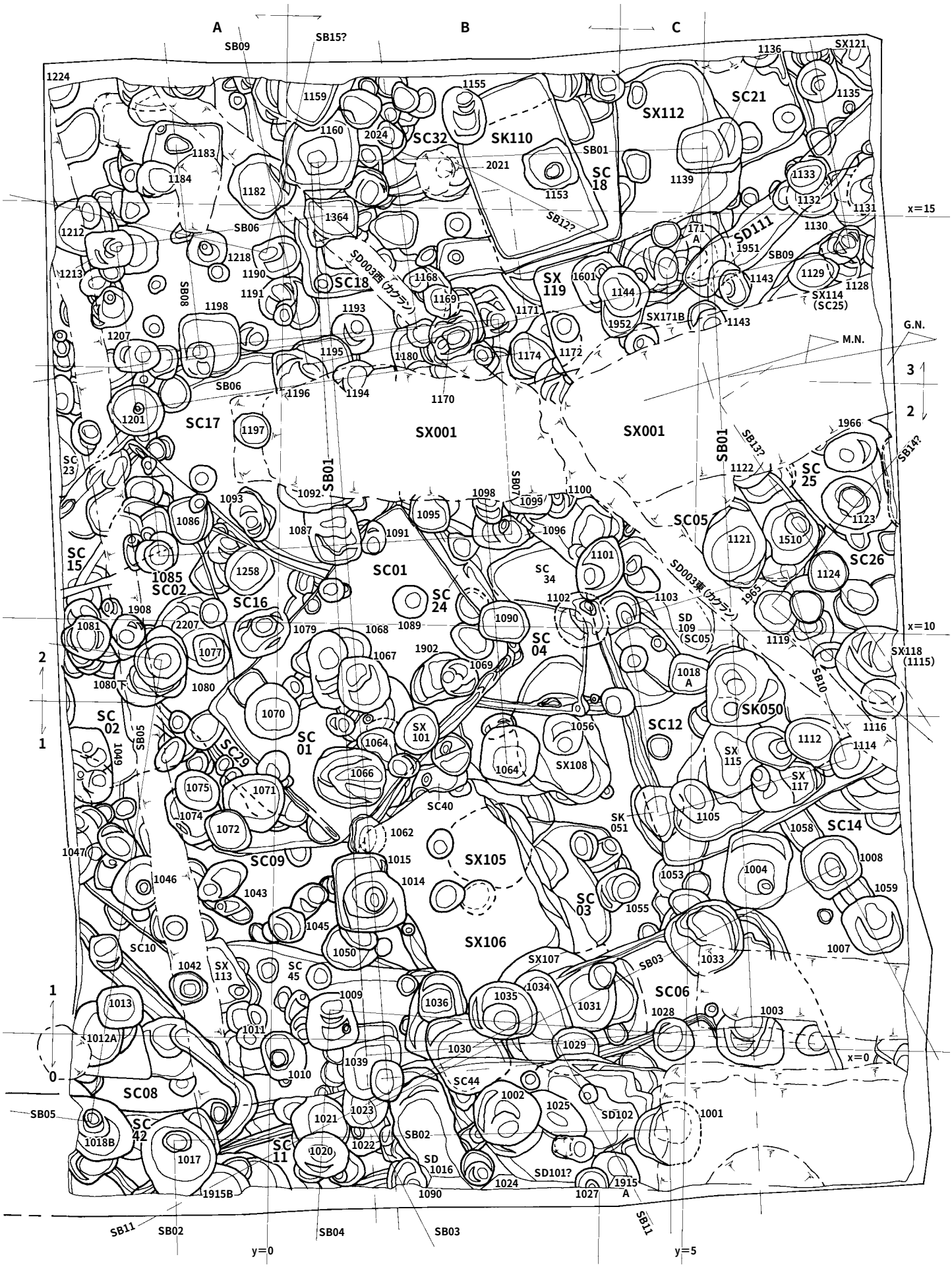


Fig. 4　那珂115次調査区全体図(遺構分布図)（1/60）

那珂遺跡群は評衙・郡衙などの地域の中心施設が存在した可能性が高い。ただし7世紀末～8世紀初頭のある時期には、南方1kmにある井尻B遺跡群に官衙遺構群が移転している可能性があり、寺院も付設し（井尻廃寺）、計画的な街区形成までされている状況が判明しつつある（市報告第923集）。

115次調査地点は遺跡群中央部の西側に位置する（Fig. 2）。敷地の現況は周囲より若干高い平坦な宅地である（Fig. 3）。調査区の西側約40mで現況地形が急に低くなるが、最近の調査で削平された遺構が検出されており（116次）、本来の遺跡分布の西限となる段丘崖はさらに西側の近世以降の水路がある位置であろう。調査地の現標高は9.80～9.95m、調査地北側の前面道路の標高は9.0～9.0mを測る。周囲では、北側に隣接するアサヒビール工場地内で数次の調査があり、115次の北西になる10・14次では6世紀後半～7世紀の竪穴住居群、6世紀末の大型建物を含む8世紀までの建物群が検出されている。各遺構や西側に落込む包含層からは7世紀末～8世紀前半の瓦や硯なども出土し、両調査区の東側がかなり削平されているが、ここに同時期の官衙遺構群があった可能性がある。115次の南東の試掘調査（事前審査番号62-2-90）では弥生時代～古代の遺構群が密集して検出されており、飛鳥時代の溝も存在する。本調査に至っていないが、今回の調査や地形を考慮すると、この付近に7世紀代の重要遺構（官衙？）が分布する可能性が考慮され（旧字名が「堂ノ上」、またアサヒビール工場内は「堀ノ内」ということも示唆的である）、今後の開発行為には特に注意が必要であろう（Fig. 2）。

Ph. 1　那珂115次調査作業風景（南西から）

Ⅱ．調査の記録

1．調査の概要（Fig. 4、PL.1−1,2、PL.5−1～4）

地表下25～40cm前後で遺構を検出した。このレベルで黄褐色鳥栖ロームの地山上面となるが、遺構がきわめて濃密なために遺構検出面の大部分が遺構覆土であり、この面で地山が露出していた部分は調査区の約1割に過ぎない（PL. 2−3）。このため、遺構検出作業は困難を極め、やむを得ず最初の表土剥ぎ後に調査区の約半分を再度重機で薄く剥ぎ（遺物は廃土から抽出）、さらに遺構覆土が真っ黒で遺構プランが不明瞭な範囲を包含層として約10cm下げた後に全体の遺構検出作業を行った（PL. 2−3,4）。遺構検出過程までの出土遺物はグリッド（Fig. 4,　A・B・C／0・1・2・3）で取り上げた。深さ60cmの竪穴住居があるなど遺構の遺存度は比較的良好であった。このような遺構の濃密さや遺存度により、掘削作業や図化記録作業に事前の積算よりも多くの時間を費やす結果となった。

検出した遺構は、6世紀中頃～7世紀末（古墳時代後期～飛鳥時代）の柱穴多数、弥生・古墳・飛鳥時代の竪穴住居多数、弥生時代中期前半～古墳時代前期の土坑および柱穴多数、弥生時代前期初頭および中期前半～後半の貯蔵穴（5基）などである。柱穴は掘立柱建物を構成するものであるが、遺構の重複が激しく組合わせが不明なものが大部分であるが、図上復元を含め15棟以上を復元・想定した。

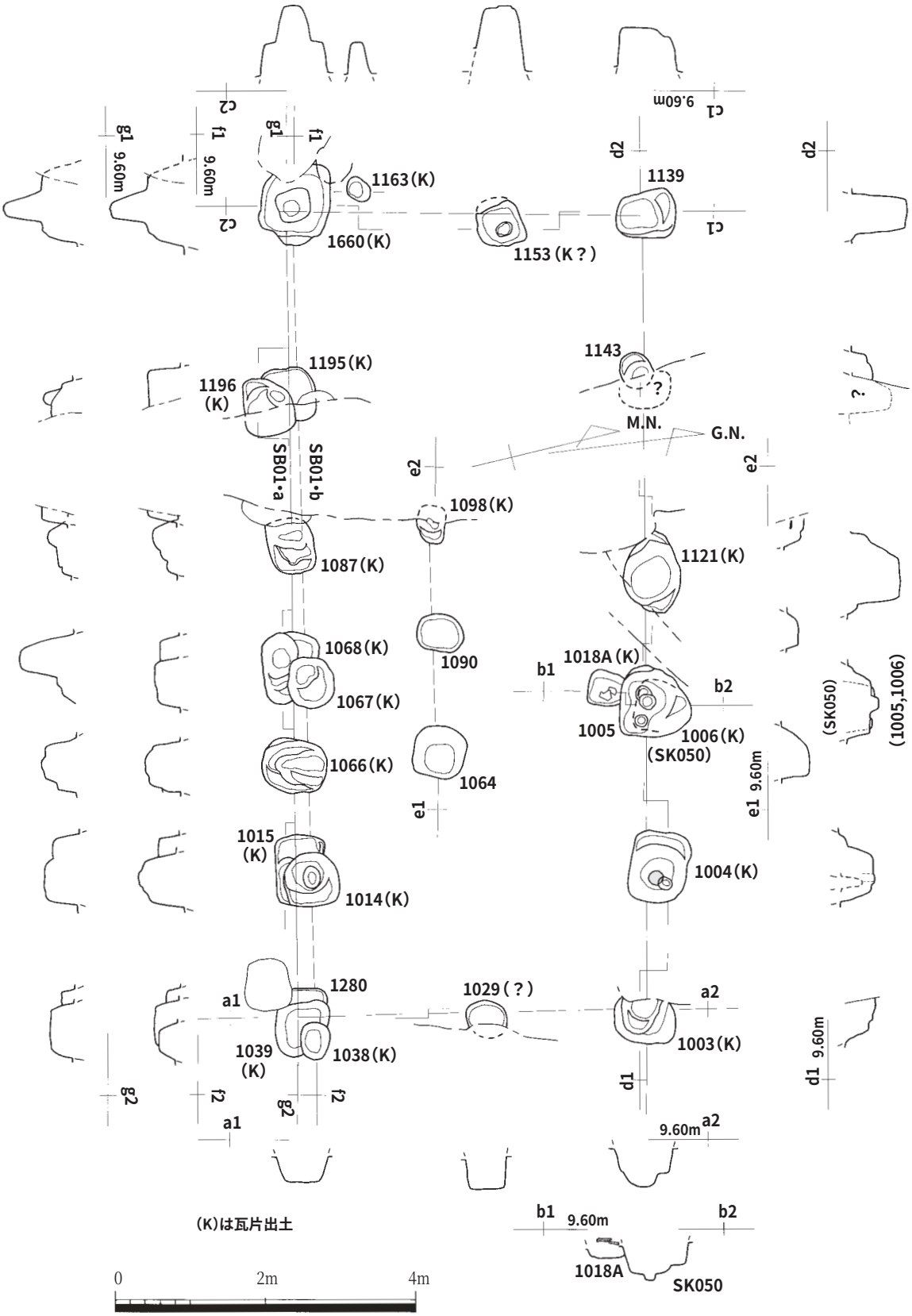
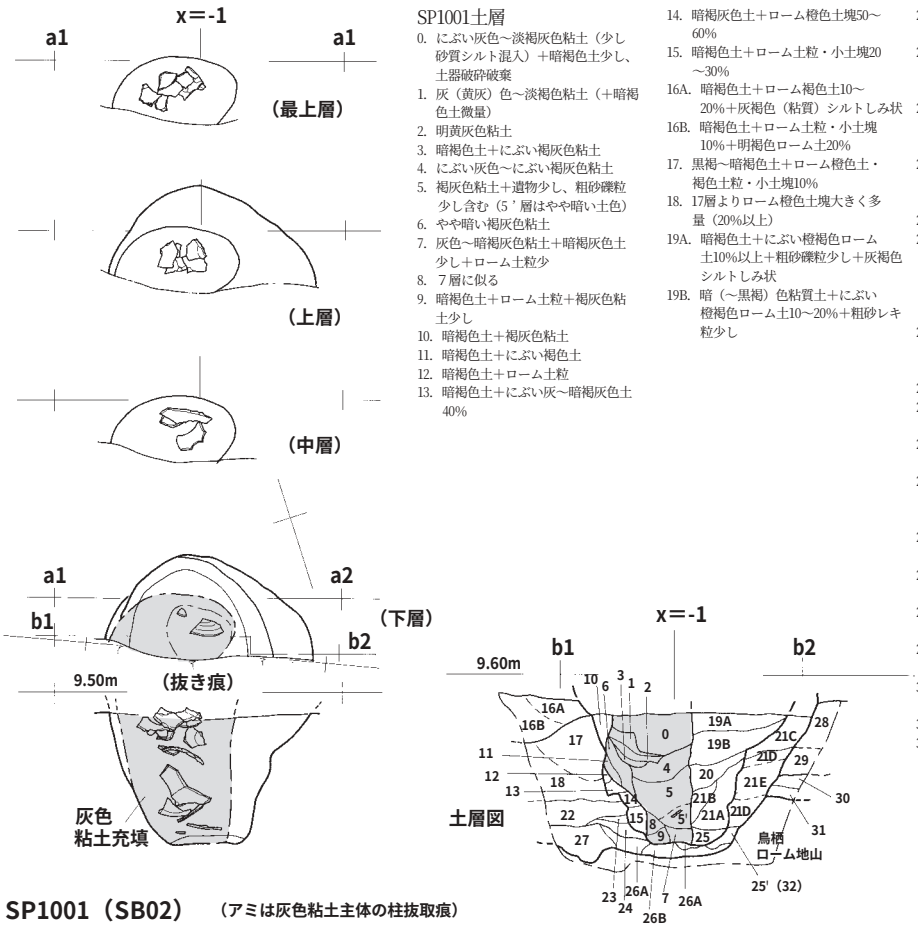


Fig. 5　掘立柱建物1　(SB01)（1/80）

竪穴住居は、遺構の重複が激しく全体形状が分かるもの僅かであるが25棟前後の存在が考えられる。竪穴住居は、重複する柱穴などとの前後関係が不明確であり（覆土上部からのものを検出できていない可能性がある）、出土遺物が伴うか不確実なために時期比定が困難であるが、弥生時代中期後半～

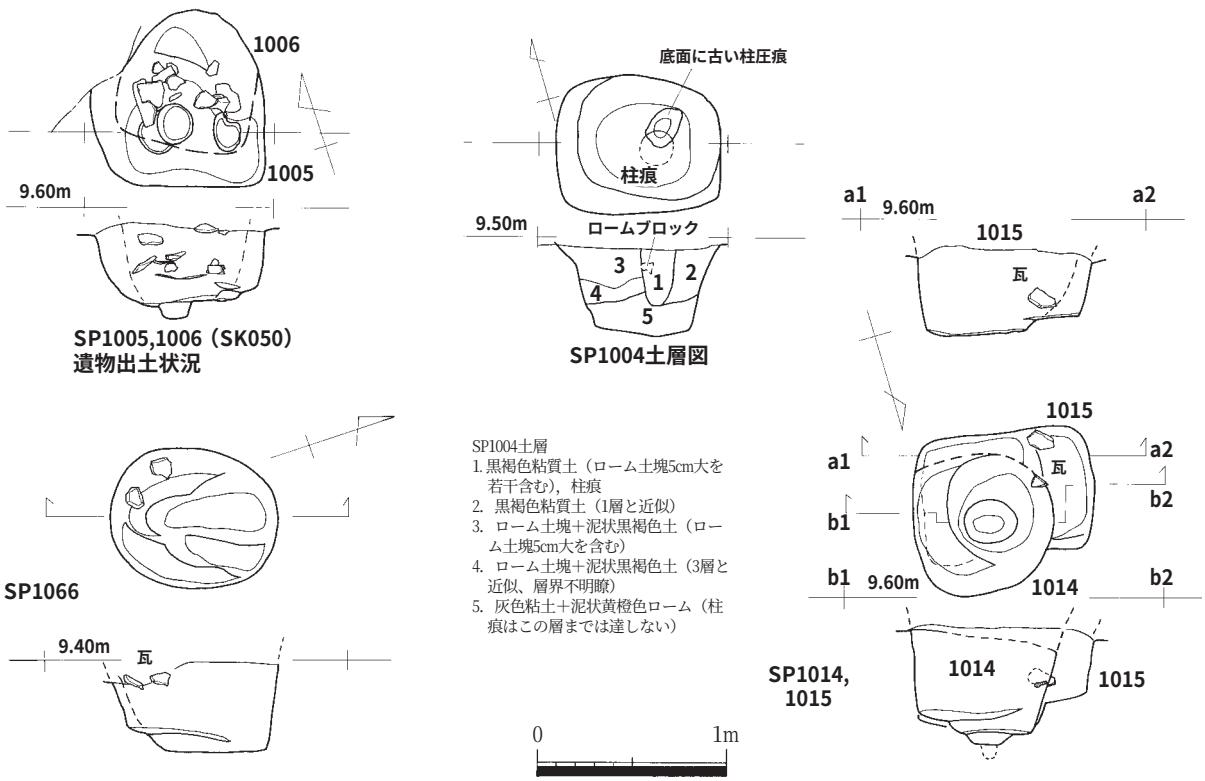


SP1001土層

0. にぶい灰色～淡褐灰色粘土（少し砂質シルト混入）＋暗褐色土少し、土器破砕破棄
1. 灰（黄灰）色～淡褐色粘土（＋暗褐色土微量）
2. 明黄灰色粘土
3. 暗褐色土＋にぶい褐灰色粘土
4. にぶい灰色～にぶい褐灰色粘土
5. 褐灰色粘土＋遺物少し、粗砂礫粒少し含む（5'層はやや暗い土色）
6. やや暗い褐灰色粘土
7. 灰色～暗褐灰色粘土＋暗褐灰色土少し＋ローム土粒少
8. 7層に似る
9. 暗褐色土＋ローム土粒＋褐灰色粘土少し
10. 暗褐色土＋褐灰色粘土
11. 暗褐色土＋にぶい褐色土
12. 暗褐色土＋ローム土粒
13. 暗褐色土＋にぶい灰～暗褐灰色土40%
14. 暗褐灰色土＋ローム橙色土塊50～60%
15. 暗褐色土＋ローム土粒・小土塊20～30%
16A. 暗褐色土＋ローム褐色土10～20%＋灰褐色（粘質）シルトしみ状
16B. 暗褐色土＋ローム土粒・小土塊10%＋明褐色ローム土20%
17. 黒褐～暗褐色土＋ローム橙色土・褐色土粒・小土塊10%
18. 17層よりローム橙色土塊大きく多量（20%以上）
19A. 暗褐色土＋にぶい橙褐色ローム土10%以上＋粗砂礫粒少し＋灰褐色シルトしみ状
19B. 暗（～黒褐）色粘質土＋にぶい橙褐色ローム土10～20%＋粗砂レキ粒少し
20. 暗褐～黒褐色土ローム橙褐色土土粒・小土塊20%＋粗砂粒少し入る
21A. 暗褐（～黒褐）色粘質土＋ローム土塊（大・小）・ローム土粒30%，土器片含む，粗砂わずか
21C. 黒褐（～暗褐）色土ローム小土塊・土粒10%＋灰色（灰褐色）粘土土塊しみ状（10%）
21B. 黒褐（～暗褐）色粘質土＋ロームにぶい橙（橙褐）色小土塊10～20%
21D. 21層中でもローム土塊多い
21E. 21A層に近いが層界にローム土塊少なく上下に21D層があり21A層と分かれる（※最終的な平面プランと写真による検討の結果、21層が分離された。）
22. 黒褐色土＋ローム橙色土大土塊・橙褐色土80%（一部八女粘土塊わずか）
23. 黒褐色粘土＋ローム土粒10%
24. 暗褐色土（～にぶい褐色土）＋ローム橙色土大土塊70%
25. 暗褐色土＋ローム小土塊・土粒40%
26A. 暗褐色粘質土＋橙色・橙褐色土ローム土塊（一部灰色粘土塊少し）20%
26B. 暗褐色粘質土＋ローム橙色土塊60～70%
27. 暗褐色土20%＋褐色（にぶい褐色）粘質土40%＋橙色ローム土塊40%
28. 黒褐色土＋にぶい褐色土10%（住居埋土か）
29. 黒褐色土＋にぶい橙色ローム土小土塊20～30%
30. 黒褐色土＋ローム土小土塊・土粒60%＋暗褐色土10%
31. 橙色ローム土塊90%＋黒褐色土
32. 25層に近いが（25'）、黒色土多い（前後の関係から分層される）

SP1001（SB02）　（アミは灰色粘土主体の柱抜取痕）

SB01柱穴



SP1004土層

1. 黒褐色粘質土（ローム土塊5cm大を若干含む），柱痕
2. 黒褐色粘質土（1層と近似）
3. ローム土塊＋泥状黒褐色土（ローム土塊5cm大を含む）
4. ローム土塊＋泥状黒褐色土（3層と近似、層界不明瞭）
5. 灰色粘土＋泥状黄橙色ローム（柱痕はこの層までは達しない）

Fig. 6　SB02（SP1001），SB01（SP1005・1006，1004，1066，1014・1015）柱穴（1/40）

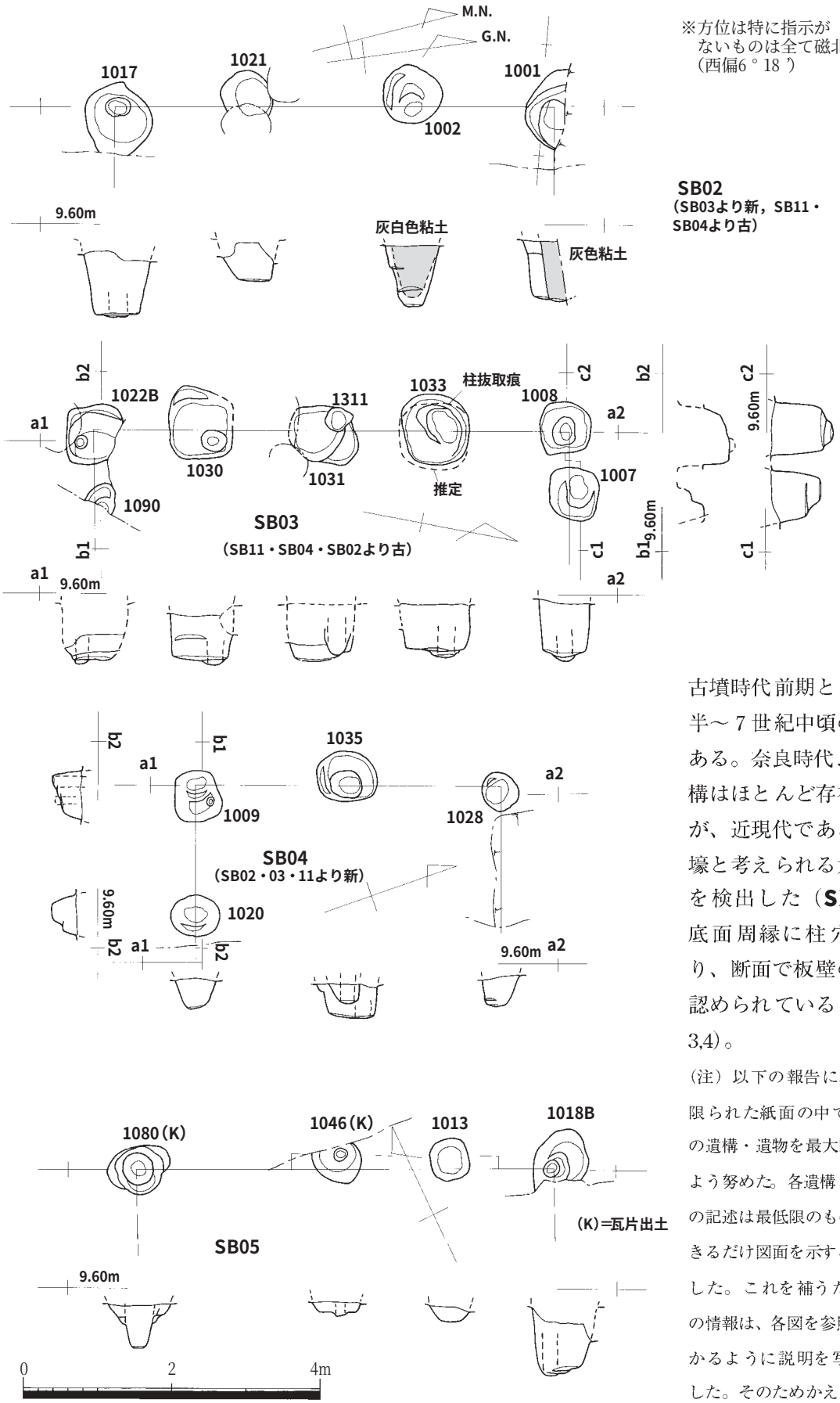


Fig. 7　掘立柱建物2　（SB02, 03, 04, 05）（1/80）

※方位は特に指示がないものは全て磁北（M.N.）（西偏6°18′）

古墳時代前期と6世紀後半～7世紀中頃のものがある。奈良時代以降の遺構はほとんど存在しないが、近現代であるが防空壕と考えられる大型土坑を検出した（**SX001**）。底面周縁に柱穴列があり、断面で板壁の痕跡が認められている（PL.6-3,4）。

（注）以下の報告においては、限られた紙面の中でより多くの遺構・遺物を最大限報告するよう努めた。各遺構と出土遺物の記述は最低限のものとし、できるだけ図面を示すことを優先した。これを補うため最低限の情報は、各図を参照すれば分かるように説明を写植で挿入した。そのためかえって見づらい点もあるかと思われるが、ご

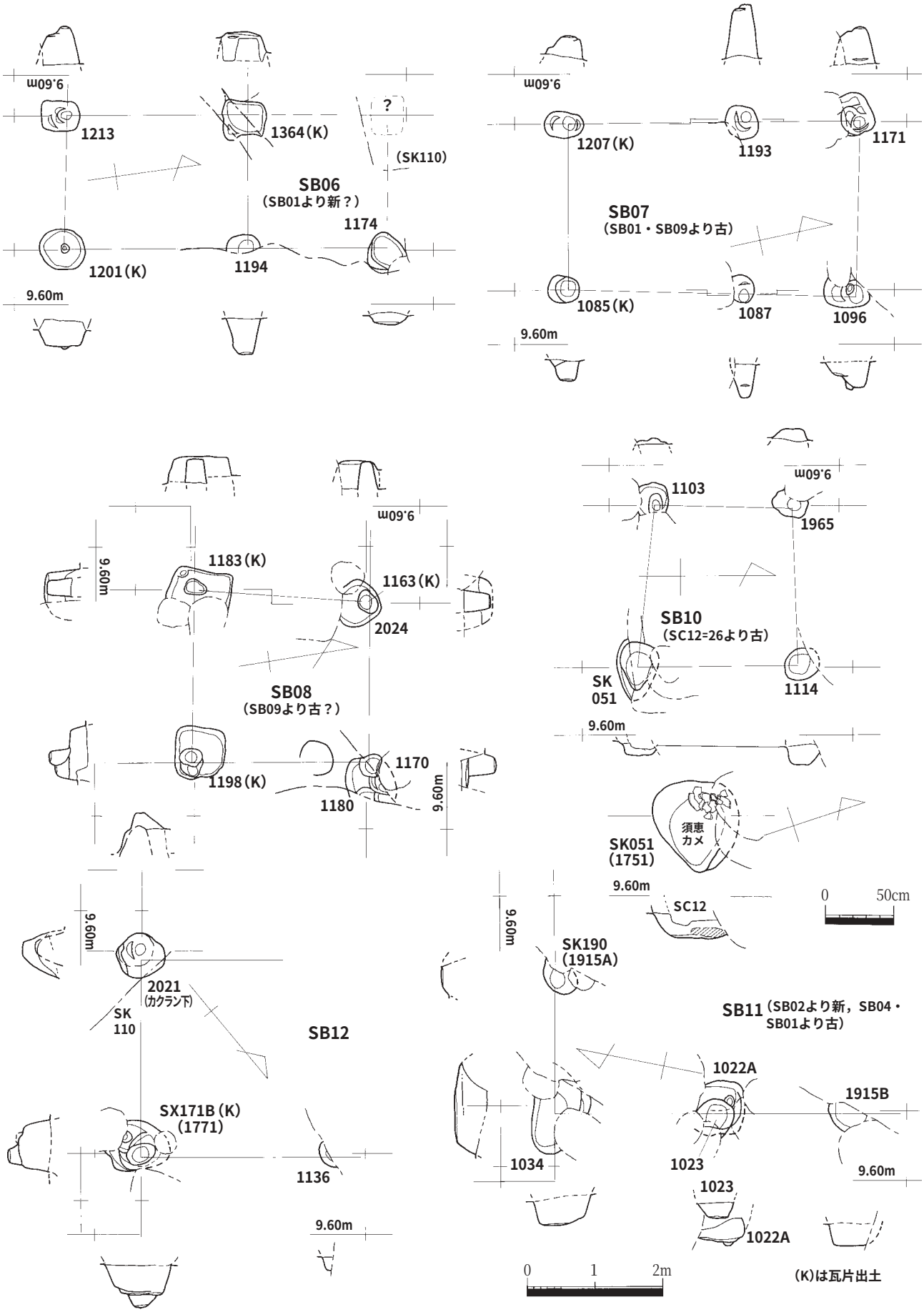
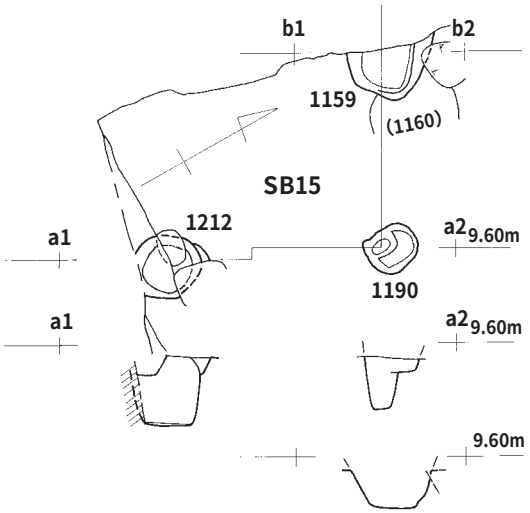


Fig. 8　掘立柱建物3　(SB06, 07, 08, 10, 11, 12)（1/80）

容赦いただきたい。また本書では、主に7世紀について「飛鳥時代」（推古朝から平城京遷都まで）とする。飛鳥時代を前後する須恵器編年は小田冨士雄による大別を用いるが（九州編年）、その細分と実年代観の根拠については、久住猛雄1999「出土須恵器の編年とE−2・3号墳の築造・追葬の年代について」（『羽根戸南古墳群』市報告第661集）によるので参照されたい。

2．検出遺構

1）掘立柱建物（Fig. 5〜9） 本調査ではきわめて多くの柱穴を検出した。調査時においては、遺構のあまりの重複のため一部の建物（SB01、SB02、SB03）しか認識できなかったが、整理過程においていくつかの建物を図上復元した。この中には、柱穴が少なくやや疑わしいものもあるが、大型柱穴については建物の一部として活かすようにした結果である。ただし柱穴の出土遺物は細片まで全てチェックして矛盾が無いように注意した。6世紀末〜7世紀（須恵器ⅢB〜Ⅵ期）の柱穴は比較的大型のものが多い。一見井戸のような深さ150cm前後、径100cm弱の柱穴も認められた。また比較的新しい柱穴（Ⅳ期中頃〜Ⅵ期）の覆土（埋土）には、**粗砂粒や粘土ブロックの多い覆土のもの**や



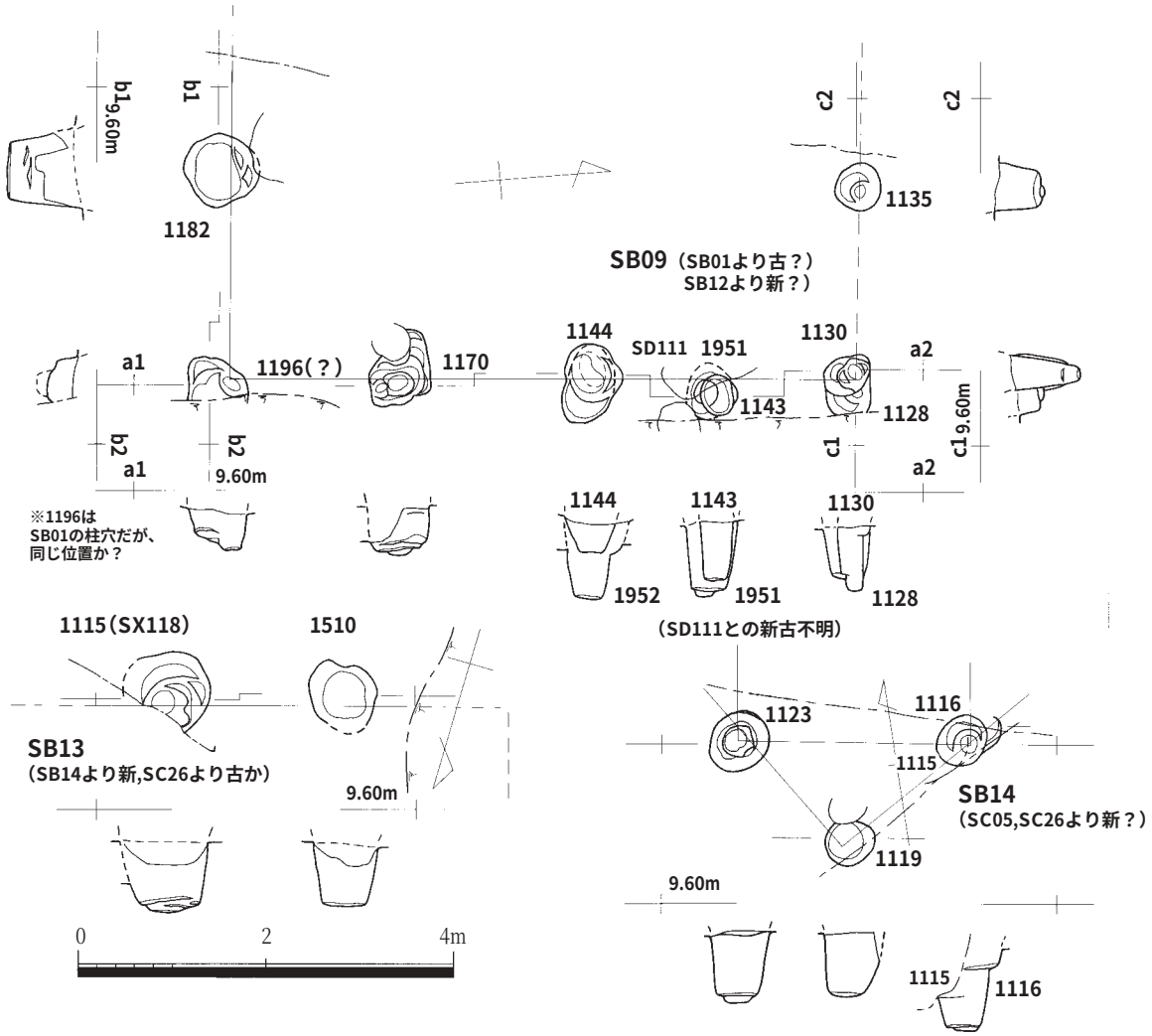


Fig. 9　掘立柱建物4　（SB15, 09, 13, 14）（1/80）

(**SB01**)、柱抜取跡に灰色粘土を詰めたもの(**SB02**)もある。さらに7世紀中頃～後半の柱穴には瓦片を含むものが少なくなく、それらはほとんどが掘立柱建物として復元できた(SB01、SB05～08)。瓦葺き建物であろう。

SB01（Fig.5、PL.6-5、PL.7-1～4）　2間×6間（以上）の大型建物。うちSP1029は切合から疑問で、さらに東側に延びる長大な建物か。4.8×10.9m以上。N（以下磁北）-77°-W（長軸基準）。大部分の柱穴から瓦片が出土。多くは柱抜取跡の出土だが（Fig.6 下段）、瓦片は建替前の古い柱穴にもあり、新しい柱穴の掘方にも伴っていた可能性がある。つまり当初から瓦葺き建物であったと判断する。最低一回の建替があり、南側柱穴列で明確である（北側柱穴列も底面に複数の柱圧痕が確認で

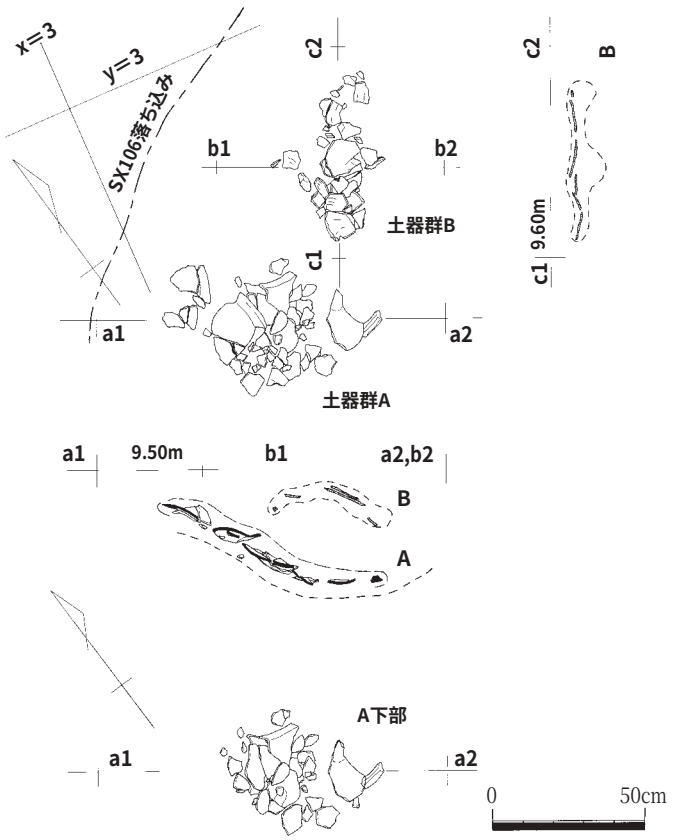


Fig.10　SX105（SX106上部）土器出土状況（1/25）

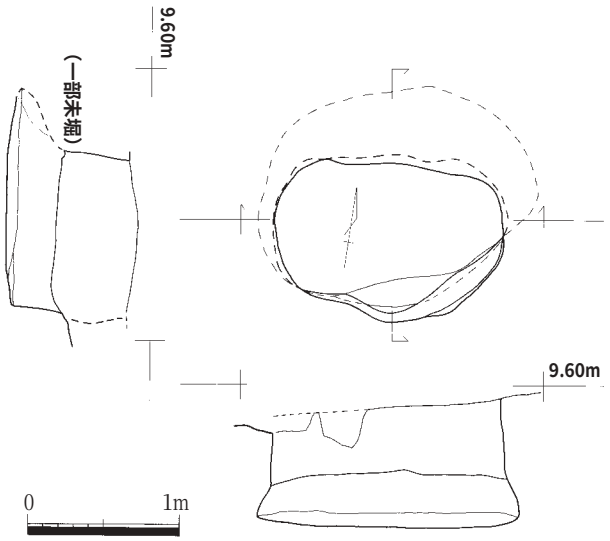
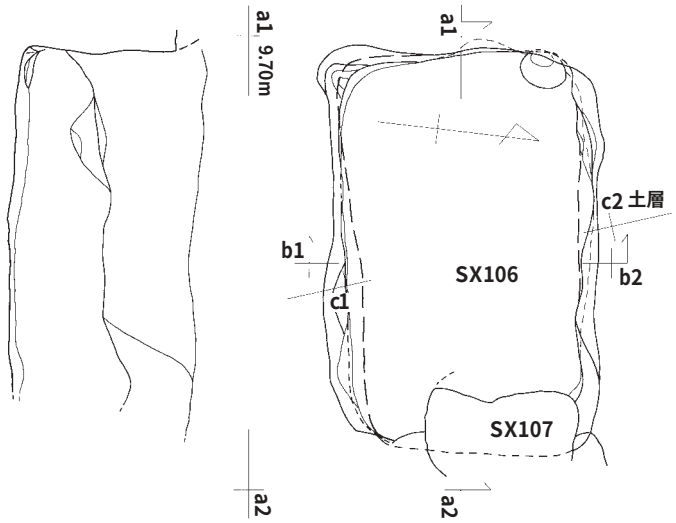
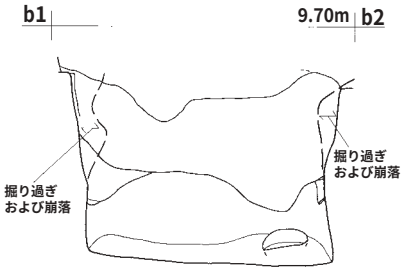
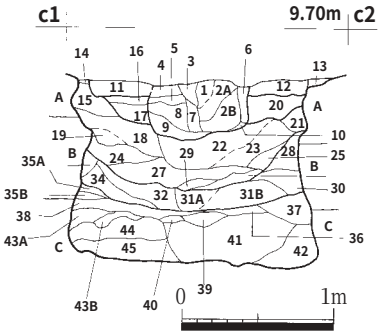


Fig.12　SX108（貯蔵穴）実測図（1/50）







SX106（貯蔵穴）土層

1. 暗褐色土+灰色土（暗灰色シルト）30%+粗砂礫粒
2. 黒褐（～暗褐）色土+ローム土粒・小土塊5%，2A層は灰色土しみ状+粗砂入る（1層に近い）
3. 黒褐色土（+ローム土粒），しまりあり堅い
4. 1層との関係は微妙（下の層との関係から分離），黒褐色土+ローム土粒+灰色土塊15%
5. 8層に近いが，灰色（暗灰色）土少し含む
6. 7層に近い，黒褐～暗褐色土+暗橙色ローム土粒40%
7. （黒褐～）暗褐色土+ローム土粒・橙色土粒（・小土塊）、灰白色八女粘土土粒20%
8. 黒褐色土+ローム土粒・八女粘土土粒10%
9. 黒褐色土（～暗褐色土）+ローム土小土塊・ローム土粒および八女粘土小土塊20%、17・22層より褐色気味
10. 黒褐色土（ローム土粒少ない）
11. 暗褐～黒褐色土・しまりあり堅い、ローム土粒+にぶい褐色土含む、灰色土系のしみ（11層は灰色土土塊5%含む）
12. 11層と同じ
13. 暗褐色土+ローム褐色土30%+しまりあり堅い
14. 黒褐色土+暗褐色土+しまりあり堅い
15. 黒色～黒褐色土+ローム土粒少し+暗褐色土少し、18層に連続
16. 黒色土+にぶい褐色ローム土少し・ローム土粒（17層よりローム土粒多い）
17. 黒褐色土（～黒色土）+ローム土粒少し、土器片あり、暗褐色土わずか
18. 黒色土～黒褐色土、ローム土粒ややあり（5%）、ローム小土塊少し
19. 18層に近いか、ローム土粒、ローム小土塊やや多い（15%）
20. 黒褐色土、ローム土粒・やや多い・15%以上、全体にまじる（ほりあり）
21. 黒褐色土+暗褐色土40%+ローム土粒
22. 黒褐色土+ローム土粒少し
23. 黒褐色土+ローム土粒やや多め
24. 黒褐色土+ローム土粒・ローム土小土塊10～20%
25. 黒褐～暗褐色土+ローム土粒多い（30%）+ローム小土塊（少）
26. 暗褐色土+ローム土粒・ローム土小土塊40%
27. 24層に近いが、ローム土粒・小土塊やや少（10%）+黒褐色土
28. 暗褐色粘質土70%以上+ローム土粒・小土塊20%+黒褐土少
29. 黒褐～暗褐色土+橙色ローム土塊・土粒50%
30. 37層とほぼ同じ、にぶい褐色ローム土含む

31A. にぶい褐色ローム粘質土
31B. にぶい橙色～明橙褐色ローム土ほぼ100%
32. ローム土大土塊+小土塊60%+ローム土粒若干+暗褐～褐色土30%+黒褐色土5%
33. にぶい橙褐色ローム土80%+褐色土
34. 黒色～黒褐色土+橙色ローム土塊20%
35A. 黒褐色土+ローム土粒・小土塊20%
35B.（にぶい）橙褐色ローム土70%+暗褐色土

36. 暗褐色土+橙色ローム土塊・ローム土粒50%斑状
37. 36より暗くない（明るい）褐色土+ローム土塊・土粒60～70%
38. 黒褐色粘質土80%+暗褐色土10%+橙色ローム土小土塊・土粒10%
39. 31A層と同じ
40. 黒褐色粘質土（+暗褐色土・ローム土粒少し）
41. 褐～暗褐色土+橙色ローム土塊60%～70%
42. 褐～暗褐色土+橙色ローム土塊80%
43A. 橙色ローム土塊80%+暗褐～褐色土
43B. ローム土塊60%+暗褐～褐色土
44. 橙色ローム土大土塊90%+暗褐～褐色土
45. 暗褐色土+橙色ローム土塊50～60%
A. 明褐色～橙褐色ローム地山
B. にぶい橙褐色ローム地山
C. 橙褐色ローム+浅橙色～浅黄色粘土混じりの地山層（八女粘土への漸移層）

Fig.11　SX106（貯蔵穴）実測図（1/50）

きるものがある)。多くの柱は抜取りされたとみられるが、新しい柱痕が残るものもある（Fig. 6、PL.3-9 SP1004 ）。庇の有無を検討したがおそらく無い。屋内に棟持柱列があった可能性がある。各柱穴からは、Ⅳ-4期からⅥ-1期の土器が出土し（Fig. 25-35～38、26-1,5、28-1, 5, 8, 17, 19, 20, 22, 28, 31, 35, 40, 41、29-1～14、27-19,20?)、Ⅳ-4～Ⅴ期に建てられ、Ⅴ期中に建替があり、Ⅵ-1期のうちに廃絶したか。すでに説明したような粗砂混じりの特異な覆土（柱抜取痕埋土か）の柱穴が多く、整地層（建物基壇としての盛土層）の存在が示唆される。SB03、SB11、SB09、SB07より新しく、SB06、SB15、SB04に切られる。官衙遺構群（？）の中心建物か。

SB02（Fig. 7上）　？×３間（以上)、南北6m（以上）の建物で東側に展開する。N-7°-E（ほぼ真北)。深い柱穴が多い。**SP1001**と**SP1002**（PL. 3-7）は柱抜取痕に**灰色粘土**を埋めるが、SP1001はその過程で大甕や土器片を意図的に埋納している（Fig. 6上段、PL.3-1～6)。SB11より古く、SB03より新しい。Ⅳ-2～3期（Fig. 24、25-13～15)。

SB03（Fig. 7中上）　１間以上×４間（以上)、南北8.2mの建物で東側に展開する。N-10°-W。柱間が狭い。Ⅳ-1期か（Fig. 25-43)。SB02、SB11より古い。

SB04（Fig. 7中下）　１間（以上）×２間、南北4m。

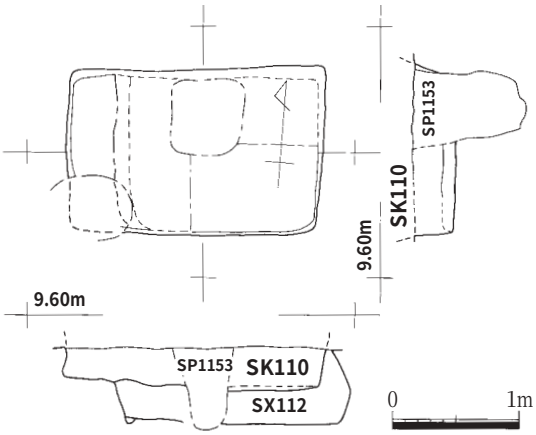
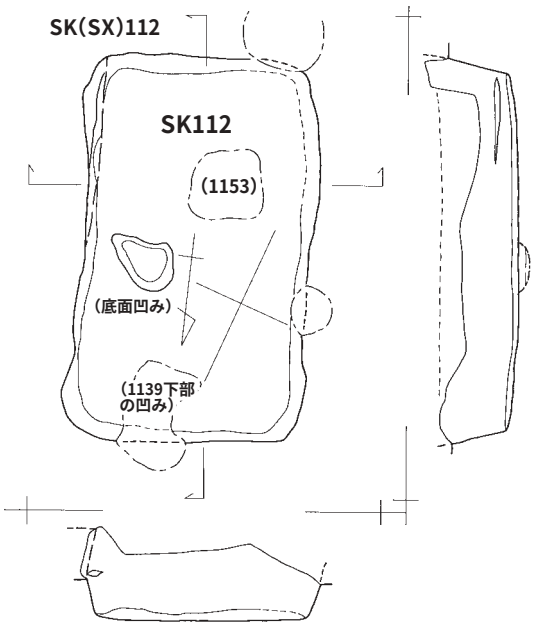


Fig. 14　SK110実測図（１/60）



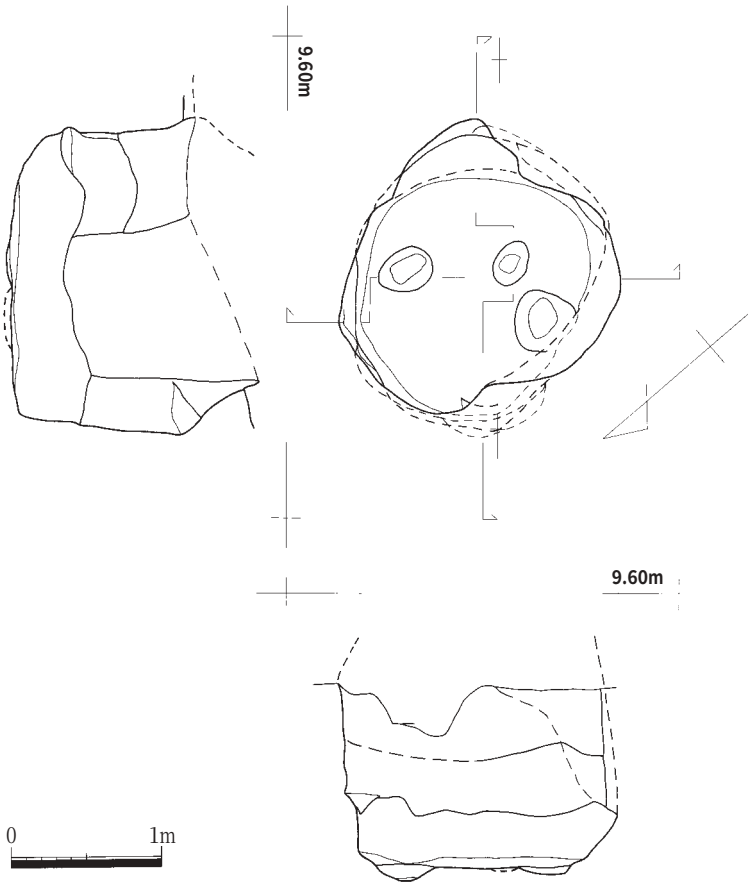


Fig. 13　SX107（貯蔵穴）実測図（１/50）

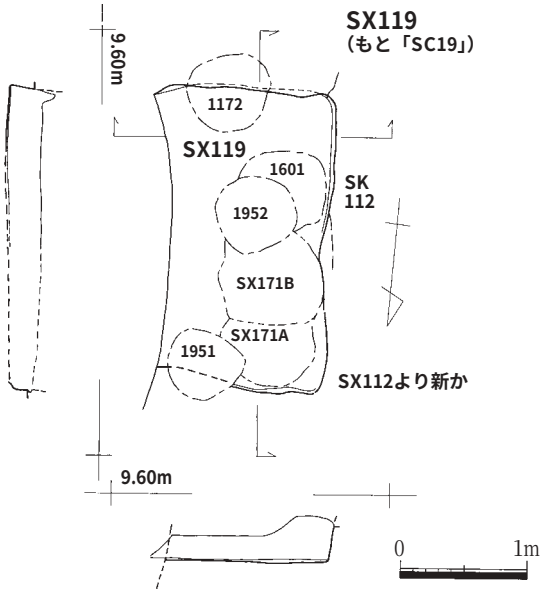


Fig. 15　SK112, SX119（貯蔵穴か？）実測図（１/60）

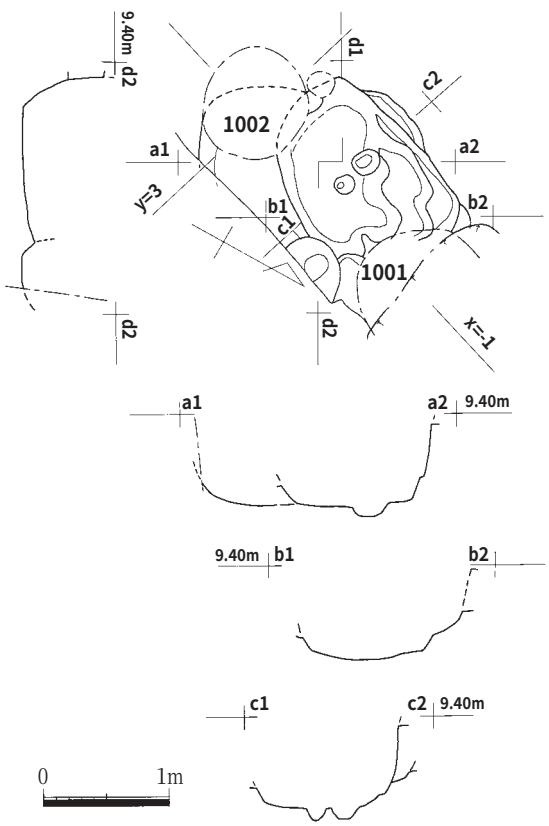


Fig. 16　SD（SK）102実測図（1/60）

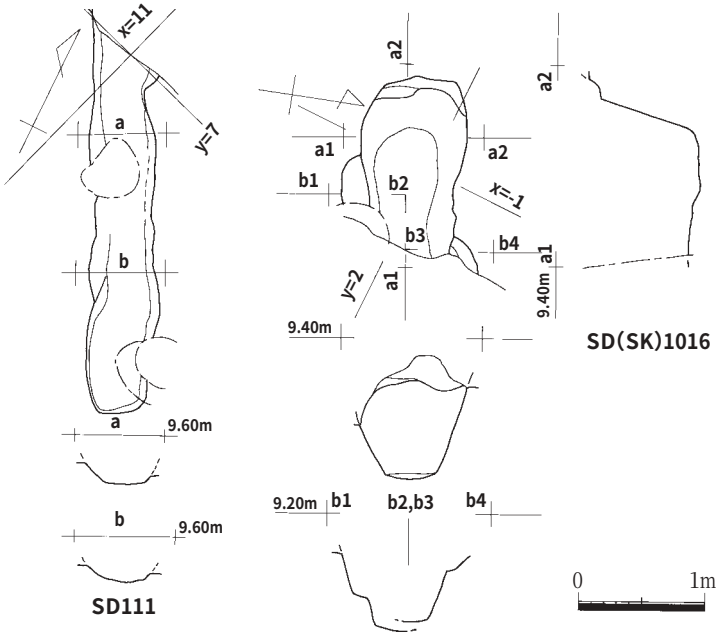


Fig. 17　SD111, SD（SK）1016実測図（1/60）

N-70°-W。柱穴はやや小さい。SB01を切り、Ⅵ-2期の坏がある（Fig.25－24）。

SB05（Fig. 7下）　？×3間（以上）、東西5.6m（以上）。N-65°-W。両端の柱穴が深いが他は浅く束柱か。2柱穴から瓦出土。SB15（瓦出土）と方位軸が合う。

SB06（Fig. 8上左）　1×2？間、2.4×4.8m。N-8°-E。北西隅はSK110内で検出漏れか。Ⅵ期？の高坏があり（Fig. 26-35）、SB01を切る。

SB07（Fig. 7上右）　1×2間、2.3×4.3m。N-13°-E。SB01、SB09より古い。坏G蓋の古い型式が

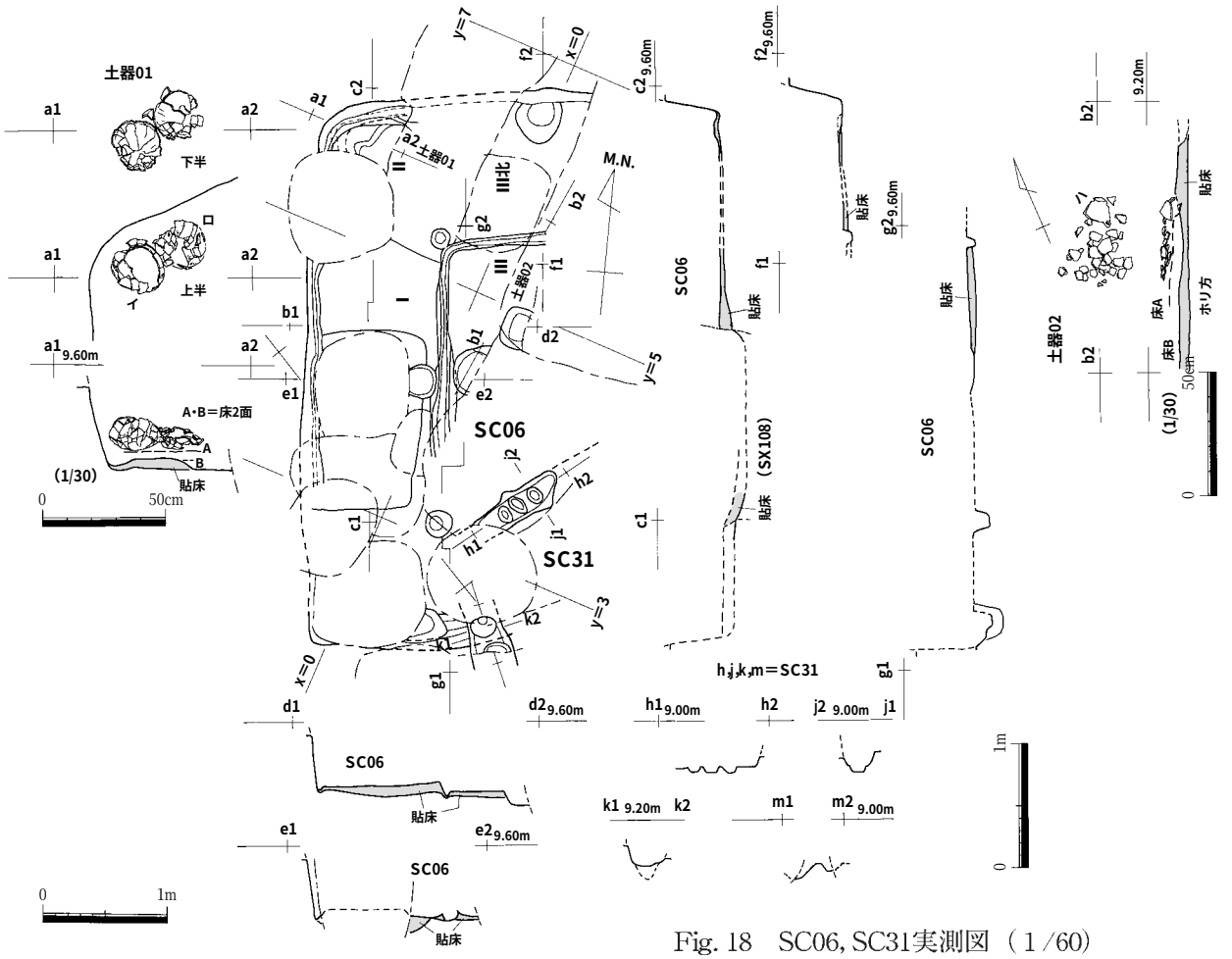


Fig. 18　SC06, SC31実測図（1/60）

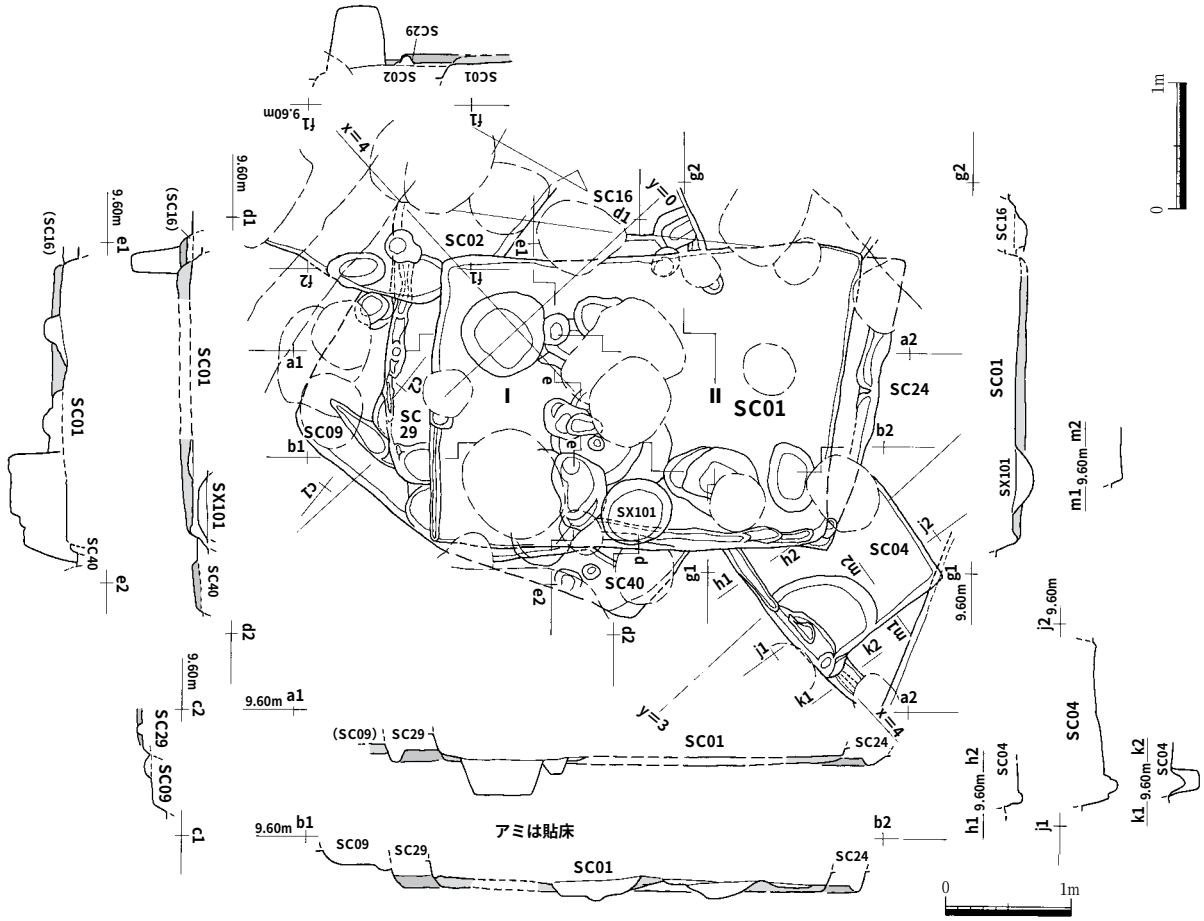


Fig. 19　SC01, SC24・29, SC09, SC04ほか実測図（1/60）

ある（Fig. 28-1）。Ⅳ-3期か。

SB08（Fig. 7中左）　1間以上×1間以上、2.5×2.6m以上。N-10±°-E。南西にさらに展開か。SB09に切られるか（SB01より古い）。3柱穴から瓦片が出土。Ⅳ-4～Ⅴ期か（Fig. 28-36～39）。

SB10（Fig. 7中右）　1×2間、2.3×2.4m。N-0°-W。SC12より古い。SK051から須恵器の甕が出土し（PL. 7-5）、ⅢB期か（Fig. 26-14）。

SB12（Fig. 7下左）　1？×1間（以上）、2.9×3.1m。N-50°-W。SX171Bから瓦片が出土したとするが混入か。SB09より古く、SK110に切られるとみられ、弥生時代か。

SB11（Fig. 7下右）　1×2間（？）、2.0×4.4m。N-11°-W。SB01より古く、SB02を切るように見えるが関係は微妙。SB03と同軸で重複し、前後するものか。

SB15（Fig. 8左上）　1×1間以上、2.0×2.3m以上。N-61°-E。南西側に展開する。SB01を切るか。SP1159から大甕片が出土（Fig. 27-34）。切合からⅥ期以降か。

SB09（Fig. 8中）　1間以上×4間、2.0m以上×6.7m。N-5°-E（ほぼ真北）。SB01より古い。SD111（SC05?）との関係が微妙。

SB13（Fig. 8下左）は1×？間、2.0×？m以上。N-73°-E。大型柱穴を結んだもの。SC12より古く、SB14より新しいか。Ⅳ期前半だろう。**SB14**（Fig.下右）は1間以上×1間以上、1.6m以上×1.7m以上。N-32°-E。SC12床面下で検出し、SB13より古い。Ⅳ-1期か（Fig. 27-1,2）。

2）土坑・貯蔵穴（SKまたはSX）（Fig. 10～15）

SX105（Fig. 10、PL. 7-7,8、PL. 8-1）　当初「SC03」とした土器溜。精査・検討の結果、当初の認識の長方形プランは*下部のSX106*の平面形上部であり、SC03はSX105の一部を含む。*SX106→上層にSX105の掘込み（プラン不明）→SC03*となる。Fig. 10の土器群Aと土器群Bはレベルが異なり、

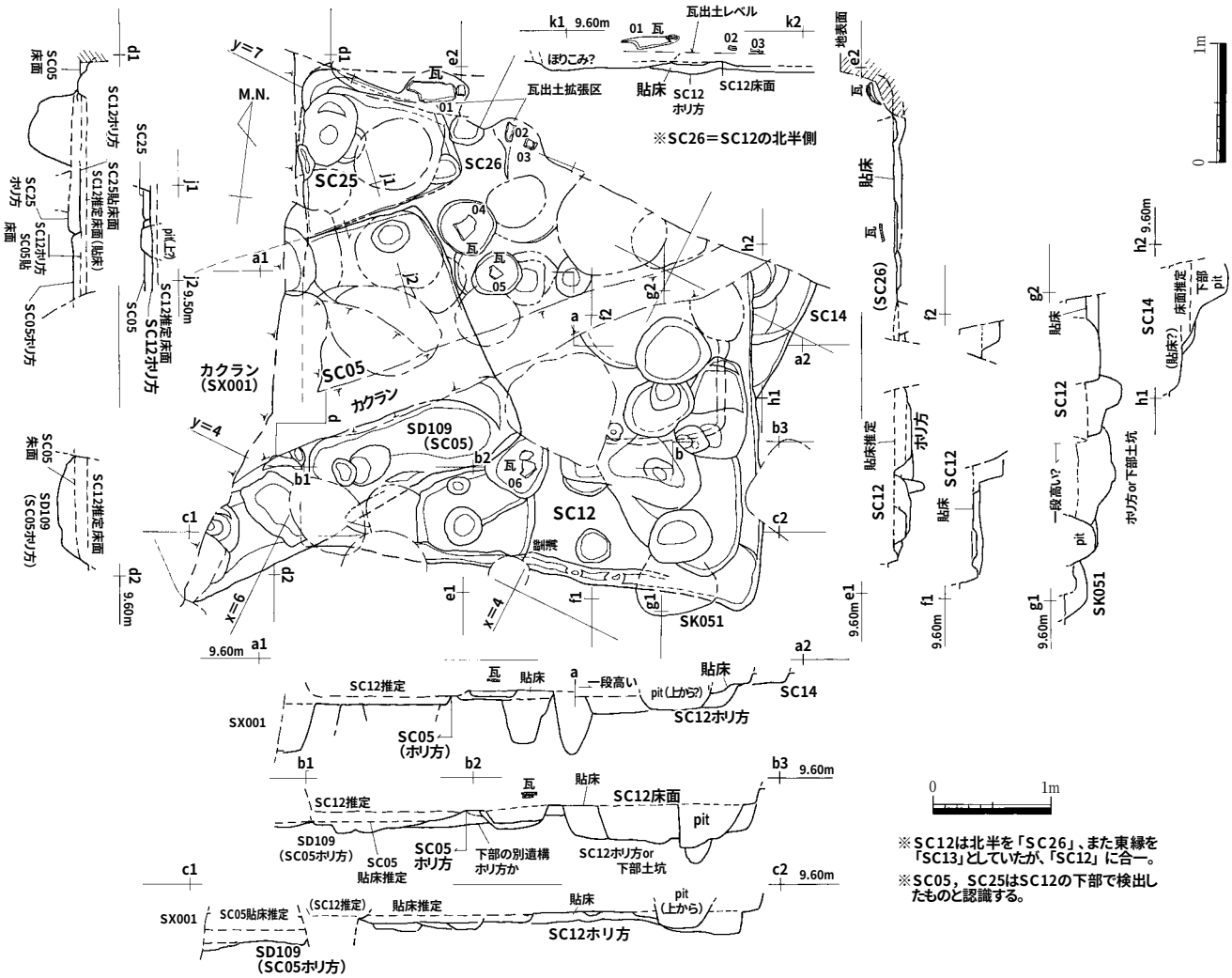


Fig. 20　SC12（＝26）, SC05, SC25実測図（1/60）

ＢはSC03に伴うか。調査では３遺構の関係を区別できなかった。土器Ａ（Fig. 36-1）は弥生時代終末、他の土器（Fig. 29-15～27）はSC03（古墳時代中期？）の土器が混入するが、Fig. 27-16はSX105か。

SX106（Fig. 11、PL. 4-1,2、PL. 8-3）　当初「SX105」として掘り始めた遺構。途中で貯蔵穴と気付き別遺構としたが、調査時は遺構番号に混乱がある。上面160×265cmの長方形プラン貯蔵穴。深さ130cmの遺存。壁面は、本来は下部が裾広がりとなるが上部が崩落。土層から人為的埋戻しが推測される（PL. 4-1）。SX107に切られる（PL. 4-2）。板付Ⅰ式期（やや新相）か（Fig. 30-4～9）。

SX108（Fig. 12、PL. 8-2）　上面100×150cmの略楕円形プランの貯蔵穴。深さ90cmの遺存。南側を除き、底面へ向かって壁面が著しくオーバーハングし、特に北側で顕著。板付Ⅱa式期か（Fig. 30-1）。

SX107（Fig. 13、PL.8-4,5）　上面1.5×1.9m（推定）の不整円形プランの貯蔵穴。深さ125cmの遺存。壁面はわずかにオーバーハングする。SX10.6を切る。SC06の下部にあり、SX107上部のSC06貼床は落込みがあったためか非常に厚くなっている。板付Ⅰ～Ⅱa式期（Fig. 30-1,2）。

SK110（Fig. 14、PL. 4-3、PL. 9-2）　155×205cmの長方形土坑。深さ35cm。下部に**SK112**があり、遺構の違いに気付かず約半分を掘りすぎた（PL. 4-3）。また、覆土を切る新しい柱穴を認識できていない（SP1153以外にもあったか）。須恵器も混入するが、弥生時代終末か（Fig. 30-10～19）。

SK112，SX119（Fig. 15、PL.8-6、PL.9-1）　**SK112**は195×305cmの長方形プランの土坑。深さ70ｃｍ。規模と一部壁面にオーバーハングがあることから貯蔵穴か。埋没後に**SC18**の貼床あり。**SX119**に切られるか。須玖Ⅰ式新相～Ⅱ式古相か（Fig. 31-1～9）。須恵器・土師器は混入だろう（**SC21**？）。**SX119**はSK112を切る1.5（以上）×2.4mの長方形土坑。深さ35cm。はじめ竪穴住居SC19としたが

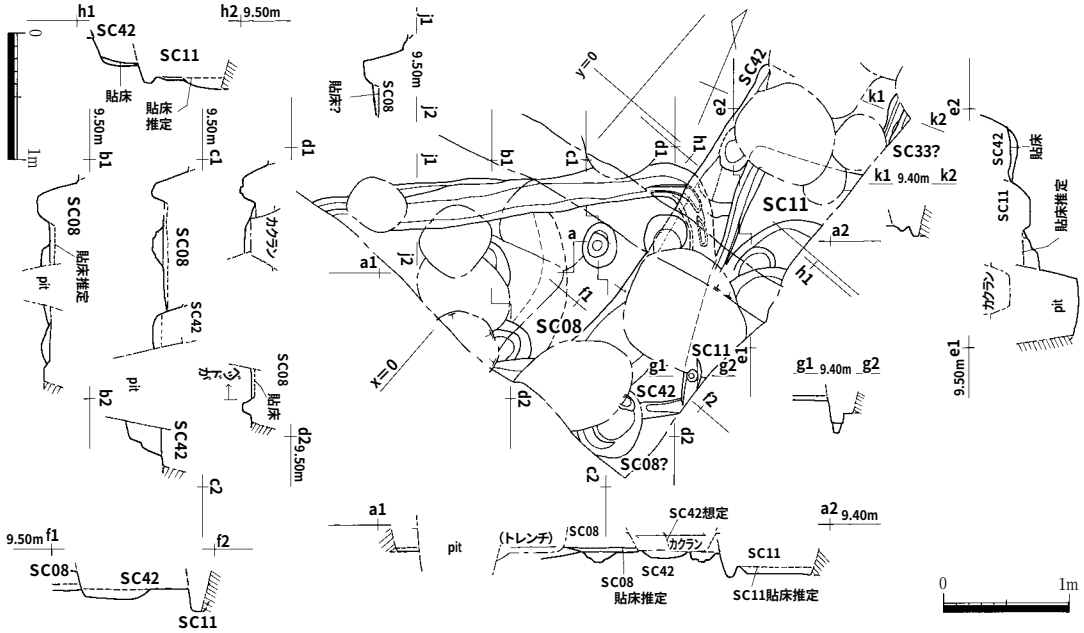


Fig. 21　SC08, SC42, SC11ほか実測図（1/60）

貼床が無く、壁面の一部（南側）にオーバーハングがあり貯蔵穴か。須玖Ⅱ式期（Fig. 31-11～15）。

3）溝状遺構（SD）（Fig. 16,17）

SD102（Fig. 16）　調査区東縁は全て遺構覆土であり（PL. 6-2）、初め「**SD001**」として溝の存在を考えたが、「１面下」で複数遺構の重複と判明した（PL. 2-6）。SD102はその一部。埋没後にSB02に切られSC06を切る。プランや規模が不明確だが、深さは60～70cm。ⅢＢ期か（Fig. 31-16～18）。

SD111（Fig. 17左）　幅50～60 cm、3.2m長以上。深さ20 cmだが東側の立ち上がりが不明確で、位置的に**SC05**の西側の掘り方になる可能性がある。SB09に切られるか（不明確）。Ⅳ期（Fig. 31-19）。

SD（SK）1016（Fig. 17右）　当初は大型柱穴**SP1016**と考えたが、規模・形状から土坑または溝とした。85×140cm以上、深さ100 cm。埋没後SB01～03などに切られる。ⅢＢ期以前（Fig. 25-3～8）。

4）竪穴住居（SC）（Fig. 18～23,48）

25 棟前後を推定した（Fig. 48）。遺構検出面の遺構覆土の大部分を占める。竪穴住居の深さは 45 cm程度のものから、検出面直下で床面となってしまう浅いものまでがある。古墳時代後期以降（６～７ｃ）の住居は浅いものが多く、比較的小型が主体でカマドを持たず、主柱も無いものが多い。６～７ｃの住居は重複が激しく、比較的短期間で建替、移動をする集落状況が考えられる。

SC06（Fig. 18、PL.9-3～6）　2.2m以上×4.5mの方形住居。深さ45cm。残る２辺に低いベッドが付設。周壁周囲と中央土間部周囲に壁周溝がある。貼床あり。北西隅と中央土間部の床直上面に土器が出土したが、この数cm下にも床面があり、建替が想定される。主柱穴は不明。SC06下部で別の住居の壁周溝を検出した（**SC31**）。古墳時代前期前半（ⅡＢ～ⅡＣ期）の土器を出土（Fig. 32-1～7,36-2）。

SC01（Fig. 19、PL. 9-7、PL. 10-2）　2.3×3.1～3.3mの長方形、深さ（掘方）20cm強の遺存。2辺に壁溝。貼床あり。主柱穴無し。Ⅳ期前半か（Fig. 31-20～27）。**SC29**、**SC24**はSC01の直前の住居（建替）か。**SC09**はSC29に切られる住居（PL. 10-3）。SC29ないしSC09出土土器はⅢＢ～Ⅳ期古相（Fig. 32-21,22）。**SC02**はSC16とSC29を切り、SC01に切られる。土器はⅢＢ～Ⅳ期（Fig. 32-11～15）、切合からⅣ期か（32-14はⅣ期高坏）。SC01東辺に焼土の分布があり（**SX101**）、カマドの可能性を考えたが、断面精査の結果、SC01覆土を切る上部からの土坑(炉)と判断した（PL. 4-4、10-1）。

SC04（Fig. 19）　東辺に壁溝あり。一段低い中央土間部を検出か。主柱穴不明。北側はベッドと考えられるが検出面直下で床面となる。南・西側も同様にベッドで一段高いと考えられるが範囲不明。

SC01とSC24に切られる。古墳初頭（ⅡA期）か（Fig.31-28）。

SC12(SC26)（Fig.20、PL.2-5、PL.3-10、PL.10-5,6）　推定約4.0×4.0mの方形住居。深さ10～20cmの遺存で（掘方）、検出面直下で貼床面になってしまった範囲もある。南辺に壁溝があり、東辺と北西部もあった可能性がある。主柱穴は無いようである。貼床の厚みが場所により異なり、掘方の凹凸が激しいが（PL.10-6）、他の前後する遺構とあまり区別できていない。**瓦片が出土する**が（PL.4-5、3-10）、出土レベルが揃っておりそのレベルの床面の時期があった可能性がある。平面形が南西部で歪み、建替による重複があったか。**SB01に切られ、その直前か。**須恵器大甕片や土師器の精製ⅢからⅣ期新相～末であろう（Fig.33-1～17）。掘方下部の古い遺構（**SP1127**ほか）に古墳時代初頭（ⅡA期）の土器（Fig.27-28,29、32-9,10、36-3）がある。

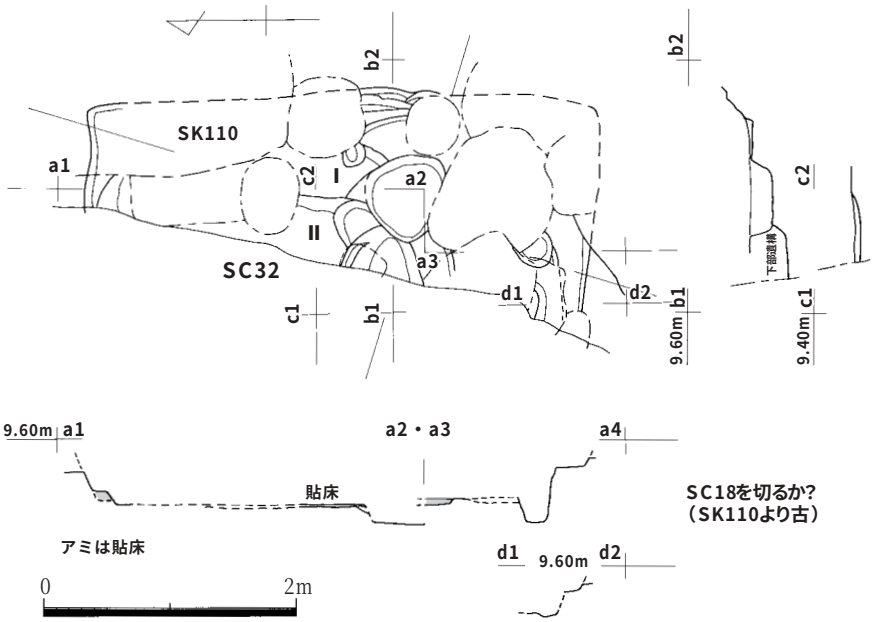


Fig.22　SC32実測図（1/60）

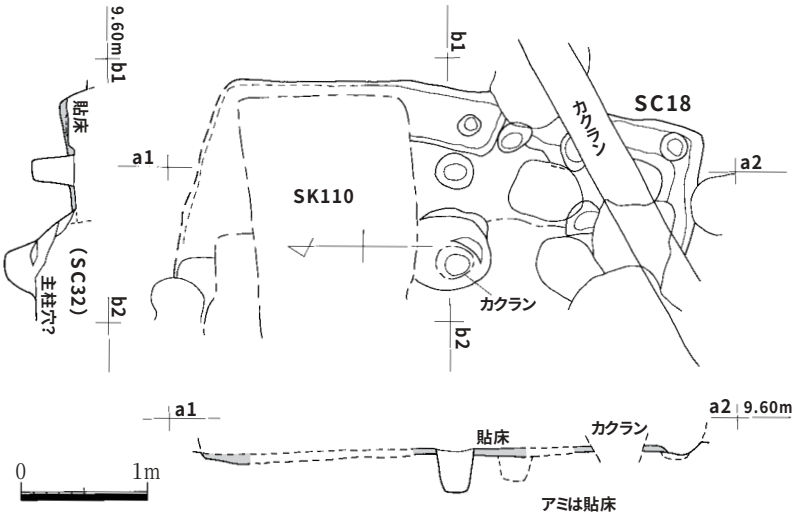


Fig.23　SC18実測図（1/60）

SC05、SC25（Fig.20、PL.10-5）　いずれもSC12の下部の検出と認識し、SC12掘方直下で貼床面となるか。**SC05**は、南側を掘方まで掘ってしまい、その凹みを「**SD109**」としたが竪穴住居の一部と判断する。西側は攪乱で破壊されるが、2.9×3.2mの長方形か。SC25との関係は微妙（SC05が切ると見たが出土土器の新古は逆か）。**SC25**も当初はSC12との関係が不明なまま掘ってしまった。攪乱SX001を挟んで西側の**SX114**と同一か。この場合3.0以上×3.1mの方形。**SD111**が掘方西縁となる可能性あり（その場合約6.0×6.0mか）。以上2棟は相前後する時期で、Ⅳ期中頃～新相か（SC05はFig.33-19～21、SC25はFig.33-16）。SC25→（？）SC05→SC12は比較的短期間か。

SC08、SC42、SC11（Fig.20、PL.2-6、PL.10-4）　**SC08**は2.5以上×3.2m、深さ20cm強の遺存。北辺から北東隅に幅広の壁溝あり。SC42に切られ不明確だが南東側に屋内仕切溝があり、SC08北側2mは一段高いベッドの可能性がある。ⅢB～Ⅳ期古相の土器があるが（Fig.32-17,32）、住居型式から疑問で、弥生後期～古墳前期か（遺構重複で須恵器が混入か？）。**SC42**はSC08を切る。1.0以上×3.2m以上。深さ20～25cmの遺存。ⅢB期か？（Fig.32-19は混入？）。SC11は壁溝の検出レベルで認識したが、SC08を切り、おそらくSC42を切るとしたが微妙である。SB02・03より古い。ⅢB期か？。

SC18、SC32（Fig.22,23、PL.10-7,8）　SC32がSC18の貼床を切ると判断した。**SC32**は東～南側が

僅かに一段高くベッドか。SK110に切られる。1.9以上×4.1mの方形、深さ25～35cmの遺存。住居型式は弥生後期～終末期で、弥生中期や6～7ｃの土器は混入か（Fig. 32-23,24,28～30）。**SC18**は1.8以上×3.9mの方形。深さ15～20cmの遺存。東・南辺に壁溝あり。SX112の上に貼床、SK110に切られ、須恵器も混入するが住居型式から弥生後期か。以上2棟は伴う遺物が不明確である。（※→26頁へ。）

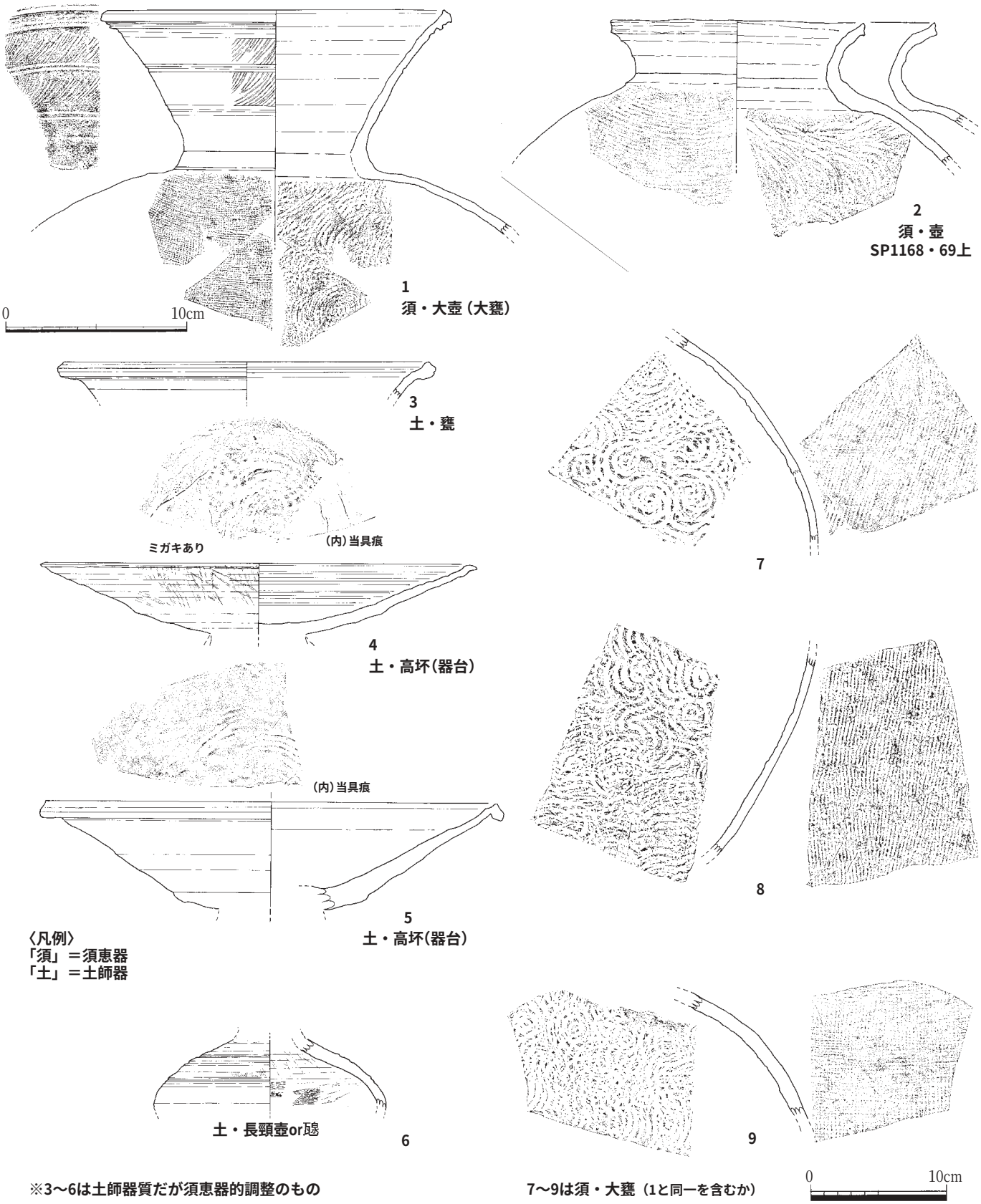


Fig. 24　SP1001（SB02）出土土器（1/4, 1は1/6）（※2のみSP1168・1169上層）

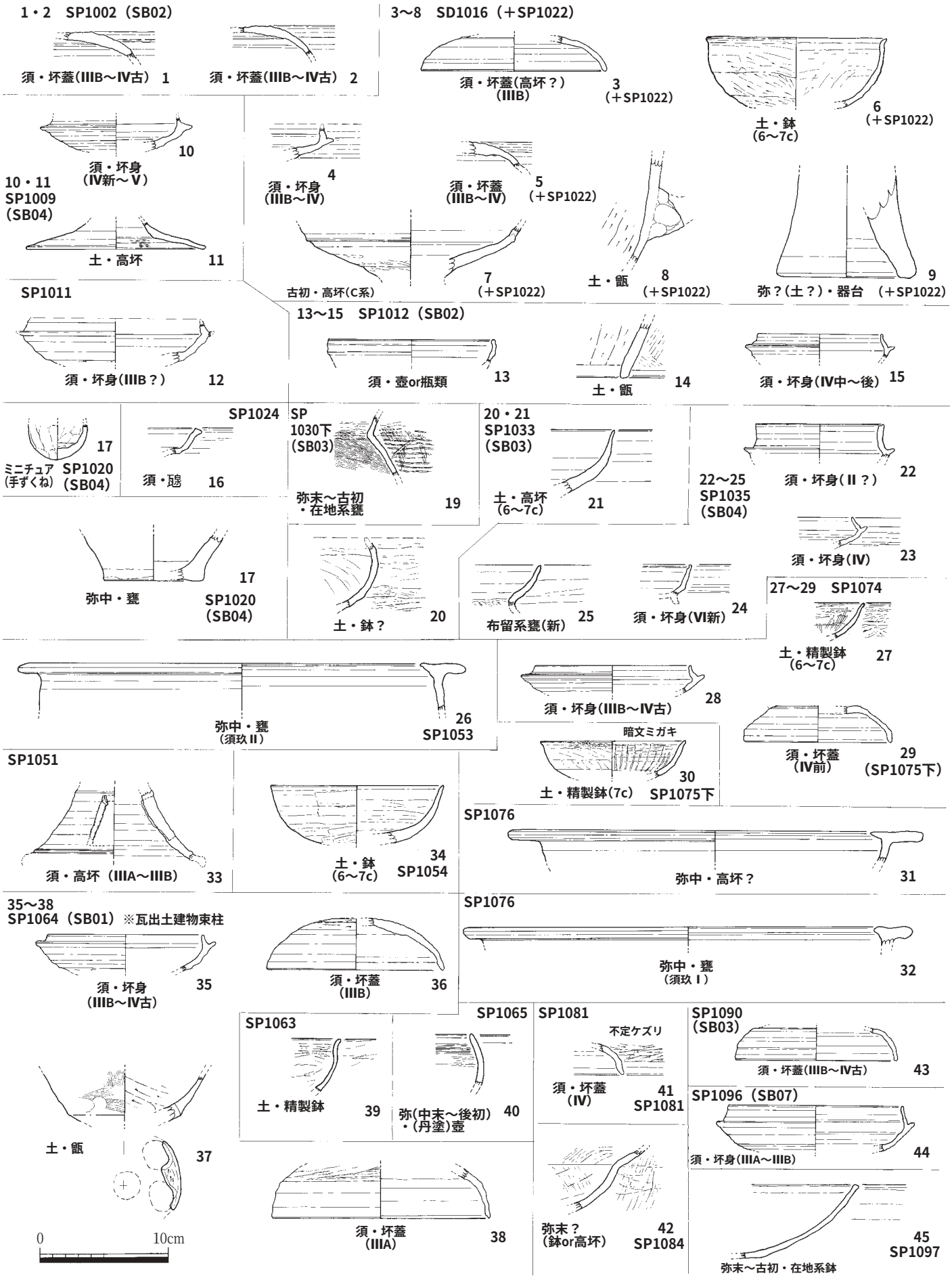


Fig. 25　柱穴出土土器（1），SD1016出土土器（1/4）

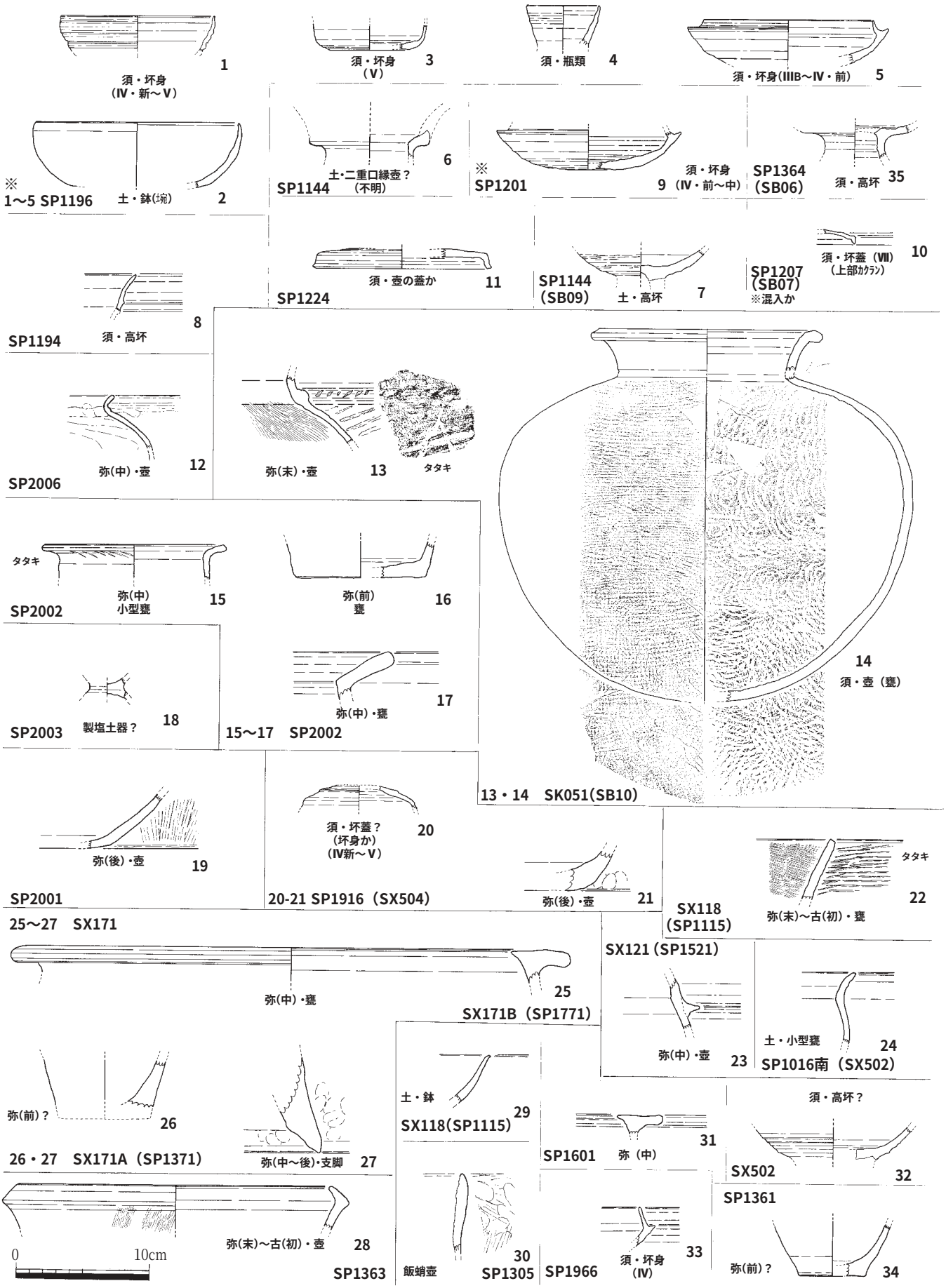


Fig. 26　柱穴出土土器 (2) (1/4) (※SP1196・1201は瓦出土建物SB01)

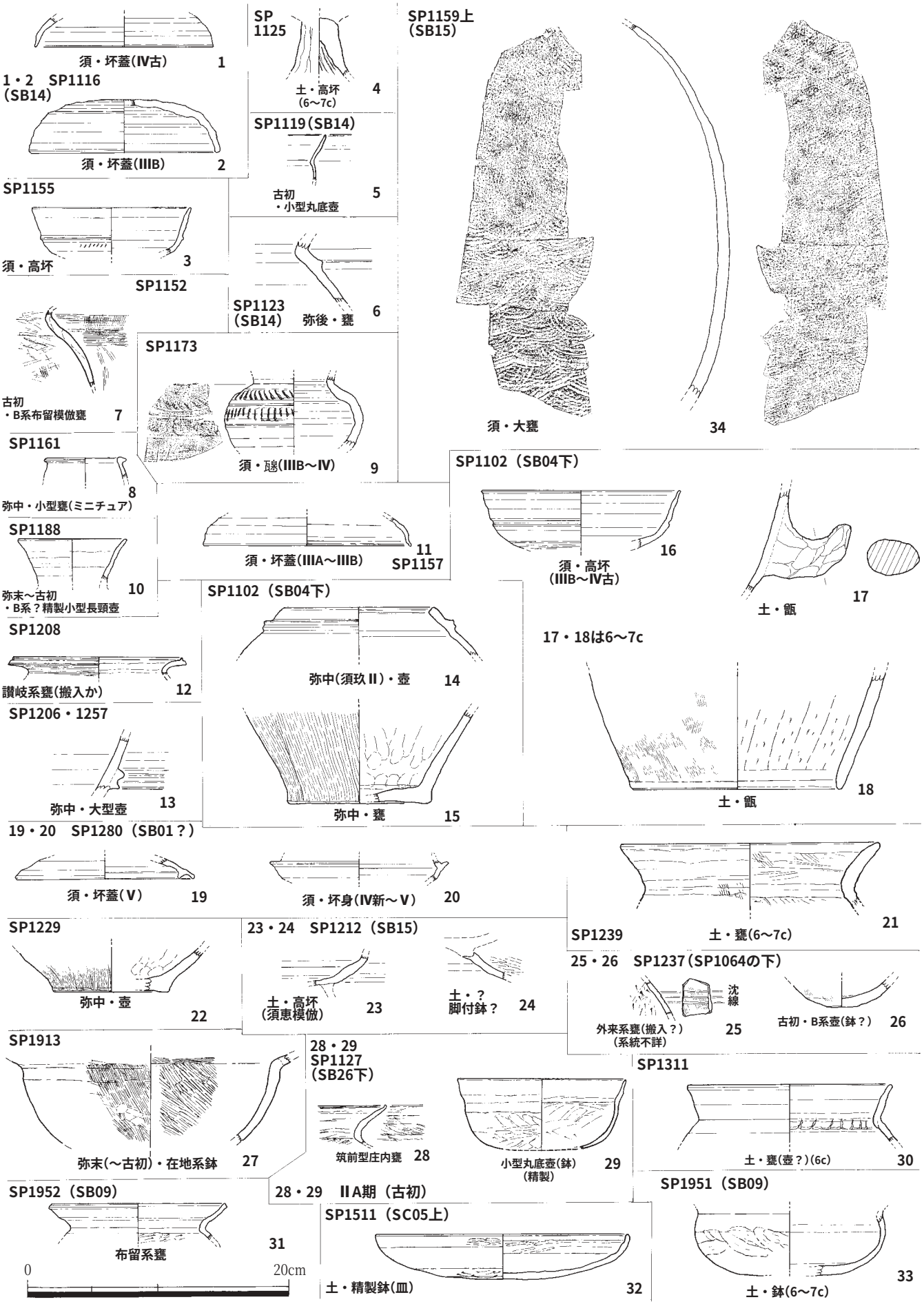


Fig. 27　柱穴出土土器（3）（1/4）

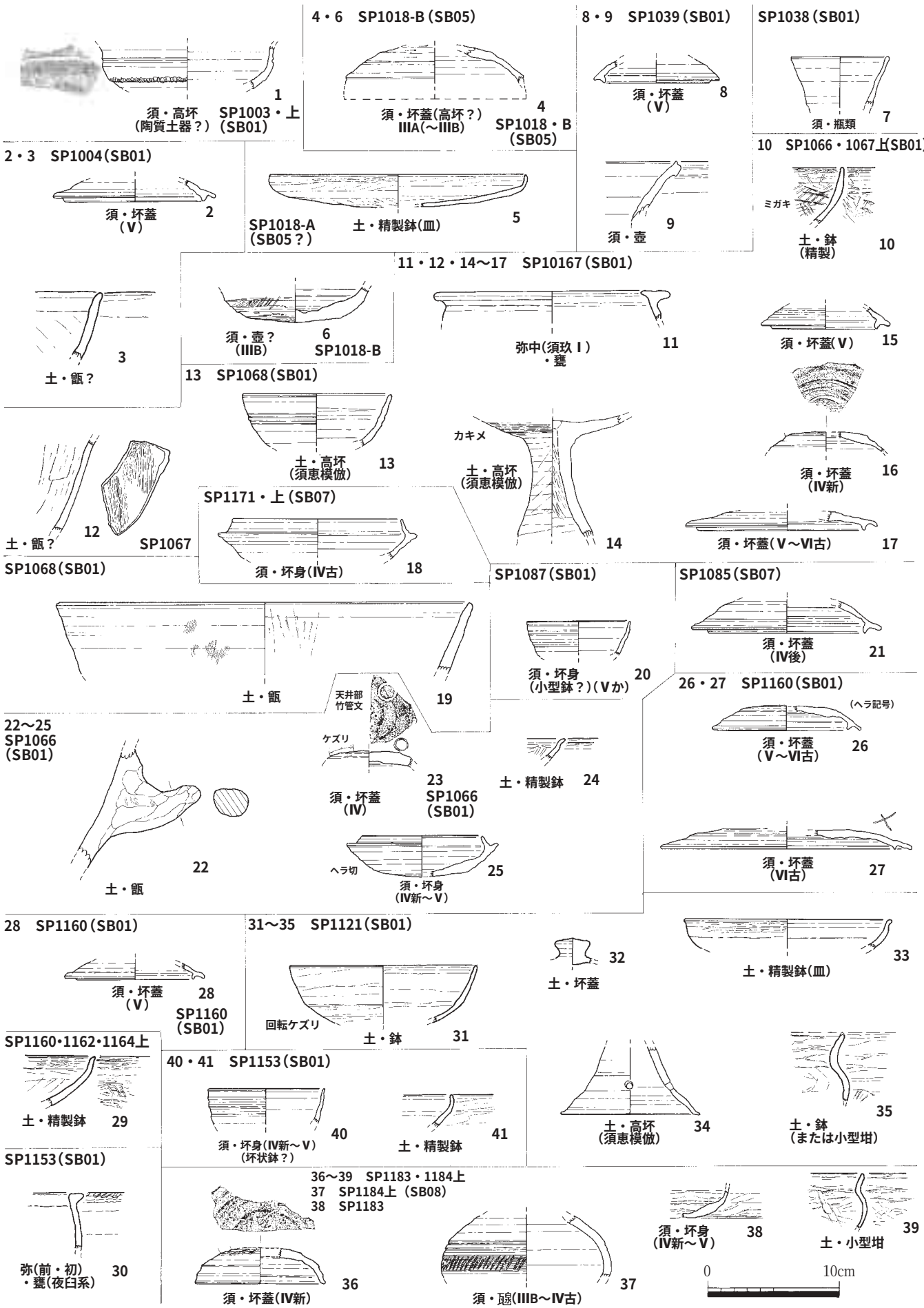


Fig. 28　瓦出土建物（SB01, SB05, SB08）柱穴出土土器（1）（1/4）

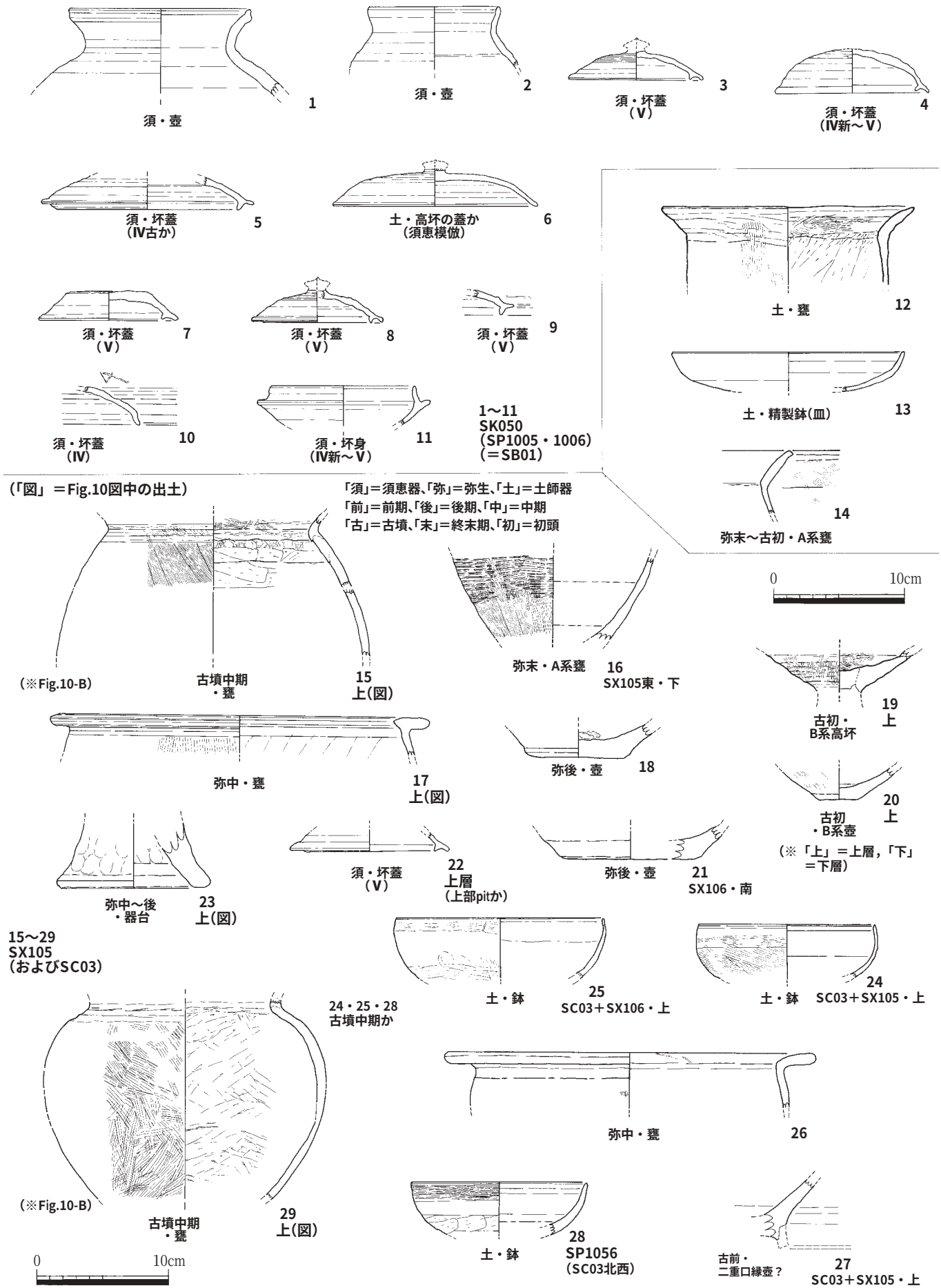


Fig. 29　瓦出土建物（SB01）柱穴出土土器（2），土坑出土土器（1）（SX105）（1/4）

（※20頁上より「竪穴住居」の項続き）　その他（Fig. 4,48）、**SC21**はSX112より実際は新しく、Ⅲ B期（Fig. 32-27）。**SC17**は2.6以上×3.2mの方形、深さ20cmの遺存。古墳時代初頭（Fig. 32-18）。**SC03**は 2.0×2.4m 前後の小型住居の切合か。**SX105** の一部を含む。古墳中期前半～中頃（Fig. 29-15, 24, 25, 28, 29、32-31）。他にも竪穴住居と考えられる部分があるが、遺存状況が悪く省略する。

3．出土遺物（Fig. 24～47）

出土遺物は総量でパンケース36箱がある。弥生土器（弥生時代前期初頭～前半、中期・後期・終末期）、土師器（古墳時代前期、中期、後期、飛鳥時代～奈良時代）、古墳時代後期～古代（飛鳥時代・奈良時代）の須恵器、滑石製臼玉、ガラス小玉、鉄製品、石器、石製品がある。以下、出土遺物について記述するが、可能な限り遺物を図化掲載した結果、紙幅の都合上から特に必要な遺物などについて最小限の説明記述をすることとし、各遺物の出土遺構や種類・時期については各挿図に記入しているので参照されたい。なお挿図中の説明の凡例や遺物の編年は以下（※→29頁）の通りである。

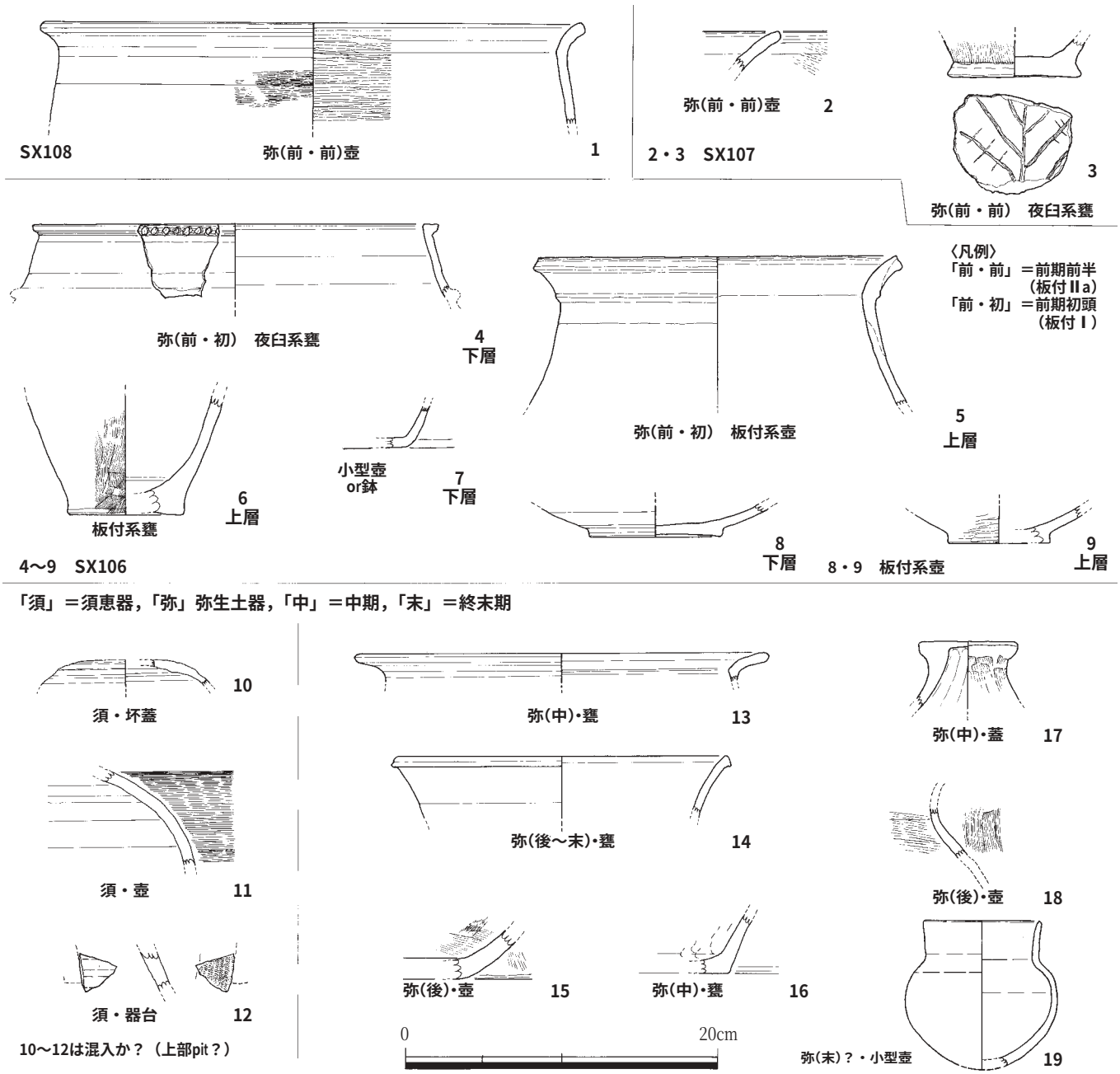


Fig. 30　土坑出土土器（2）（1/4）（SX108, SX107, SX106, SX110）

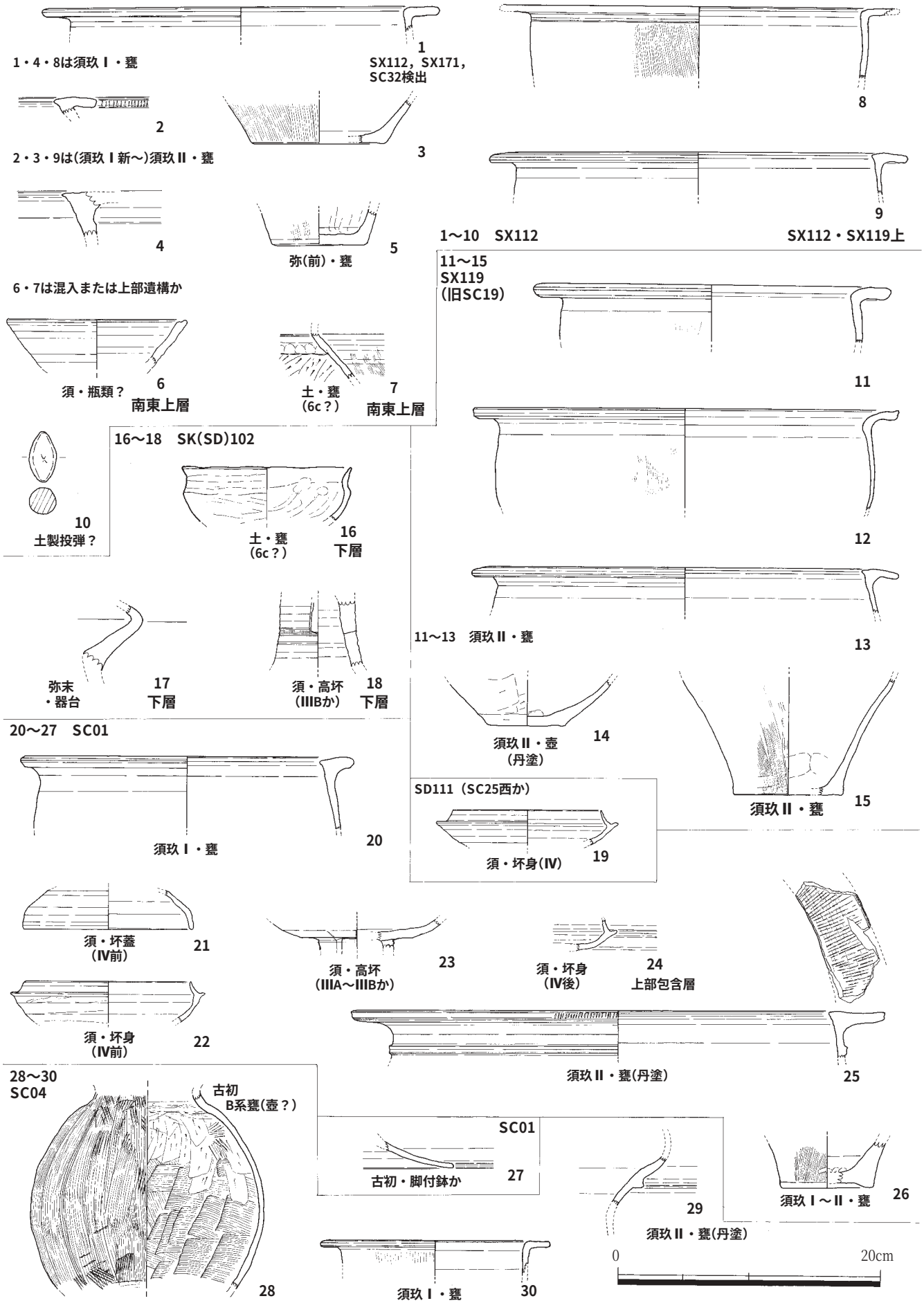


Fig. 31　土坑（3），竪穴住居（1）出土土器（1/4）（SX112，SX119，SD(SK)102，SD111，SC01，SC04）

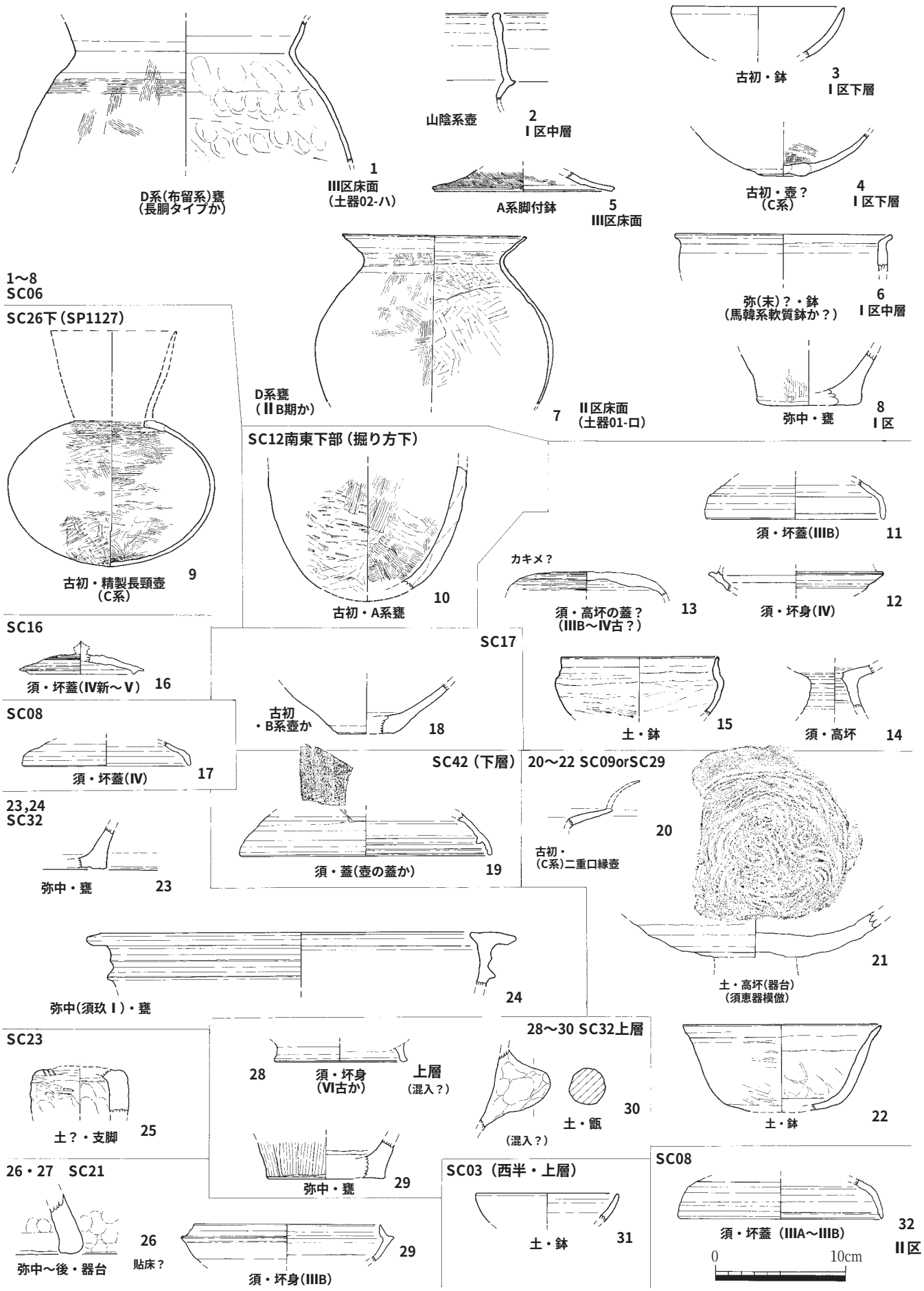


Fig. 32　竪穴住居出土土器（2）（1/4）（SC06, SC02, SC16, SC17, SC32, SC18, SC09, SC21）

＜Fig.24～36凡例、および土器編年基準＞

「須」＝須恵器、「土」＝土師器（主に６～７世紀の土師器に付記）、「弥」＝弥生土器、「古」＝古墳時代（「古初」は古墳時代初頭の土師器）、「初」＝初頭、「前」＝「前期」、「中」＝中期、「後」＝後期、「末」＝終末期、「Ⅱ・ⅢＡ・ⅢＢ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ」＝須恵器の時期（下記参照）、弥生時代終末・古墳時代初頭～前期の「ＩＡ・ＩＢ・ⅡＡ・ⅡＢ・ⅡＣ」＝久住1999b「北部九州における庄内式併行期の土器様相」（『庄内式土器研究』ⅩⅨ）による編年区分。弥生時代終末・古墳時代初頭～前期の「Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ系」＝久住1999bによるる系統分類。

古墳時代後期（MT15～TK43＝Ⅱ～ⅢＢ期）から奈良時代前半期（Ⅶ期）までにかけての須恵器編年は、小田富士雄の大別（小田富士雄 1964「九州の須恵器序説」『九州考古学』22）を用いるが、細部は異論があり、各型式内容（特にⅢＡ～Ⅴ期）については　橋徹・小林昭彦1990「九州須恵器研究の課題」（『古代文化』VOL.42-4）での整理を参照し、さらに牛頸窯群を中心とした筑前西・中部の地域性を考慮しつつ、Ⅳ～Ⅵ期を新たに細分した。筑前西・中部の地域編年は、中島恒次郎1997「七世紀の食器」（『古代の土器研究－律令的土器様式の西・東５　７世紀の土器－』）における編年を参照し、小田富士雄の編年と対照させ再整理したものである（久住猛雄1999a「出土須恵器の編年とＥ-２・３号墳の築造・追葬の年代について」（12頁前掲）。実年代観の根拠も久住1999aによる。Ⅳ期新相は7世紀中頃、Ⅴ期は7世紀第３四半期と考える。（※→以下、31頁より記述。）

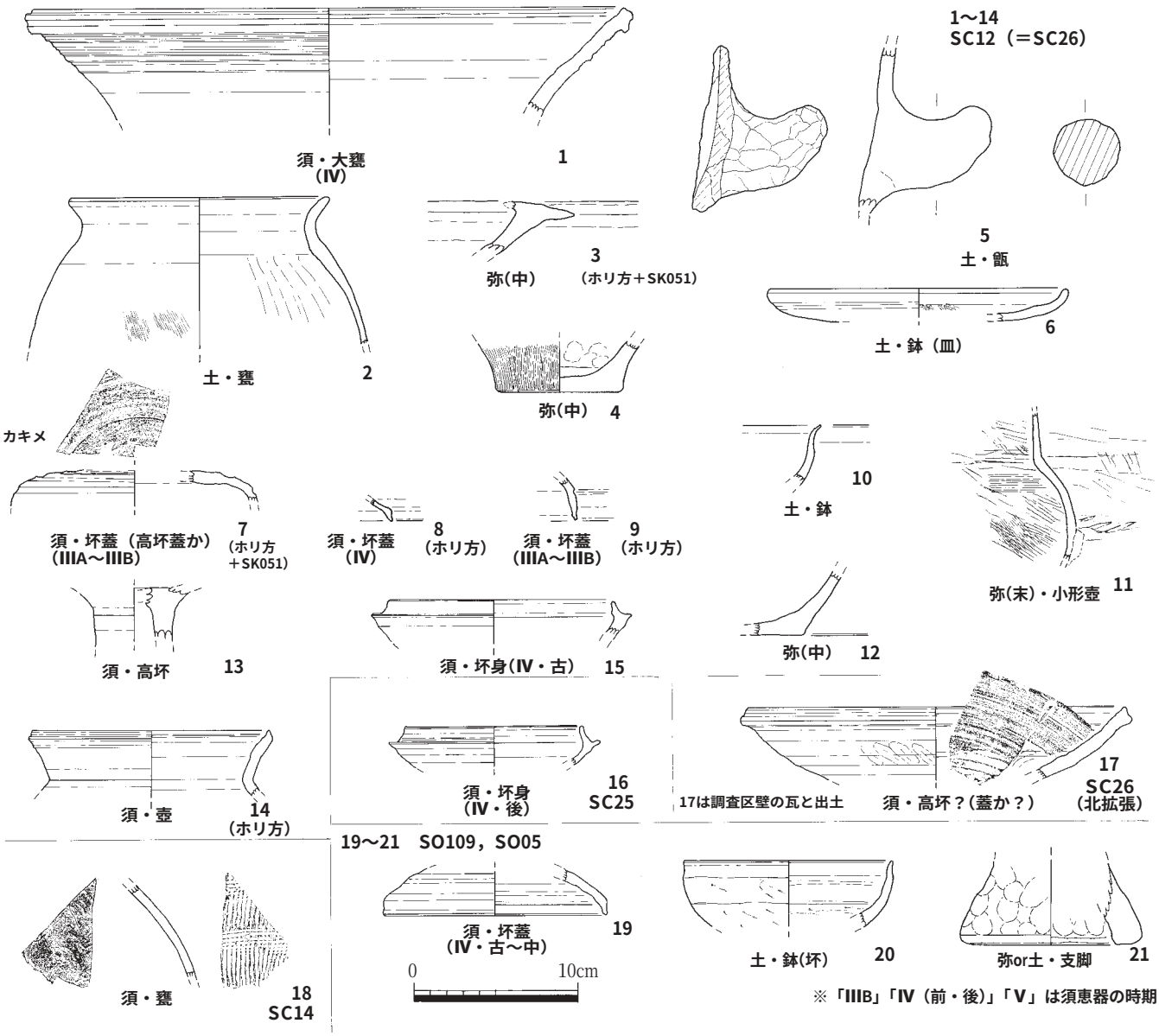


Fig. 33　竪穴住居出土土器（3）（1/4）（SC12＝26, SC25, SC05, SC14）

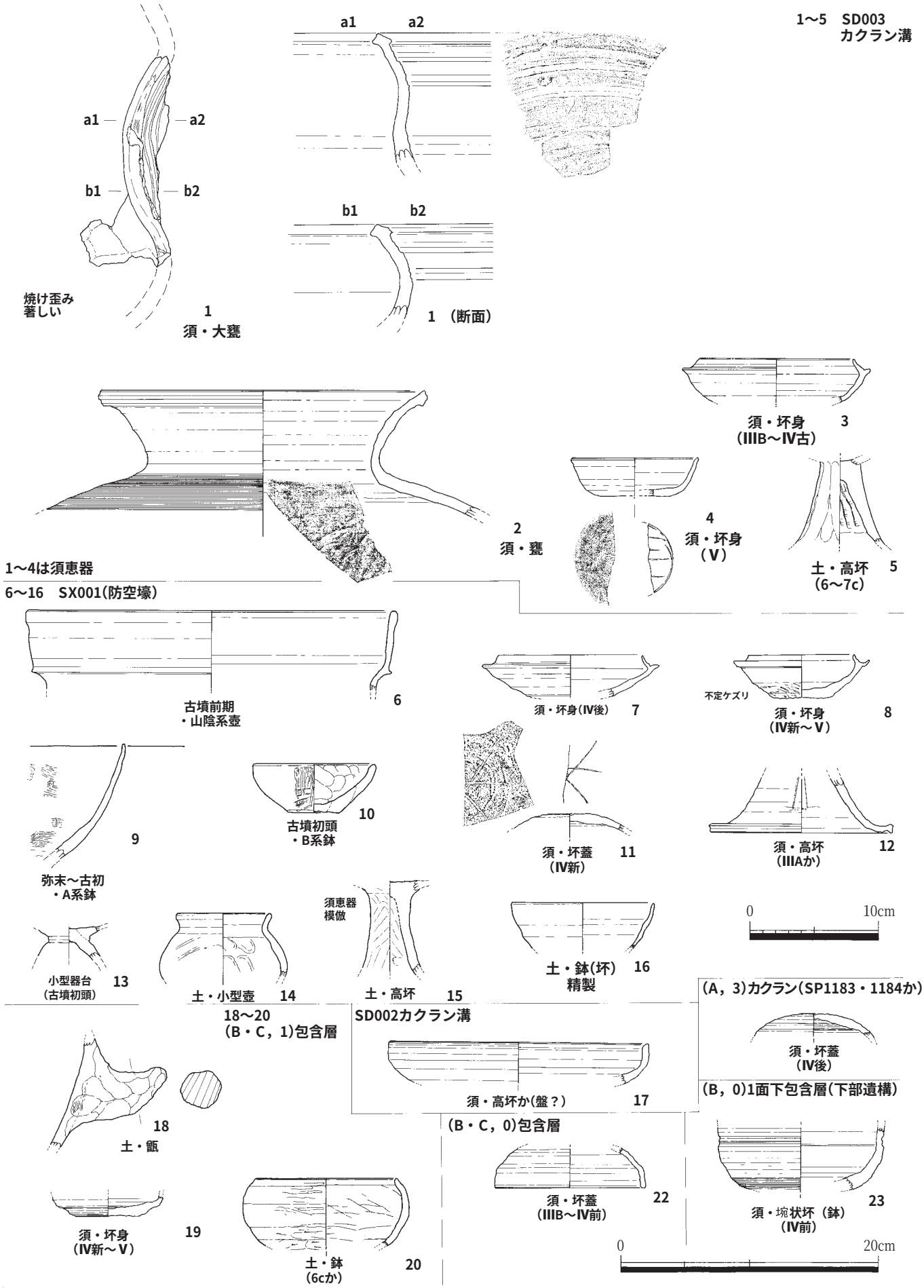


Fig. 34　撹乱および包含層（1）出土土器（1/4）

（※26頁より「出土遺物」の項続き）これは従来の九州での伝統的な実年代観より新しくみるが、土器様相の比較をした場合（坏Hの残存や坏Gの増加など）、陶邑・難波・飛鳥地域の土器編年と実年代を検討した最近の近畿での編年観（佐藤隆2003「難波地域の新資料からみた7世紀の須恵器編年」『大阪歴史博物館研究紀要』第2号、など）における土器様相の変化の実年代観ともよく整合するものである。九州のⅣ期の下限やⅤ期をより古いとするならば、例えば飛鳥編年の年代観も見直した上で主張すべきである。なお久住1999aの各細分期は、Ⅳ－１期＝Ⅳ期古相、Ⅳ－１～2期＝Ⅳ期前半、Ⅳ－2～3期＝Ⅳ期中頃、Ⅳ-4期＝Ⅳ期新相またはⅤ期と区分しがたい場合はⅣ期末とも記述している。なお、Ⅳ－４期は坏Gが一定量一般化し、「Ⅴ期」の一部とすることも多いが、坏Hがまだ多い様式である。牛頸月ノ浦窯、那珂13次SC215などを指標とする。Ⅴ期は小田浦50－Ⅰ号窯、堤ヶ浦SK018などを指標とする。坏Gが多くなるが、坏Hが一定量まだ存在する時期である。

1）土器（Fig. 24～36、32頁Ph. 2、PL. 12-23～25）

Fig. 24（20頁）は**SP1001**（SB02）出土土器（2を除く）。**1**の大甕は口縁部から、期中頃か。**3～6**は須恵器技法による土師器（いわゆる「似非須恵土師器」）。**4,5**のような「似非須恵」の器台は比恵・那珂では少ない出土か。玄界灘沿岸や糸島地域にある。**4**は外面暗文風ミガキあり（Ph.2-1）。

Fig. 25（21頁）は**柱穴**および**SD1016**（3～8）出土土器。**22**はMT15（Ⅱ期）の須恵器坏身で、東光寺剣塚築造直前頃。調査区の古墳時代後期の集落再開時期。**33,38,44**はⅢA期に遡る可能性がある須恵器。**30**は暗文ミガキのある精製鉢（坏）で須恵器、期併行か。本調査区では飛鳥時代の精製鉢（坏・皿）類の出土が目立つ。**27**も同様。**24**はⅥ-2期の高台付坏。建物群の下限を示す。

Fig. 26（22頁）は柱穴出土土器。**SB01**に伴う**SP1196**からはⅣ期末～Ⅴ期の須恵器が出土（**1,3**）。**11**は壺類の蓋であろう。**14**はⅢB期前後の壺類か。**18**は焼けて赤変した跡があり、薄作りで製塩土器の可能性がある（古墳時代初頭頃か）。**15**は須玖Ⅰ式頃の小型甕だが、頸部に**タタキ**痕跡が残る（Ph. 2-3）。**19,21**は弥生後期後半の壺の底部。遺構は不明確だがこの時期も存在か。**32**はⅡ～ⅢA期頃の須恵器高坏か。**35**はⅥ期に下るとみられる高坏。建物群の下限の一点。**6**は二重口縁壺の擬口縁としたが、あるいは手焙り形土器の一部か。**10**はⅦ期の坏蓋。上部攪乱出土で混入である。

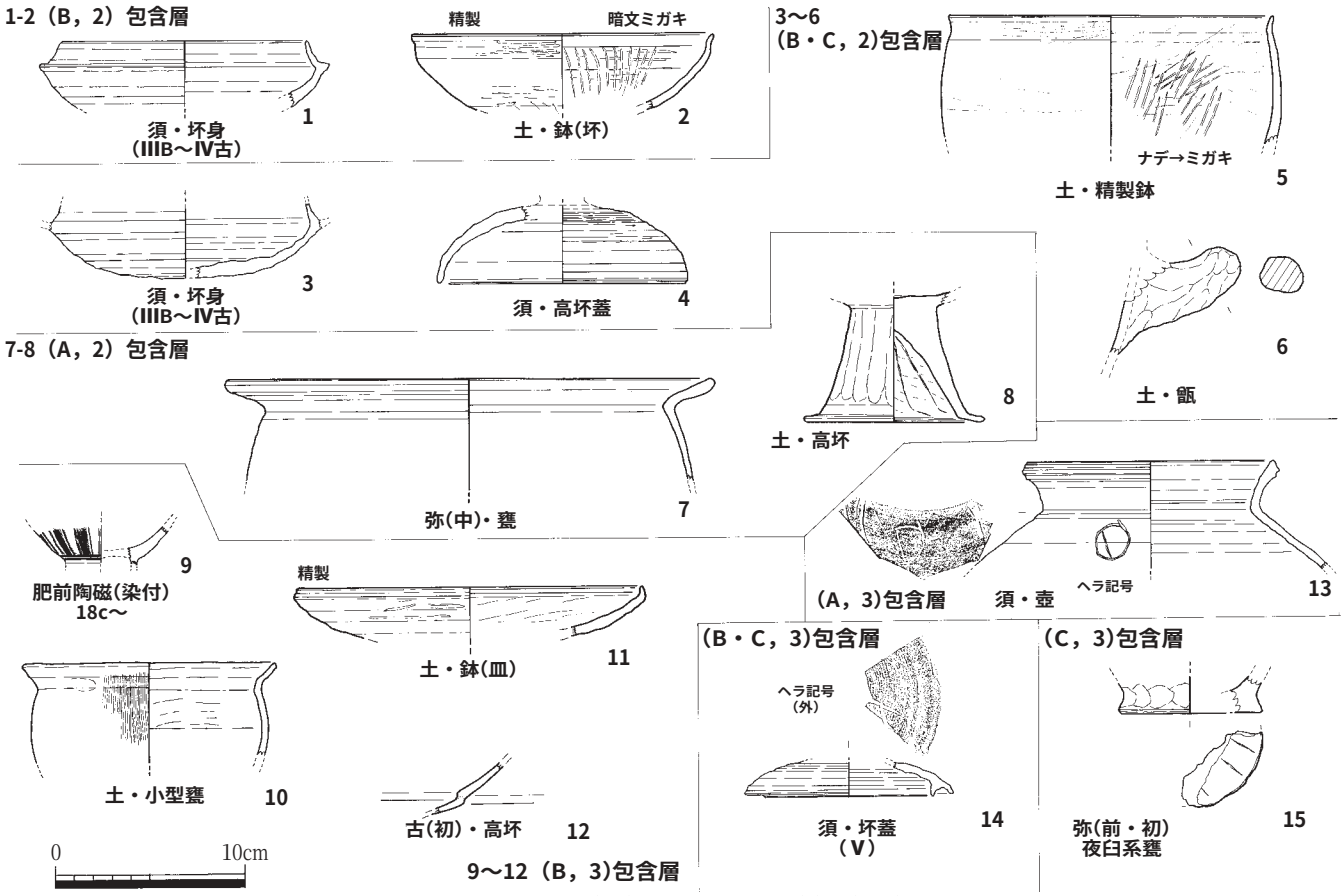


Fig. 35　包含層出土土器（2）（1/4）

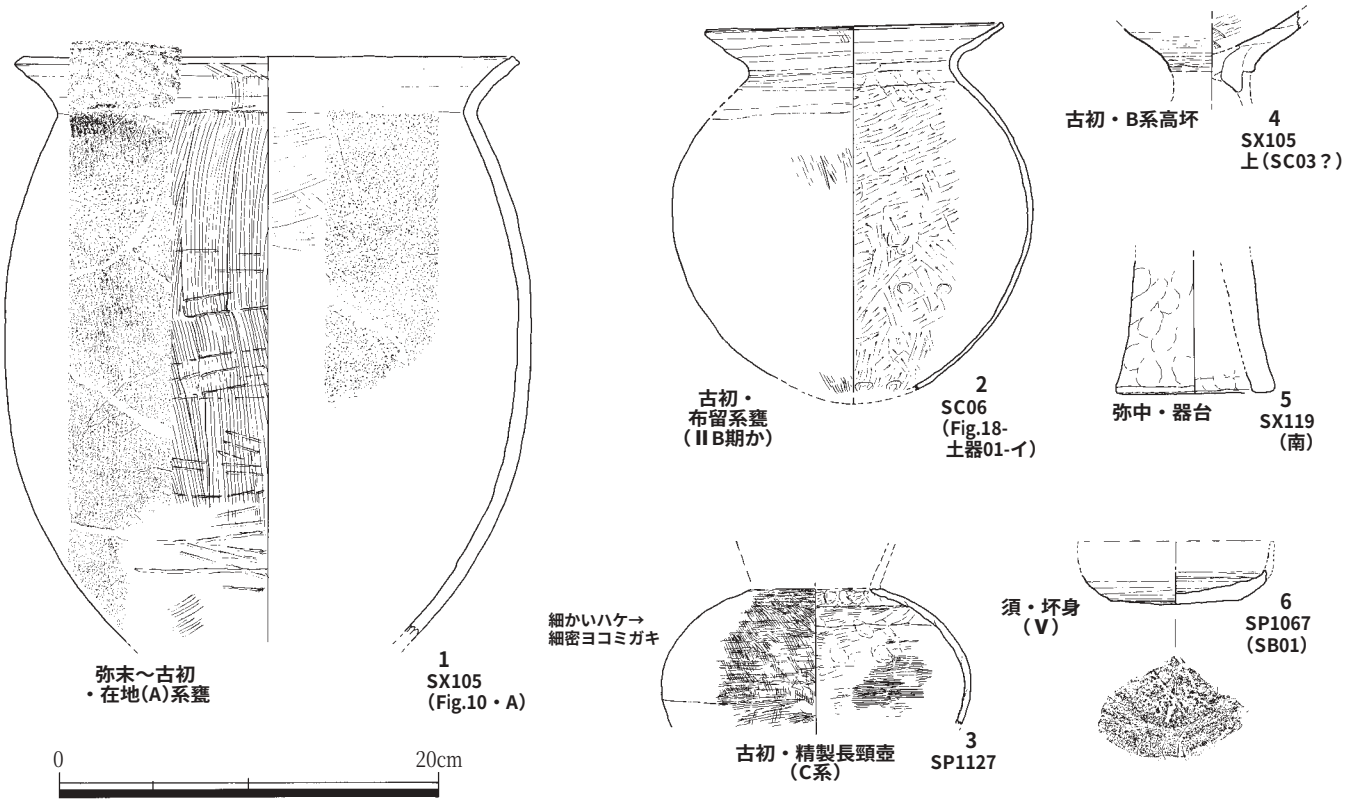
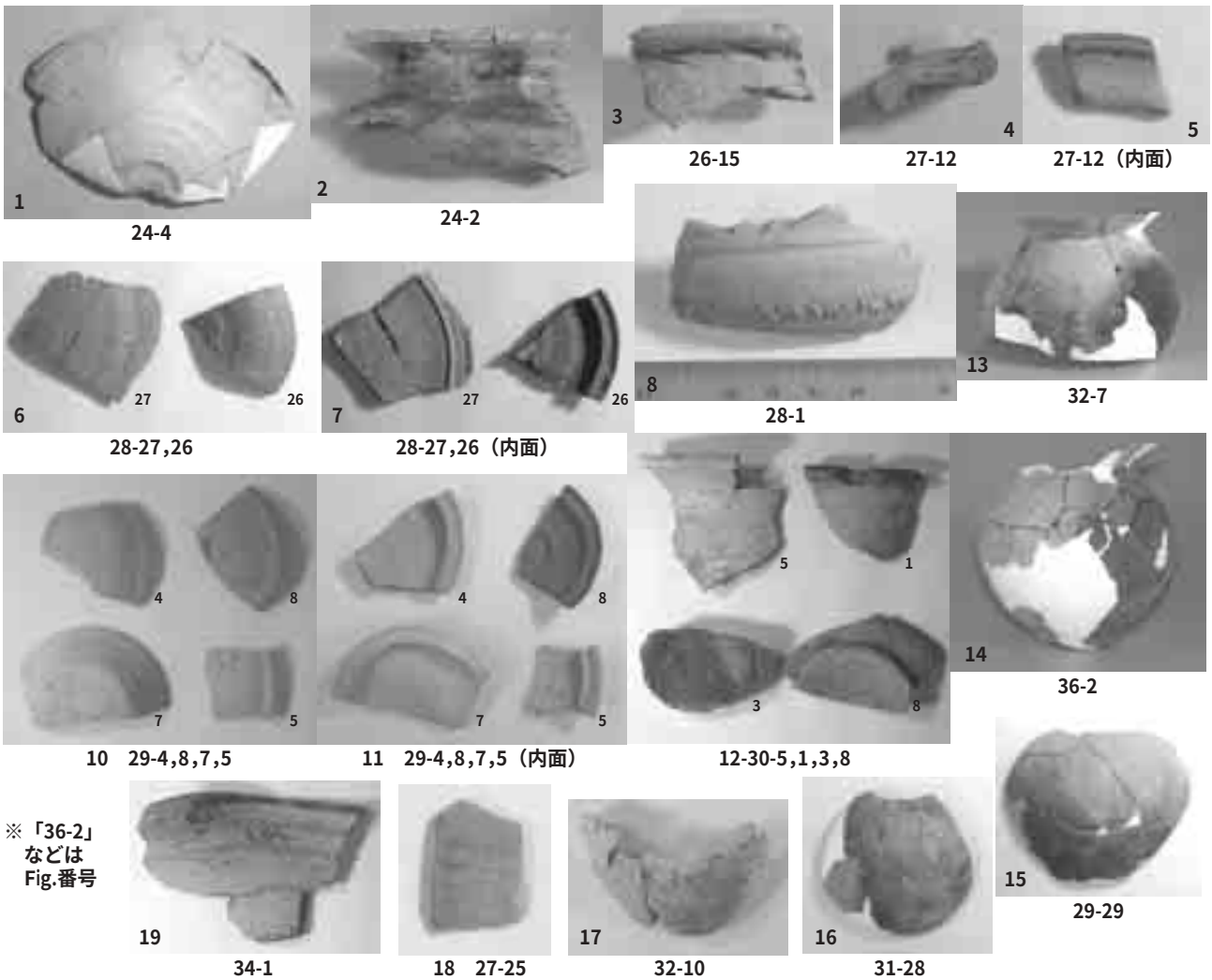


Fig. 36　各遺構出土土器（補遺）（1/4）



Ph. 2　出土土器写真（1）

Fig. 27（23頁）は柱穴出土土器。**11**はⅢＡ新相～ⅢＢ期の坏蓋。**16,17**はFig. 24－2の甕と共伴（SP1168,1169上部、PL. 7－6）。**9**の瓶は文様や胎土がやや異質で、牛頸窯以外か。**12**は**讃岐系甕**（Ph. 2－4,5）。弥生終末前後の搬入品。「下川津Ｂ類」胎土ではないもの。橙色。**25**は横に3本の沈線のある甕小片（Ph. 2－18）。内面ケズリの方向などから布留系甕ではない。古墳初頭前後の搬入品。**31**の甕はⅡＡ～ⅡＢ期。**28,29**はFig. 32－9、Fig. 36－3と共伴（**SP1127**）。ⅡＡ期。**28**は筑前型庄内甕Ⅰ式。**29**は頸部不明瞭な未定型型式。**32**は中島恒次郎分類（中島1997,29頁前掲）のⅢⅠ。Ⅴ期か。

Fig. 28（24頁）は、全て瓦片出土建物の柱穴出土土器。**1**は須恵器高坏としたが、器形（突帯など）や胎土、色調（白っぽい）、器面に違和感がある。坏体部下部に篦（木目のある板ベラ）先の押圧による連続施文（Ph. 2－8）。陶質土器の可能性も考えたい。**21**はⅤ期というよりⅣ期後半の坏Ｇか。**5**の精製鉢はⅢⅠ（中島分類）、Ⅴ期か。**13,14**は須恵器模倣土師器（「似非須恵土師器」）の高坏。**24**の精製鉢は坏Ⅲ（中島分類）か。**33**の精製鉢はⅢⅡ（同分類）で、Ⅵ期に下るか。**瓦葺建物SB01**の下限（廃絶時期）を示す。**41**はⅢⅠ、Ⅴ期併行。**29**の精製鉢は坏Ⅲ、Ⅳ期後半～Ⅴ期。**17,27**は坏Ｇというよりは、Ⅵ－1期に下る坏Ｂの蓋か。**26**も坏Ｇだが Ⅵ－1期に下る型式か（Ph. 2－6,7）。

Fig. 29（25頁）の**1～13**（一部Ph. 2－10,11）は、**SK050**としたSB01の柱穴の柱抜取痕より瓦片とともに一括出土（Fig. 6下段）。ほぼⅤ期の型式群だが、**5**はⅥ－1期に下る古相の坏Ｂの蓋と考えられ、**SB01の廃絶がⅤ期からⅥ－1期に移行する頃**（他の柱穴でもⅥ－1期が少量出土）であることを示す。実年代は670年代前半頃か？。**13**の精製鉢もⅢⅠ（前掲）で、時期に矛盾がない。**4**は坏蓋としたが、坏Ｈの身の可能性もある。Fig. 29の**15～27**は**SX105**および**SC03**出土。うち**15,29**（Ph. 2－15）はFig. 10の土器群Ｂ。いずれも古墳時代中期前半頃の甕だろう。**24,25,28**の鉢はそれらに伴うか。**SC03の時期**か。**18,21,23**は弥生後期、**16**および**Fig. 36－1**はＩＡ～ＩＢ期（**弥生時代終末**）でこれが**SX105に伴う**か（Fig. 10土器群Ａ）。**19,20,27**および**Fig. 36－4**は古墳時代初頭～前期前半だが、SC03は重複している可能性があり、一方の（古い住居の）時期を示すか。

Fig. 30（26頁）は貯蔵穴などの土坑出土土器。**1～9**は弥生時代前期（Ph. 2－12）。**1**の壺は夜臼系の大型壺。**3,4**は夜臼系甕。3の底部には木葉痕。**5,6,8,9**は板付系の甕と壺。**4～7**の**SX106**出土土器は板付Ⅰ式か（やや新相？）。SX107（2,3）は微妙だがこれより少し新しい。切合関係も合致する。**10～12**の須恵器はSK110出土とするが、新しい柱穴を一部認識できずに掘ってしまった可能性が高く（土層ベルト内のSP1153のみ認識）、混入か。13～19の**SK110**出土弥生土器のうち、13,16,17は下部SX112に本来は伴うか。**14,15,18,19**が弥生後期後半～終末期で、これがSK110に伴うだろう。

Fig. 31（27頁）は土坑および竪穴住居出土土器。**1～10**は**SX112**出土。6,7は混入だろう。**1～4,8,9**は須玖Ⅰ式新相の土器群。2,9から須玖Ⅱ式にきわめて近い時期。**11～15**（**SX119**）は須玖Ⅱ式（古相か）の土器群。SX119が貯蔵穴とすれば、やや新しい部類となる。**18,23**はⅢＢ期の高坏。23はⅢＡ期に上る可能性もある。**SC01**の時期は**21,22**が示すか。Ⅳ期前半または中頃。**28**（Ph. 2－16）は古墳時代初頭のＢ系統壺（あるいは甕）。ⅡＡ期であろう。

Fig. 32（28頁）は竪穴住居出土土器。**1～8,Fig. 36－2**は**SC06**出土。**1**はやや大型の長胴タイプの布留系甕に復元できる。胎土・色調が7,Fig. 36－2と異なり、長胴布留系甕が一般的な地域からの搬入か。**7**および**Fig. 36－2**は布留系甕（Ph. 2－13,14）。ⅡＢ期か。**4**はやや薄作りの壺の底部。Ｃ系か（二重口縁壺？）。**6**は弥生終末の鉢としたが、器形に違和感があり、あるいは馬韓系（ないし韓半島南海岸部系）軟質小型鉢の可能性もある。ただしタタキがあるか不明で、胎土も在地でも問題ない。**10**は古墳初頭の在地系甕（ⅡＡ期）。反転復元の図は筒状の胴部に見えるが、もう少し胴部がふくらむかもしれない（Ph. 2－17）。**11～15**のSC02出土土器のうち、**11,13**はⅢＢ期でもよいが（※→以下、40頁へ）

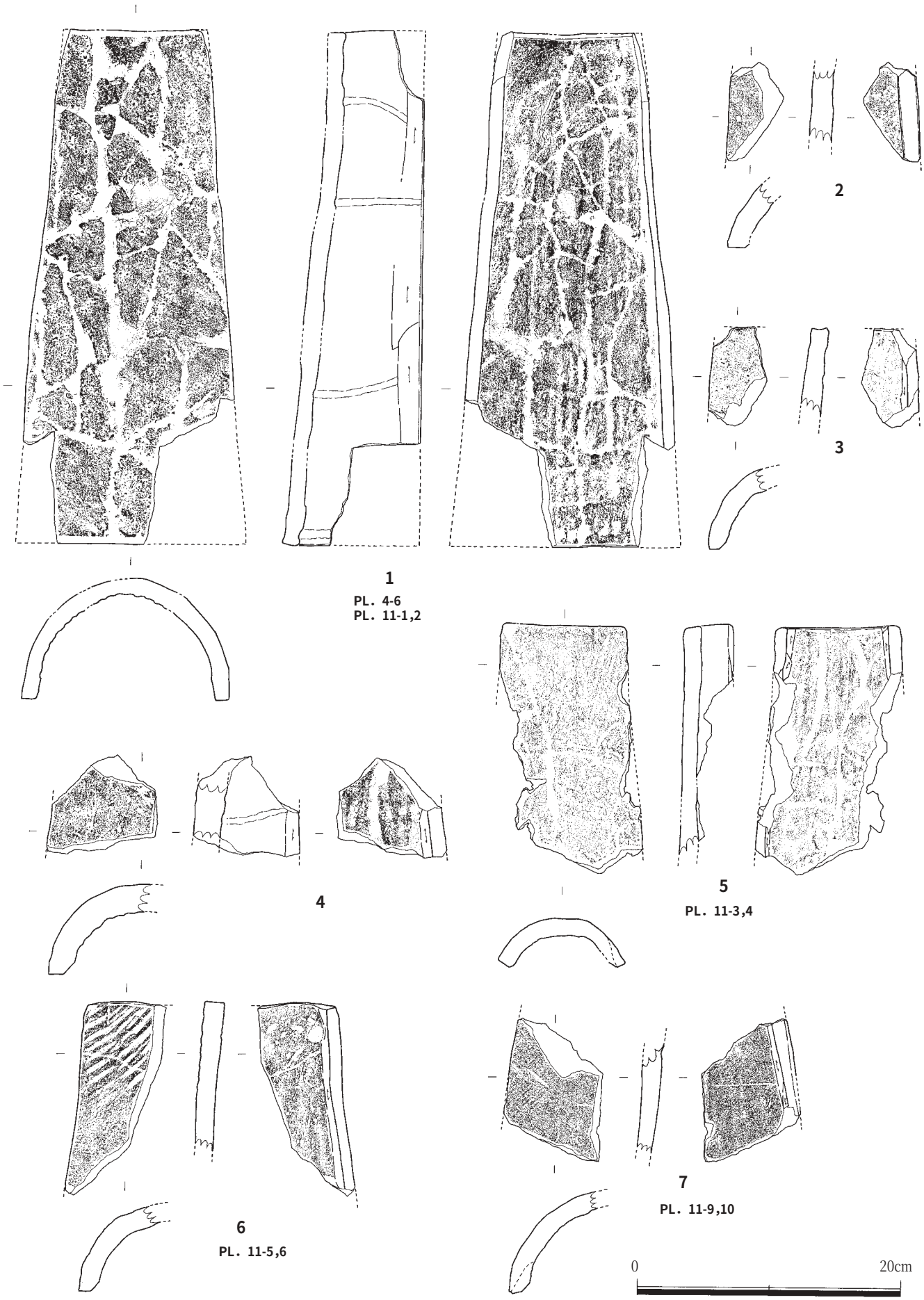


Fig. 37　初期瓦実測図（1）（丸瓦①）（1／4）※Fig. 37～41は表1-2参照

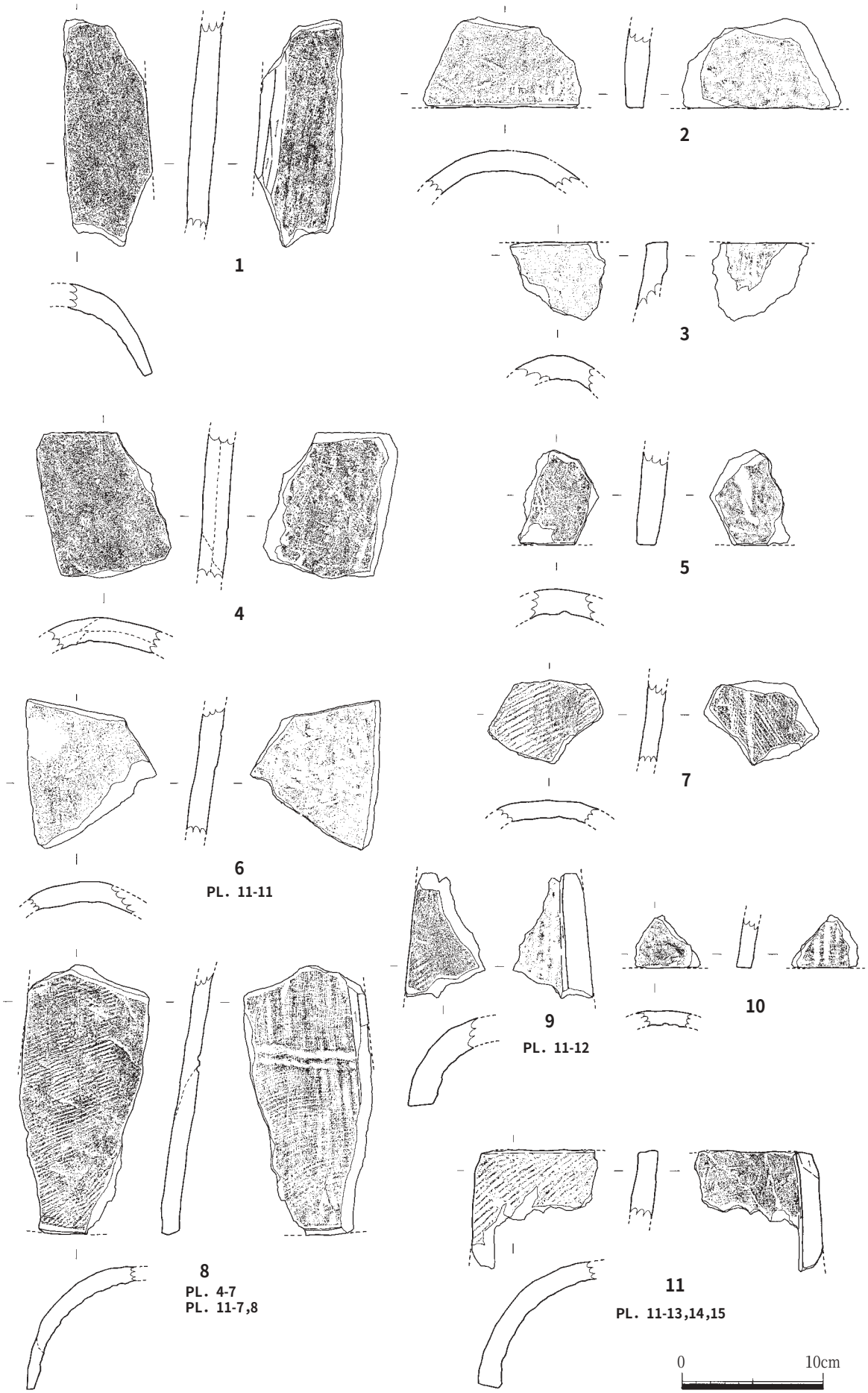


Fig. 38　初期瓦実測図（2）（丸瓦②）（1／4）

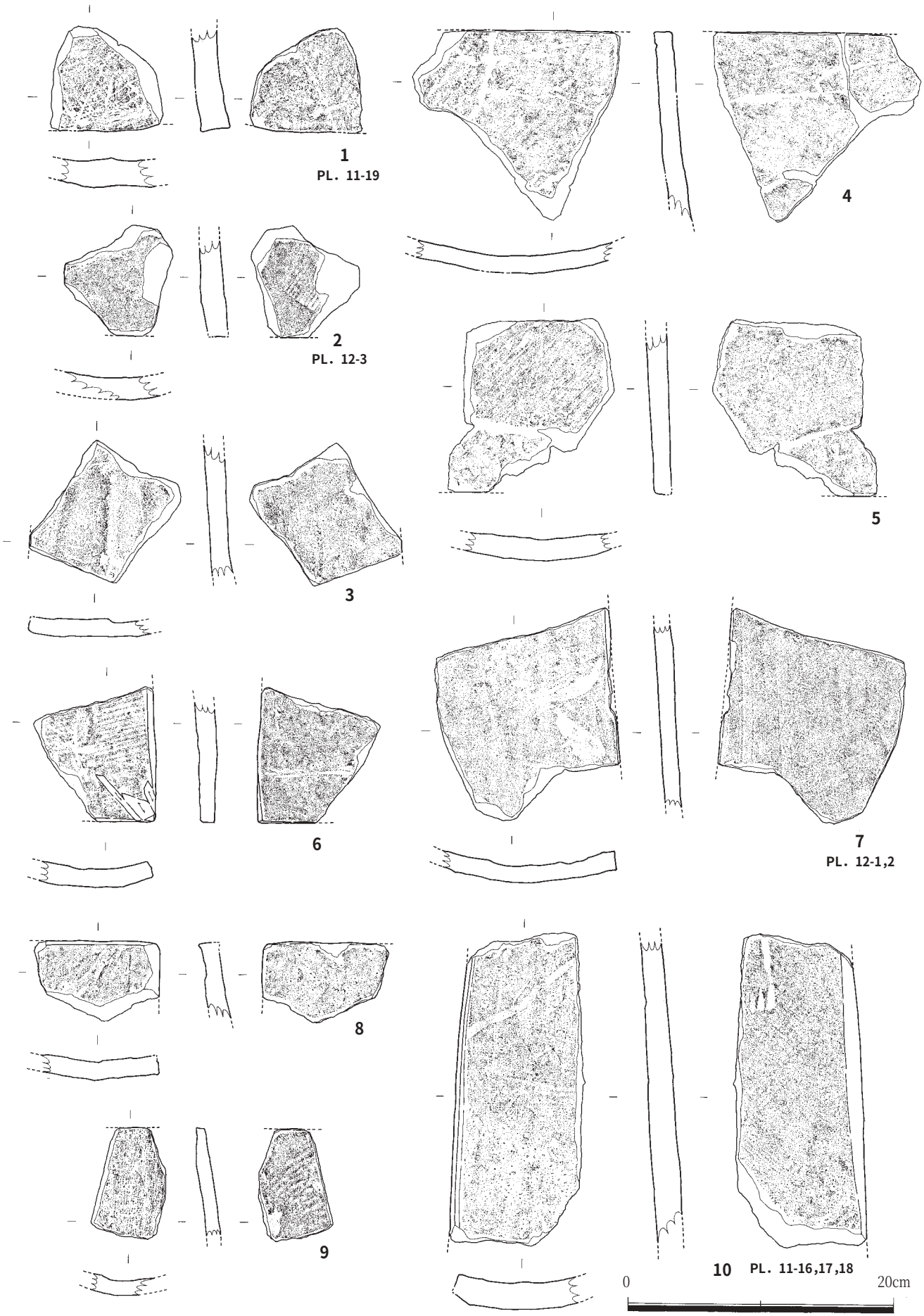


Fig. 39　初期瓦実測図（3）（平瓦①）（1／4）※Fig. 37～41は表1-2参照

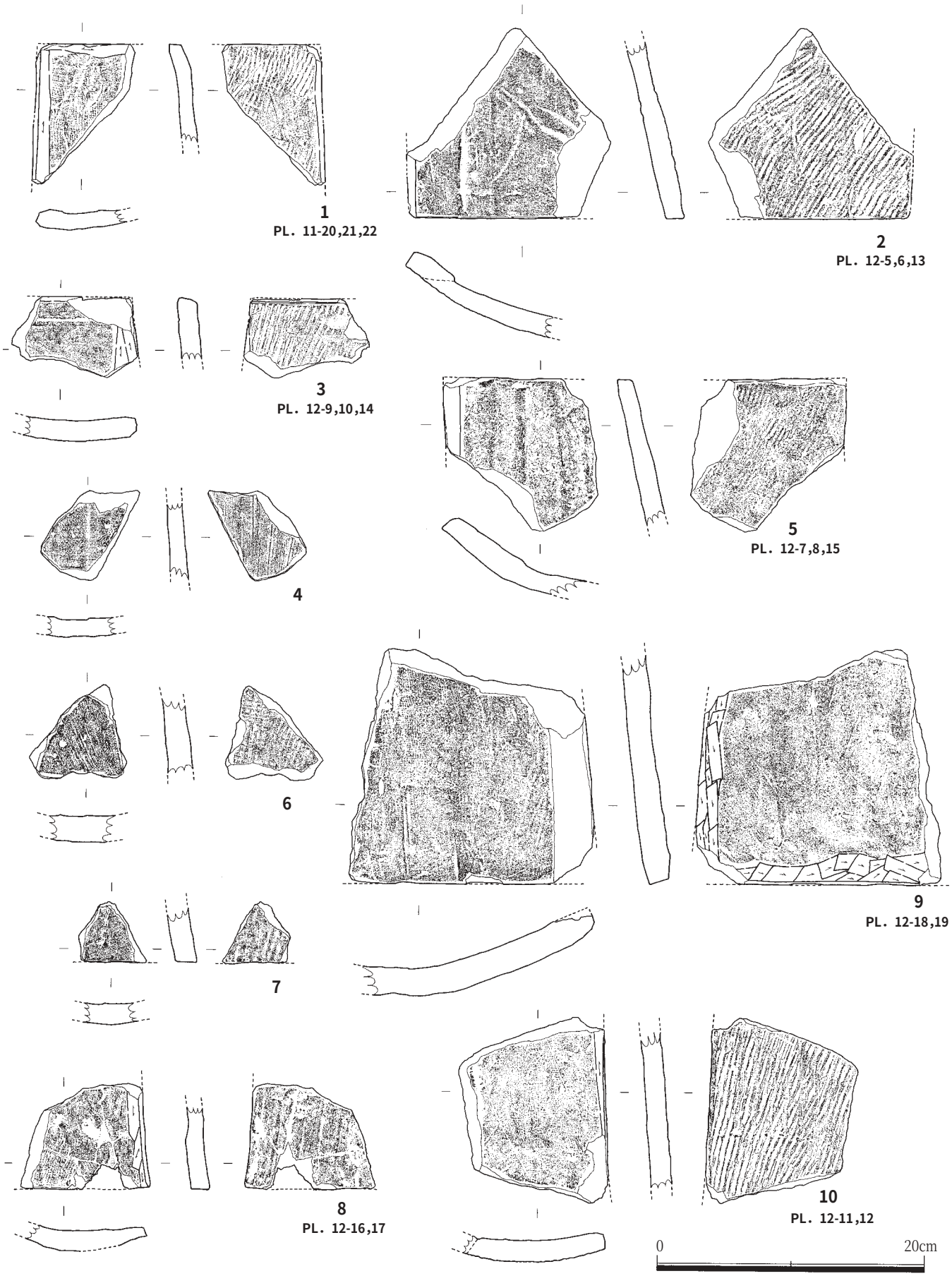


Fig. 40　初期瓦実測図（4）（平瓦②）（1／4）

図番号	遺構	残長(cm)	厚さ(cm)	調整		側部調整			端部調整			胎土	色調	焼成	備考
				凸面	凹面	側面	凸面	凹面	側面	凸面	凹面				
丸瓦															
Fig. 37 - 1	SC26 No.1	39.2(全)	1.1～1.4	平行ﾀﾀｷ→ﾅﾃﾞ消し	竹状模骨痕(4mm幅)、布目痕	ｹｽﾞﾘ	なし	ｹｽﾞﾘ	ｹｽﾞﾘ	なし	ﾅﾃﾞ	1～2mm白色砂粒・多、1～3mm赤褐色砂粒・少、雲母・少	明橙褐	やや軟	広端径18.2、狭端径12.2、復元本数60、4ヶ所に連結紐痕
Fig. 37 - 2	SC26 No.1	5.6	1.6～1.7	ﾀﾀｷ→縦方向ﾅﾃﾞ消し	竹状模骨痕、布目痕→ﾅﾃﾞ消し	ｹｽﾞﾘ	ｹｽﾞﾘ	ｹｽﾞﾘ	—	—	—	1～4mm白色砂粒・少、雲母・少、精良	明橙褐	軟	1ヶ所に2本の連結紐痕
Fig. 37 - 3	SX001(防空壕ｶｸﾗﾝ)	7.6	1.5	ﾀﾀｷ→縦方向ﾅﾃﾞ消し	竹状模骨痕、布目痕→ﾅﾃﾞ	ｹｽﾞﾘ	なし	ｹｽﾞﾘ	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	1～3mm白色・褐色砂粒・多、雲母・多	淡黄褐	軟	
Fig. 37 - 4	SC26 No.2	7.5	2.2～2.4	ﾀﾀｷ→縦方向ﾅﾃﾞ消し	竹状模骨痕(6mm幅)、布目痕	ｹｽﾞﾘ	ｹｽﾞﾘ	ｹｽﾞﾘ	—	—	—	1mm白色砂粒・多、雲母・多	淡～明橙褐	軟	連結紐痕あり
Fig. 37 - 5	SC26北/SX120	14.0	1.2～1.4	平行ﾀﾀｷ→ﾅﾃﾞ(ﾏﾒﾂ)	糸切痕、竹状模骨痕、布目痕→ﾅﾃﾞ	ｹｽﾞﾘ	ﾅﾃﾞ	ｹｽﾞﾘ	ｹｽﾞﾘ	ﾅﾃﾞ	なし	1mm白色砂粒・少、雲母・少、精良	明橙褐	軟	狭端部復元径7.4、2箇所に連結紐痕
Fig. 37 - 6	SC26 No.1	14.5	1.5～1.6	平行ﾀﾀｷ（太）	竹状模骨痕、布目痕(ﾏﾒﾂ)	ｹｽﾞﾘ	なし	ｹｽﾞﾘ	ｹｽﾞﾘ	なし	なし	1mm白色砂粒・少、雲母・少、精良	明橙褐	軟	1ヶ所に2本の連結紐痕、復元狭端部径10.0
Fig. 37 - 7	SX110Ⅱ上～中層（混入か）	7.5	1.2～1.5	擬格子ﾀﾀｷ→一部縦方向ﾅﾃﾞ	竹状模骨痕(4mm幅)、布目痕(ﾏﾒﾂ)	ｹｽﾞﾘ	ﾅﾃﾞ	ｹｽﾞﾘ	—	—	—	1mm白色砂粒・多、雲母・少	明橙褐	軟	復元本数56
Fig. 38 - 1	P1015	16.1	1.2～1.7	ﾀﾀｷ→縦方向ﾅﾃﾞ消し	竹状模骨痕(6mm幅)、布目痕(ﾏﾒﾂ)	ｹｽﾞﾘ	なし	ｹｽﾞﾘ	—	—	—	1～2mm白色・赤褐色砂粒・多、雲母・多	淡橙褐	軟	2箇所に連結紐痕、復元本数50
Fig. 38 - 2	P1080	6.4	1.4～1.6	平行ﾀﾀｷ→縦方向ﾅﾃﾞ消し	竹状模骨痕、布目痕	—	—	—	ｹｽﾞﾘ	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	1mm白色砂粒・少、雲母・少、精良	明橙褐	軟	広端部復元径13.2
Fig. 38 - 3	P1160	5.6	1.4～1.7	ﾀﾀｷ→縦方向ﾅﾃﾞ消し	竹状模骨痕、布目痕	—	—	—	ｹｽﾞﾘ	なし	ﾅﾃﾞ	1～2mm白色砂粒・多、雲母・少	淡黄褐	軟	狭端部復元径6.5
Fig. 38 - 4	P1066上層	10.1	1.5～1.9	ﾀﾀｷ→縦方向ﾅﾃﾞ消し	竹状模骨痕(5mm幅)、布目痕→一部ﾅﾃﾞ	—	—	—	—	—	—	1mm白色砂粒・多、雲母・多	明橙褐	軟	粘土板厚さ1cm、連結紐痕あり
Fig. 38 - 5	P1160	6.7	1.7～2.0	ﾀﾀｷ→縦方向ﾅﾃﾞ消し	竹状模骨痕、布目痕→ﾅﾃﾞ	—	—	—	ｹｽﾞﾘ	なし	ﾅﾃﾞ	1～2mm白色砂粒・多、雲母・多	暗灰褐	軟	広端部復元径12.0
Fig. 38 - 6	P1068	9.6	1.4～1.5	ﾀﾀｷ→縦方向ﾅﾃﾞ消し	糸切痕、竹状模骨痕、布目痕	—	—	—	—	—	—	1mm白色・赤褐色砂粒・少、雲母・少、精良	明橙褐	やや軟	
Fig. 38 - 7	P1163上層	5.9	1.3	平行ﾀﾀｷ→一部ﾅﾃﾞ	竹状模骨痕(4mm幅)、布目痕→擦過→一部ﾅﾃﾞ	—	—	—	—	—	—	1mm以下白色砂粒・少、雲母・少、精良	灰白	やや軟	
Fig. 38 - 8	P1098	19.1	1.1～1.5	平行ﾀﾀｷ→一部縦方向ﾅﾃﾞ	糸切痕、竹状模骨痕(4mm幅)、布目痕	ｹｽﾞﾘ	なし	ｹｽﾞﾘ	ﾅﾃﾞ	なし	ｵｻｴ	1～3mm白色砂粒・少、雲母・多、精良	淡～暗黄褐	やや軟	広端部復元径19.3、復元本数70、1ヶ所に2本の連結紐痕
Fig. 38 - 9	P1196	7.2	1.5～1.9	平行ﾀﾀｷ→縦方向ﾅﾃﾞ	竹状模骨痕(5mm幅)、布目痕	ｹｽﾞﾘ	なし	ｹｽﾞﾘ	—	—	—	1mm白色砂粒・多、雲母・多、粗い	明橙褐	軟	
Fig. 38 - 10	B2-C2包含層①	3.8	1.1	ﾀﾀｷ→縦方向ﾅﾃﾞ消し	竹状模骨痕	—	—	—	ｹｽﾞﾘ	なし	なし	1mm以下白色砂粒・多、雲母・多、精良	明橙褐	硬	広端部付近は布が被らず
Fig. 38 - 11	B2-C2包含層①	8.5	1.3～1.6	平行ﾀﾀｷ	竹状模骨痕、布目痕→ﾅﾃﾞ	ｹｽﾞﾘ(2回)	なし	ｹｽﾞﾘ	ｹｽﾞﾘ・ﾅﾃﾞ	ｵｻｴ	ﾅﾃﾞ	1～2mm白色砂粒・多、雲母・多、粗い	暗青灰～淡黄灰	やや軟	狭端部復元径15.6
平瓦															
Fig. 39 - 1	SD003西	7.9	1.7～2.0	格子ﾀﾀｷ	模骨痕(2.7～3.0cm幅)、布目痕	—	—	—	ｹｽﾞﾘ	なし	なし	1mm白色砂粒・少、雲母・少、精良	淡橙褐	軟	0.5×0.7の横長方形格子
Fig. 39 - 2	SC06北ﾍﾞﾙﾄ	7.4	1.6～1.8	平行ﾀﾀｷ	模骨痕、布目痕→ﾅﾃﾞ消し	—	—	—	ｹｽﾞﾘ	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	1mm白色砂粒・少、雲母・少、精良	灰白	軟	
Fig. 39 - 3	SC26 No.1	9.9	1.4～1.6	ﾀﾀｷ→縦方向ﾅﾃﾞ消し	模骨痕(3～3.5cm幅)、布目痕(ﾏﾒﾂ)	ｹｽﾞﾘ	なし	なし	—	—	—	1mm白色砂粒・多、雲母・多	明橙褐	軟	
Fig. 39 - 4	SC26 No.2	14.4	1.3～1.5	ﾀﾀｷ→ﾅﾃﾞ消し	糸切痕、模骨痕、布目痕(ﾏﾒﾂ)	—	—	—	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	なし	1～2mm白色砂粒・多、雲母・多	明橙褐	軟	狭端部付近に連結紐痕か
Fig. 39 - 5	SX003	13.0	1.6	ﾀﾀｷ→ﾅﾃﾞ(ﾏﾒﾂ)	糸切痕、模骨痕、布目痕(ﾏﾒﾂ)	—	—	—	ｹｽﾞﾘ	なし	なし	1～2mm白色砂粒・多、雲母・少	明橙褐	軟	
Fig. 39 - 6	SX003から東半	10.3	1.2～1.5	ﾀﾀｷ→縦方向ﾅﾃﾞ消し	糸切痕、模骨痕、布目痕(ﾏﾒﾂ)	ｹｽﾞﾘ(2回)	なし	なし	ｹｽﾞﾘ	なし	ﾅﾃﾞ・ｹｽﾞﾘ	1～2mm白色砂粒・多、雲母・多	明橙褐	軟	
Fig. 39 - 7	SK050(P1005・1006)	13.4	1.2～1.4	ﾀﾀｷ→縦方向ﾅﾃﾞ消し	模骨痕(2.4～3.0cm幅)、布目痕	ｹｽﾞﾘ	なし	ｹｽﾞﾘ	—	—	—	1～2mm白色砂粒・多、雲母・多	淡黄褐	軟	
Fig. 39 - 8	SK050(P1005・1006)	6.1	1.5～1.6	ﾀﾀｷ→縦方向ﾅﾃﾞ消し	模骨痕(2.5cm幅)、布目痕→一部ﾅﾃﾞ	ｹｽﾞﾘ(破・截面残)	なし	なし	ｹｽﾞﾘ	なし	なし	1～3mm白色砂粒・多、雲母・少、粗い	淡黄褐	やや軟	布綴痕あり、38-10と同一個体か
Fig. 39 - 9	SK050(P1005・1006)	8.4	1.1	平行ﾀﾀｷ→一部ﾅﾃﾞ	模骨痕(2.3cm幅)、布目痕	—	—	—	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	1mm白色砂粒・少、雲母・少、精良	淡黄褐	軟	
Fig. 39 - 10	SK050(P1005・1006)	23.6	1.7～2.0	擬格子ﾀﾀｷ→ﾅﾃﾞ	模骨痕(2.8cm)、布目痕	ｹｽﾞﾘ	ｹｽﾞﾘ	なし	—	—	—	1～3mm白色・赤褐色砂粒・多、雲母・多、粗い	淡黄褐～明橙褐	やや軟	布綴痕あり、38-8と同一個体か
Fig. 40 - 1	SK050(P1005・1006)	10.5	1.1	平行ﾀﾀｷ→一部ﾅﾃﾞ	模骨痕(2.4cm幅)、布目痕	ｹｽﾞﾘ	ｹｽﾞﾘ	ｹｽﾞﾘ	ｹｽﾞﾘ	なし	ｹｽﾞﾘ	1mm白色砂粒・少、雲母・少、精良	暗赤灰褐～暗灰褐	硬	狭端部付近まで布目被らず
Fig. 40 - 2	P1018上層	13.4	1.2～1.7	擬格子ﾀﾀｷ	模骨痕、布目痕(ﾏﾒﾂ)	ｹｽﾞﾘ	なし	ｹｽﾞﾘ(ﾏﾒﾂ)	ﾅﾃﾞ	なし	なし	1mm白色・赤褐色砂粒・少、雲母・少、精良	淡橙褐	軟	広端部復元径36.4、ﾀﾀｷ板幅4cm
Fig. 40 - 3	P1067	6.0	1.5	平行ﾀﾀｷ→一部ﾅﾃﾞ	模骨痕、布目痕(ﾏﾒﾂ)	ｹｽﾞﾘ(2回)	ｹｽﾞﾘ	ｹｽﾞﾘ(2回)	ﾅﾃﾞ	一部ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	1mm白色・赤褐色砂粒・多、雲母・少	淡橙褐	やや軟	
Fig. 40 - 4	P1068ベルト	6.4	1.2～1.4	ﾀﾀｷ→縦方向ﾅﾃﾞ消し	模骨痕、布目痕	—	—	—	—	—	—	1mm白色砂粒・少、雲母・少、精良	明橙褐	やや軟	
Fig. 40 - 5	P1066B上層	11.4	1.1～1.5	平行ﾀﾀｷ(ﾏﾒﾂ)	模骨痕(2.3cm幅)、布目痕(ﾏﾒﾂ)	ｹｽﾞﾘ→ﾅﾃﾞ	なし	(ﾏﾒﾂ)	ﾅﾃﾞ	なし	一部ﾅﾃﾞ	1mm白色・赤褐色砂粒・多、雲母・少	明橙褐	軟	狭端部復元径39.4
Fig. 40 - 6	P1085	5.8	1.6～2.0	擬格子ﾀﾀｷ	糸切痕、模骨痕、布目痕→ﾅﾃﾞ	—	—	—	—	—	—	1mm白色。赤褐色砂粒・多、雲母・多	淡～明橙褐	軟	
Fig. 40 - 7	P1085	4.5	1.4～1.6	平行ﾀﾀｷ	模骨痕、布目痕	—	—	—	ｹｽﾞﾘ	ｵｻｴ	ｵｻｴ	1～2mm白色砂粒・多、雲母・多	暗橙褐	軟	
Fig. 40 - 8	P1117	7.9	1.0～1.5	ﾀﾀｷ→縦方向ﾅﾃﾞ消し	模骨痕、布目痕→のち一部ﾅﾃﾞ	ｹｽﾞﾘ(2回)	なし	ｹｽﾞﾘ	ｹｽﾞﾘ	なし	なし	1～2mm白色砂粒・多、雲母・少	淡黄褐	軟	
Fig. 40 - 9	P1124上層	17.6	1.9～2.5	ﾀﾀｷ→縦方向ﾅﾃﾞ消し	模骨痕、布目痕	ｹｽﾞﾘ	ｹｽﾞﾘ(3回)	—	ｹｽﾞﾘ	ｹｽﾞﾘ	ｹｽﾞﾘ	1～2mm白色砂粒・多、雲母・多	暗～淡黄褐	やや硬	広端部付近は布が被らず
Fig. 40 - 10	P1125上層	13.3	1.4～1.6	平行ﾀﾀｷ	模骨痕、布目痕→一部ﾅﾃﾞ	ｹｽﾞﾘ(2回)	ｹｽﾞﾘ	ｹｽﾞﾘ	—	—	—	1～2mm白色砂粒・多、1mm赤褐色砂粒・多、雲母・多	黄灰～淡橙褐	軟	

表1：瓦観察表（1）　（※「SC26」＝SC12北半部）

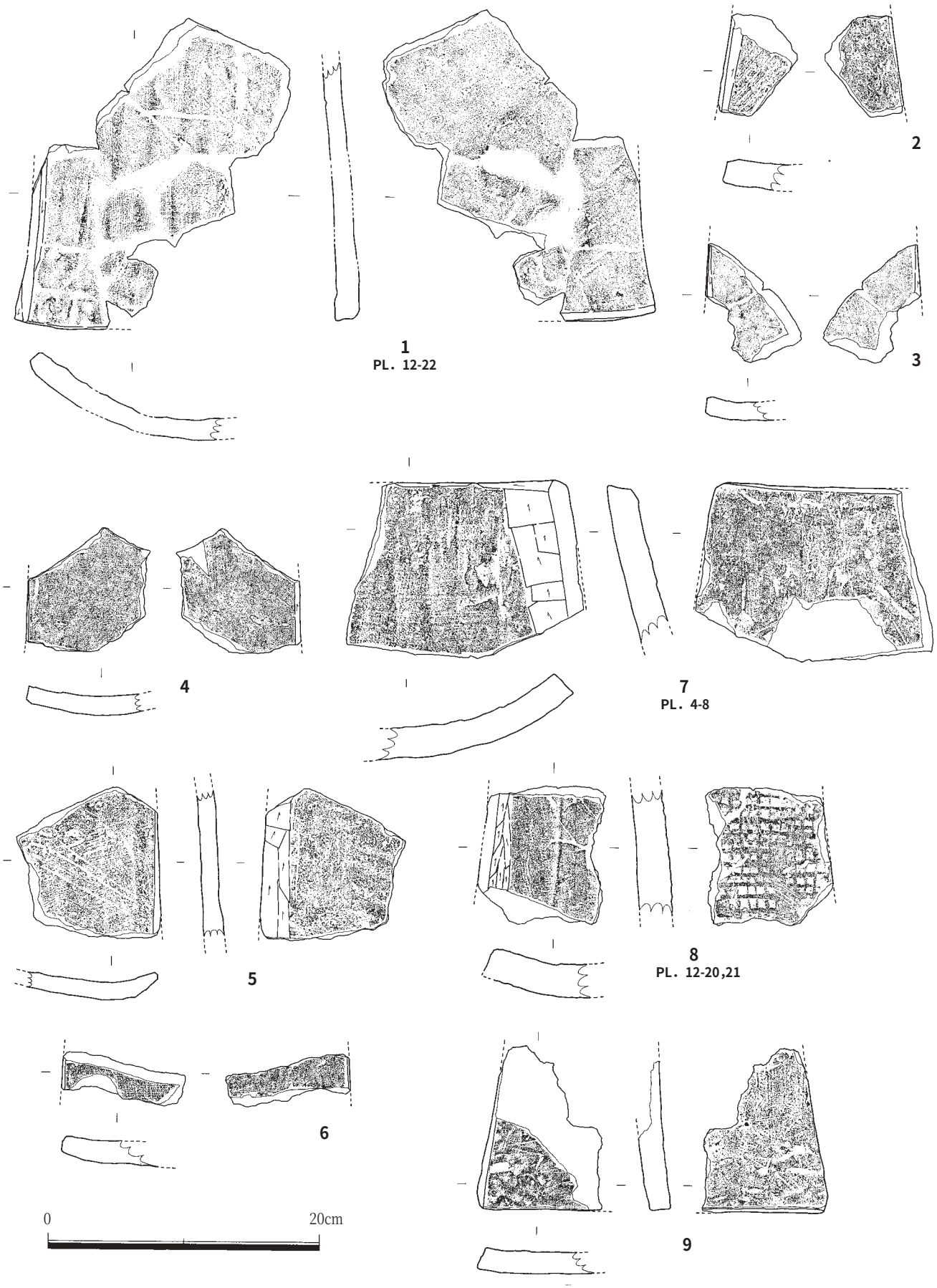
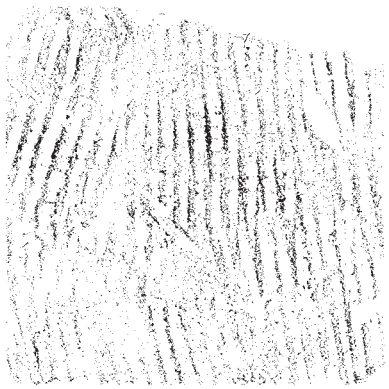
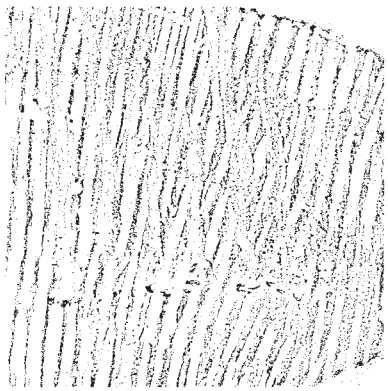


Fig. 41　初期瓦実測図（5）（平瓦③）（1／4）



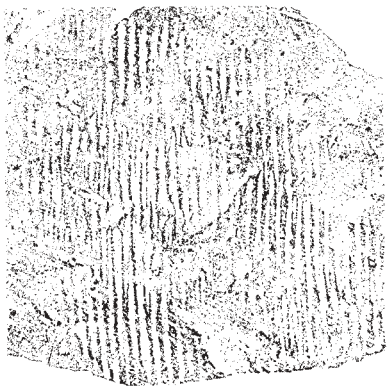
1（Fig.40-2）



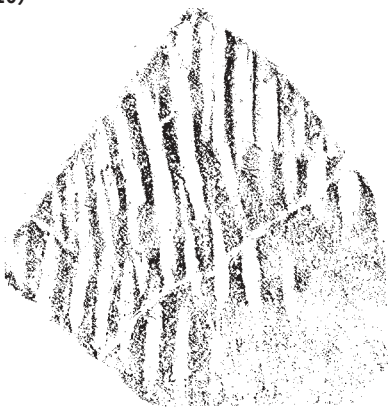
2（Fig.40-10）

3（Fig.41-8）

4（Fig.37-7）

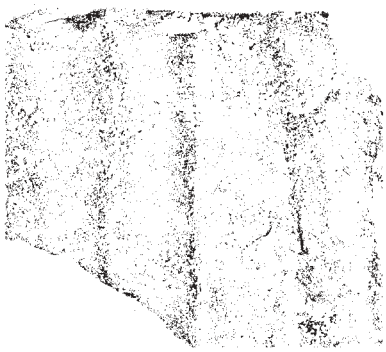


5（Fig.38-8）

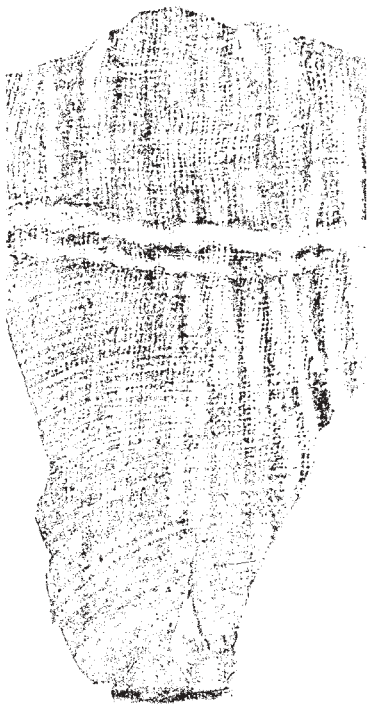


6（Fig.37-6）

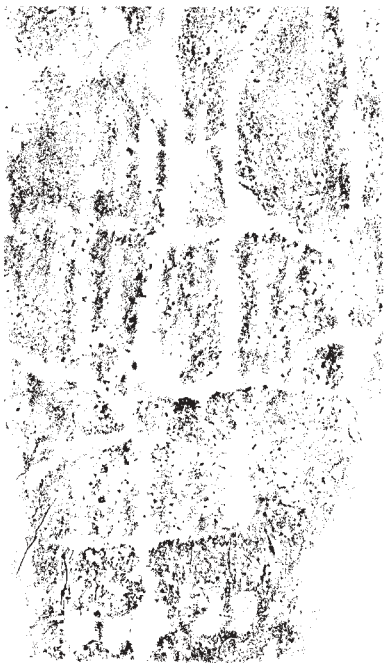
7（Fig.41-7）



8（Fig.40-5）



9（Fig.38-8）



10（Fig.37-1）

0　5cm

Fig. 42　瓦　凸面タタキ（1～6），凹面模骨痕・布目痕（7～10）拓影（1／2）

（※33頁より「土器」の項続き）**12,14**はⅣ期の坏身と高坏であろう。**16**はⅤ期の坏Gと考えるが、住居の切合関係と矛盾があり、混入か。**19**の傾きはこれで問題ない。壺の蓋とも考えたが、あるいは**坏Bの未定型型式の蓋**か(混入か？)。**28**はⅥ期の坏身(坏B)の高台。住居の時期とは考えがたく、混入だろう。

Fig. 41 - 1	P1160	23.0	1.4～1.7	ﾀﾀｷ→縦方向ﾅﾃﾞ消し	模骨痕、布目痕→のち一部ﾅﾃﾞ	ｹｽﾞﾘ	ｹｽﾞﾘ	ｹｽﾞﾘ	ﾅﾃﾞ	ｹｽﾞﾘ	なし	1～2mm白色砂粒・多、雲母・少、粗い	明橙褐	軟	広端部復元径37～38
Fig. 41 - 2	P1160・61・62・1364上層	6.9	1.7～1.9	ﾀﾀｷ→縦方向ﾅﾃﾞ消し	模骨痕、布目痕→擦過	ｹｽﾞﾘ	なし	ｹｽﾞﾘ	—	—	—	1～3mm白色砂粒・多、雲母・多、粗い	明～暗橙褐	軟	
Fig. 41 - 3	P1195 (ﾍﾞﾙﾄ)	6.1	1.3～1.5	ﾀﾀｷ→縦方向ﾅﾃﾞ消し	模骨痕、布目痕→ﾅﾃﾞ消し	ｹｽﾞﾘ	ｹｽﾞﾘ	ｹｽﾞﾘ	—	—	—	1mm白色砂粒・多、雲母・少、粗い	明橙褐	軟	
Fig. 41 - 4	P1195 (ﾍﾞﾙﾄ)	9.8	1.4～1.5	ﾀﾀｷ→縦方向ﾅﾃﾞ消し	模骨痕、布目痕	ｹｽﾞﾘ	ｹｽﾞﾘ	ﾅﾃﾞ	—	—	—	1～2mm白色砂粒・多、1mm赤褐色砂粒・多、雲母・多、粗い	明橙褐	軟	
Fig. 41 - 5	P1364北西角上層	10.9	1.3～1.6	ﾀﾀｷ→縦方向ﾅﾃﾞ消し	糸切痕、模骨痕、布目痕→一部ﾅﾃﾞ	ｹｽﾞﾘ (2回)	ｹｽﾞﾘ (2回)	なし	—	—	—	1～3mm白色砂粒・多、1mm赤褐色砂粒・多、雲母・少、粗い	明橙褐	軟	
Fig. 41 - 6	南東ｽﾐ土層	2.3	1.6～1.8	ﾀﾀｷ→縦方向ﾅﾃﾞ消し	模骨痕、布目痕	ｹｽﾞﾘ	なし	ﾅﾃﾞ	—	—	—	1mm白色砂粒・少、雲母・少、精良	淡灰白	軟	
Fig. 41 - 7	表土剥ぎ時遺構面上包含層	12.9	2.1～2.4	ﾀﾀｷ→縦方向ﾅﾃﾞ消し	模骨痕(1.7～2.5cm幅)、布目痕	(3回) ｹｽﾞﾘ	なし	ｹｽﾞﾘ	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ	ﾅﾃﾞ・ｹｽﾞﾘ	1～3mm白色砂粒・多、雲母・少、粗い	暗橙褐～淡赤褐	やや硬	狭端部復元径28.6
Fig. 41 - 8	A3包含層	9.5	2.2～2.5	格子目ﾀﾀｷ→ﾅﾃﾞ	模骨痕、布目痕→一部ﾅﾃﾞ消し	ｹｽﾞﾘ (截面残)	—	ｹｽﾞﾘ (3回)	—	—	—	1mm白色砂粒・多、雲母・多	灰白	やや軟	0.7×1.1の横長方形格子、横線が細い
Fig. 41 - 9	B2-C2包含層①	12.2	1.6～1.8	ﾀﾀｷ→縦方向ﾅﾃﾞ消し	模骨痕、布目痕→ﾅﾃﾞ消し	ｹｽﾞﾘ (破・截面残)	なし	なし	ｹｽﾞﾘ	なし	なし	1mm白色砂粒・少、雲母・少、精良	淡橙褐	やや硬	

表2：瓦観察表（2）

32はⅢＡ新相～ⅢＢ期の坏蓋だが、これも住居の時期を示すか疑問。**25**は竈に用いる支脚。**21**はFig. 24-4,5と同様の器台。**9,Fig. 36-3**は精製器種Ｂ群の長頸壺で、共伴土器からⅡＡ期。

Fig. 33（29項）は竪穴住居出土。**1～14,17**は瓦を伴う**SC12**出土。**1**の大甕は口縁部からⅣ期後半か。**2**の甕はⅣ期併行でよい。**8**は傾きからⅣ期新相のものでⅦ期の坏蓋ではない。**6**はⅢⅠ（前掲分類）で、Ⅴ期ないしその直前。他の多くは混入品。**SC12はⅣ期新相**の可能性が高い。**17**はFig. 24-4,5と同様の高坏型器台の小型品か（焼成は須恵質）、もしくは壺類の蓋。**7,13**はⅢＢ期の高坏蓋と脚部か。**16**の坏身はSC12に先行する**SC25**出土、Ⅳ期中頃か。**19**（**SC05**）の坏蓋もⅣ期中頃か。

Fig. 34は攪乱および包含層出土。**1**はFig. 33-1と同一個体の可能性。焼き歪みが顕著で頸部以下も内側に凹む。**8**は径が小さく、底部は静止ケズリ。受部形状など特徴的で牛頸窯以外か。**16**は6世紀代の土師器坏（鉢）か。**17**は高坏としたが、盤状Ⅲとすべきか（Ⅳ期後半～Ⅴ期）。**12**は透孔からⅢＡ期の高坏。**Fig. 35**も包含層出土。**1**は深めの精製鉢。**2**はFig. 25-30と同様に暗文ミガキがある精製鉢。精製の坏Ⅲか（前掲分類）。**4**は天井部にカキメがあり高坏蓋（Ⅳ期）。**13**は肩部にヘラ描き（記号？）がある。Ⅳ期後半～Ⅴ期か。**11**の精製鉢はⅢⅠ。**10**は弥生後期の小型甕の可能性もある。

2）瓦（Fig. 37～41、PL. 11・12）（器面調整と成形痕はFig. 42）

瓦類はパンケースに詰めた状態で３箱程度の量が出土した。この量は、建物がもし屋根全面瓦葺きだとするには、削平などによる欠失を考えても少なすぎると考える。しかし出土状況からは、一部の建物に瓦が何らかの形で用いられていたのは間違いない（特に**SB01**）。瓦の出土遺構は、最初の遺構検出面以下の「包含層」と、柱穴、竪穴住居（SC12）などである。小片を除き、極力図化掲載した（Fig. 37～41）。個別の瓦の所見については観察表**（表１・２）**を参照していただくこととし、以下は全体的な所見や個別の特記事項について述べる。なお以下の記述は、多くの方々のご教示（2頁参照）、特に比嘉えりか（福岡大学大学院）による観察所見と教示によることが大きいことを明記しておく。

出土した瓦に軒瓦はみられない。また**丸瓦は全て無段式（行基式）**とみられる。焼成は灰色を呈する一般的な瓦質のものは僅かで、多くは橙褐色、赤橙色気味の軟質（土師質）焼成である。牛頸窯跡群の同時期の資料の一部にみられる、凹面に同心円文当具を用いる最終整形の二次的なタタキを施す個体は無い。また基本的に模骨成形であり、「神ノ前タイプ」の土器製作技法による瓦はみられない。

丸瓦は以下のような特徴がある。**凸面**は、叩打痕の残存するものの大部分は平行タタキ。ただし**Fig. 37-7**（以下Fig.を省略）は擬格子タタキか。タタキ後の調整は、丁寧にナデ消すものとほとんど未調整のものがある。平行タタキ文は幅1～2mmの細めのものが主流。**37-6**は幅3～4mmの太目の平行文。**凹面**は、焼成の甘さのためからか磨滅が著しく、模骨や布目の痕跡があまり残っていないものが

多い。細く縦に走る模骨痕、連結紐と考えられる横方向の段差が存在し、いわゆる「**竹状模骨**」を使用しているものが大部分である。模骨1本の幅は4～6mm前後。**38−5,6**は竹状模骨ではない模骨の可能性もある。模骨は少なくとも４ヶ所以上を紐で連結（**37−1**）、**38−8**では1ヶ所を２本の紐で連結する。糸切痕（弓切痕）が明瞭に残る個体もある（**37−1**）。側縁部の面取り（側面調整）は、端面・側面の面取りのあり方が個体ごとで異なり、パターン化できない。何度もケズリ直したもの、軽くナデただけのもの（未調整に近いものもある）などもあり、丁寧な作りではない。そのほか、完形に近い**37−1**は円弧が一定せず、半裁も正確ではない。**37−5**は円周が小さく熨斗瓦の可能性もある。

平瓦は以下のような特徴がある。**凸面**は、丸瓦同様に幅1～2mmの平行タタキが主流で、それを縦方向に丁寧にナデ消すものが多いが、タタキを残すものもある。**39−1**はやや細かい格子目タタキ、**39−10,40−2,6**は擬格子タタキ。**39−10**は擬格子（または格子目？）タタキ後に平行タタキを施している可能性もある。**41−8**のみは非常に粗い格子目タタキを用いる。平行タタキのものと製作技法は大きく違わないが、厚さが2.5cmと厚く、淡灰色を呈す。このタイプは那珂34次那珂八幡古墳周溝に類例がある（市報告第365集Fig. 83−264）。**凹面**は、幅17～24cmの**模骨痕**がある。模骨を連結する紐の痕跡は見られない。**側面調整**は、丸瓦と同様に個体差、ヴァリエーションが大きい。平瓦、丸瓦ともに模骨で製作した円筒形粘土を分割する際に生じた裁面、破面やバリをケズリやナデで仕上げる意図は看取されるが、その調整方法は一定していない。これらは時期差や系統差というより、工人ごとの手法の違いか。生産地と目される牛頸窯跡群の窯（工房）ごとの差異の可能性もあるが、そもそも瓦作り技法に統一的なパターン化がなされていなかった可能性がある。そのほか、**39−10**は割口が比較的整っており、**割熨斗瓦**の可能性もある。**40−1**は暗灰色気味で焼成堅緻だが、惣利西（春日市）の瓦に似るという。**41−7**は比較的分厚く、端部側面の処理が丁寧で、模骨が明瞭、円周曲線も整美な作りで、**41−8**とともに一時期新しいものか（Ⅵ期以降か）。那珂21次SE61（Ⅶ期の廃棄）に類例（市報告第291集Fig. 264ほか）。**40−5,41−1**は模骨の幅が狭い。**40−10**は弓切痕が明瞭に残る。

３）石器・石製品（Fig. 43～45）

本調査では、各時期の遺構や包含層から旧石器時代から古代にかけての各種の石器および石製品が出土した。以下、簡単にみていきたい（Fig. 43・44）。

工具には、石斧・砥石・敲打がある。**Fig. 43−4**は閃緑片岩（？）を素材とした**太型蛤刃石斧**。剥離加工と敲打を加え整形した後、丁寧な研磨を加え、横断面形を丸に近い楕円に仕上げる。残存長4.65cm、残存幅5.3cm、残存厚2.85cmを測る。SP1051出土。**Fig. 43−1**は頁岩を素材とした**方柱状片刃石斧**。剥離加工により方柱状に成形し、表裏・側面に研磨を加え、片方端に研ぎ出しによる片刃を造り出して仕上げる。製作時は器長5cm以上の製品と考えられるが、刃を研ぎ直して使用されたと考えられる。現存長2.3cm、幅1.25cm、最大厚0.8cmを測る。（Ｂ・Ｃ，１）包含層出土。以上２点は弥生時代前期末前後のものであろう。**Fig. 43−2**は安山岩質凝灰岩を素材とし、本来は**石製穂摘具または磨製石剣の茎**であろうか。剥離加工による成形後、敲打を加え、さらに研磨を施し仕上げたとみられるが、破損後に両側縁および片方端に研ぎ出しの両刃をつけて再生し、**手斧もしくは鑿として再使用**したものか。残存長2.4cm、幅2.8cm、最大厚0.4cm強を測る。SX112出土。応急的な再使用が考えられ、弥生時代中期～後期のもの。**Fig. 43−6,8,9**は**砥石**。**6**は凝灰岩、**9**は細粒砂岩、**8**はいわゆる**天草石**（石英粗面岩）を素材とする。**Fig. 43−6**は四面の使用により方柱状をなす**手持ち砥石**。残存長6.45cm、幅1.4cm、最大厚1.25cm強を測る。古墳時代後期～奈良時代のもの。**Fig. 43−9**は**置砥石**で、表裏に使用による窪みが生じている。鉄製品の研ぎ出しに使用されたと判断され、古墳時代～古代のもの。器長12.75cm、最大幅10.3cm、最小幅10cm、最大厚4.8cm、最小厚2.25cmを測る。近代以降のSX001出土。**Fig. 43−8**

は**手持ち仕上げ砥石**で、表裏・両側の四面が主に砥面として使用される。裏面も使用した可能性がある。器長11.5cm、最大幅8.3cm、最大厚5cm、最小厚2.5cmを測る。（B，０）１面下の包含層（遺構群覆土）出土。天草石の砥石は、類例から飛鳥時代～平安時代に広く使われたものである。以上のほか、工具には花崗岩円礫を素材とする**敲打器**2点があるが、今回は図示していない。そのうち１点は

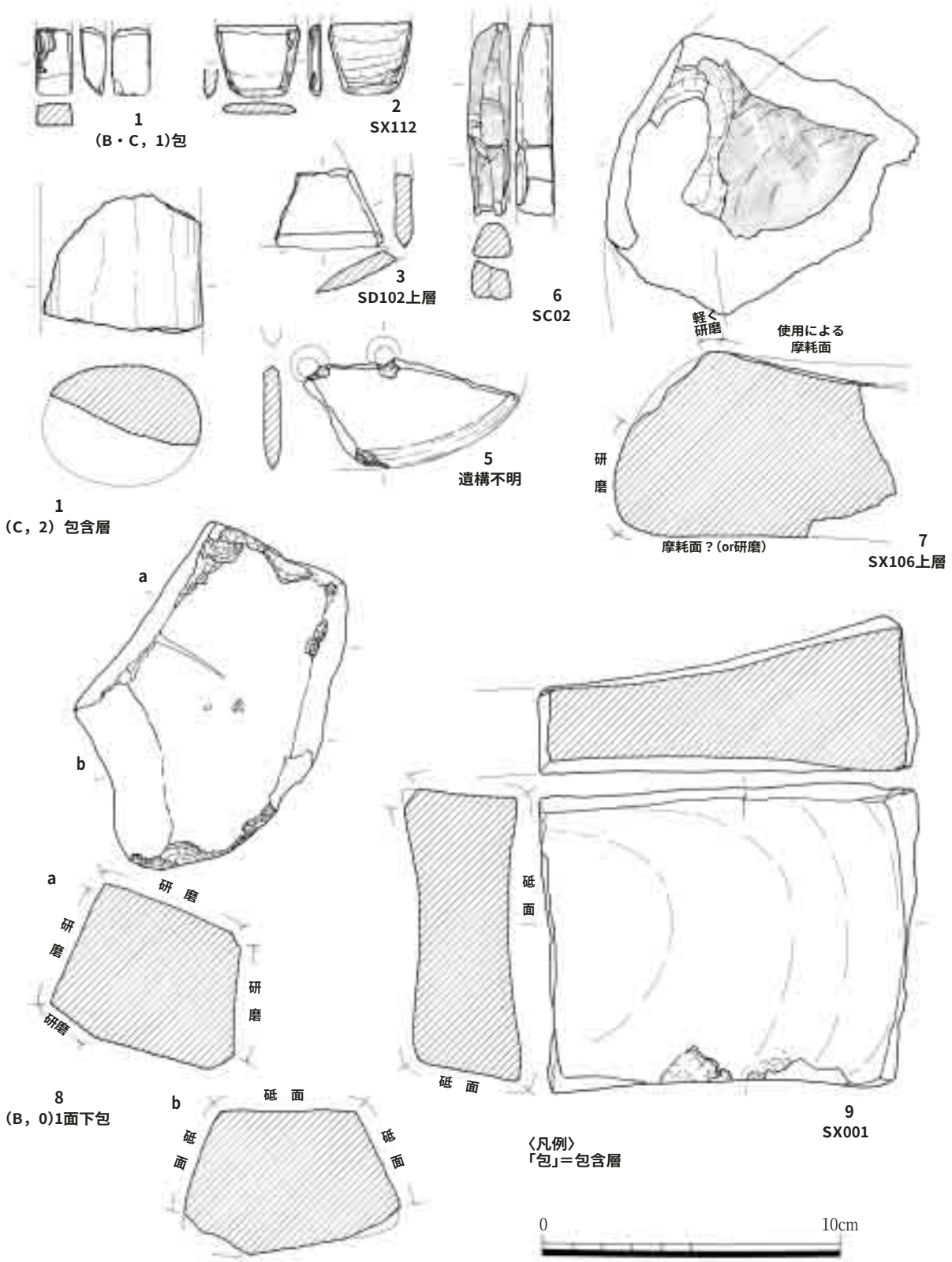


Fig. 43 石器実測図（1）（1/2）

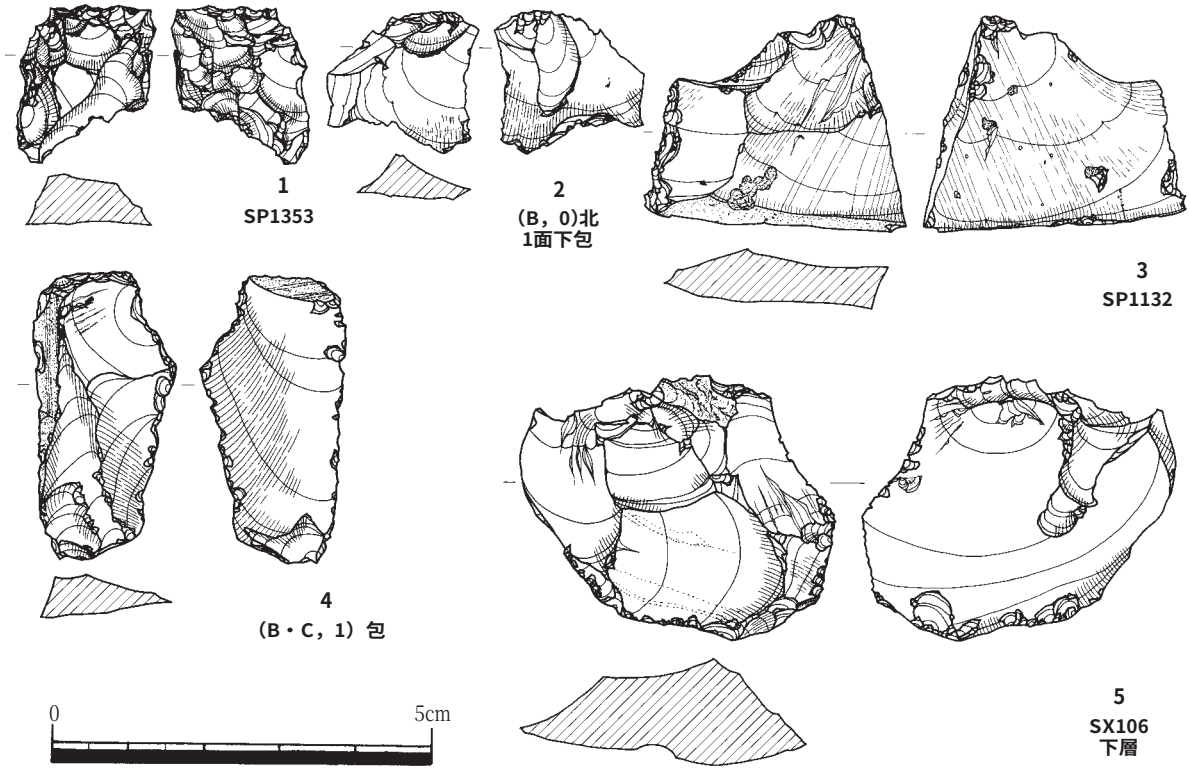


Fig. 44　石器実測図（2）（1/1）

紐縛用と考えられる打欠きがあり、石錘の可能性もある。

農具には、**Fig. 43−3,5**の２点の**石製穂摘具**（石包丁）がある。**Fig. 43−3**は安山岩質凝灰岩を素材とした穂摘具。剥離加工および敲打により半月形ないし三角形に成形し、丁寧に研磨を加え両刃を研ぎ出し仕上げる。刃部片で最大厚5.5cmを測る。**Fig. 43−5**は変成岩を素材とした穂摘具。剥離加工により半月形ないし杏仁形に成形し、丁寧に研磨を加え両刃を研ぎ出し、表裏から紐縛孔を穿孔し仕上げる。残存長3.65cm、残存幅7.15cm、最大厚0.55cm、紐縛孔中心間2.6cmを測る。3は弥生時代**前期**、5は弥生**前期ないし後期**と考えられる。**調理加工具**には、石皿・削器・剥片石器がある。**Fig. 43−7**は、細粒砂岩の扁平な大型転礫を素材とした**石皿**。裏は研磨により座りをよくし、表面は使用による摩耗で皿状をなす。残存幅9.95～9.2cm、最大厚6.2cm、残存最小厚5.1cmを測る。弥生時代前期初頭と考えられる。貯蔵穴SX106（上層）の出土であり出土土器の時期も符合する。**Fig. 44−3,5**は黒曜石製の剥片の縁辺に二次加工を加えた**削器**、**Fig. 44−4**は黒曜石製で、縁辺に使用による刃こぼれがみられることから**剥片石器**とした。黒曜石製の削器・剥片石器は弥生時代前期を前後するものが主体である。なおFig. 44−5の削器も、弥生時代前期初頭の貯蔵穴SX106（下層）の出土である。

武器・狩猟具には、**Fig. 44−1**の**石鏃未製品**が１点ある。黒曜石製の剥片を素材とし、表裏に二次加工を加えているが、基部および先端の仕上げまでには至ってない。器長2.1cm、幅1.86cm、最大厚0.65cm、重さ2.4gを測る。弥生時代前期初頭であろう。以上のほか、黒曜石製の剥片・削片・石核や軽石製の浮子片などがある。**Fig. 44−2**など**旧石器時代の剥片**と考えられるものも僅かにあるが、弥生時代前期を前後する時期のものが主体をなしている。（以上の石器・石製品の記述は山口譲治による。）

Fig. 45は整理の混乱により後から出てきた石器の実測図の補足。簡潔に記す。**1～4**は全て黒曜石製。**1**は**鋸歯縁の石鏃**の頭部。縄文時代の可能性がある。**2**は**石錐**とみられる。風化した剥片の再利用である。**3**は**石核**である。弥生時代前期か。**4**は**旧石器時代の剥片**。風化が著しい。

４）玉類（Fig. 46）

1～6は僅かに薄緑を呈する淡灰色の**滑石製**である。**1**は復元円弧の中心のやや外に小穿孔があり、

有孔円板か。径73mm、厚9mm。**2〜6**は**臼玉**。推定穿孔上面を上面として実測した。**2,3**は側面に稜の無いタイプ。**2**は7×6.5mm（最大径×最大厚、以下同じ）の筒状。**3**は6×3mm。**4〜6**は側面に稜がある通常の臼玉。**4**は7.3×4.4mm。上面が傾く。**5**は7.2×2.3mm。偏平な作りで穿孔がやや大きい。**6**は4.3×2.2mmと小さく扁平で、上面加工が粗い。**7**は**ガラス丸玉**。半分を欠損。径9×10mm（復元）、最大厚6.5mm。本来はやや薄い緑色だが銹化で白色化した部分が多い。上面と側面に気泡があり、側面に溝状の筋がある。成分分析の結果、鉛ガラス製で6〜7世紀に一般的なものという。

5）鉄製品（Fig.47）

1は**ヤリガンナ**の形状だが、幅20mmと太く、特殊な用途の工具か。本調査区の建物に関わるものであれば面白い。**2**はクサビ状の形をなすが厚さに変化が無く、あるいは**鉄素材**か。**3**は**鉄釘**。釘とすれば建築材または瓦の屋根止めに使用したものか。**4**は**環状鉄器**だが、近代のものかもしれない。古い遺物であれば、弥生時代後期の装身具か。

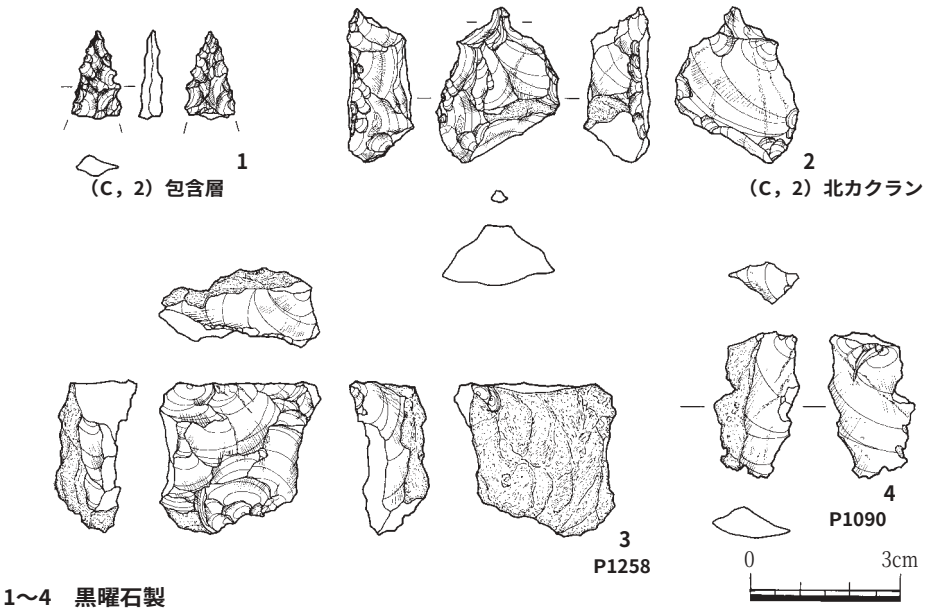


Fig. 45　石器実測図（3）（2／3）

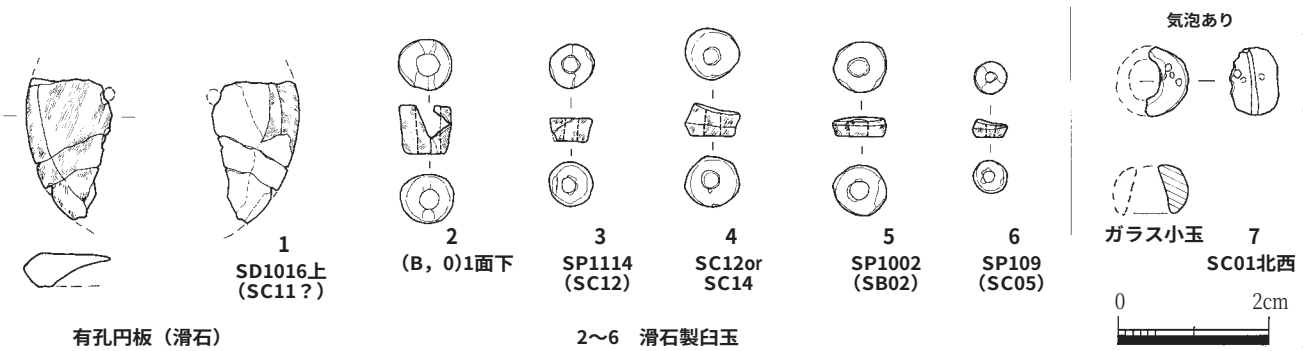


Fig. 46　玉類実測図（実大）

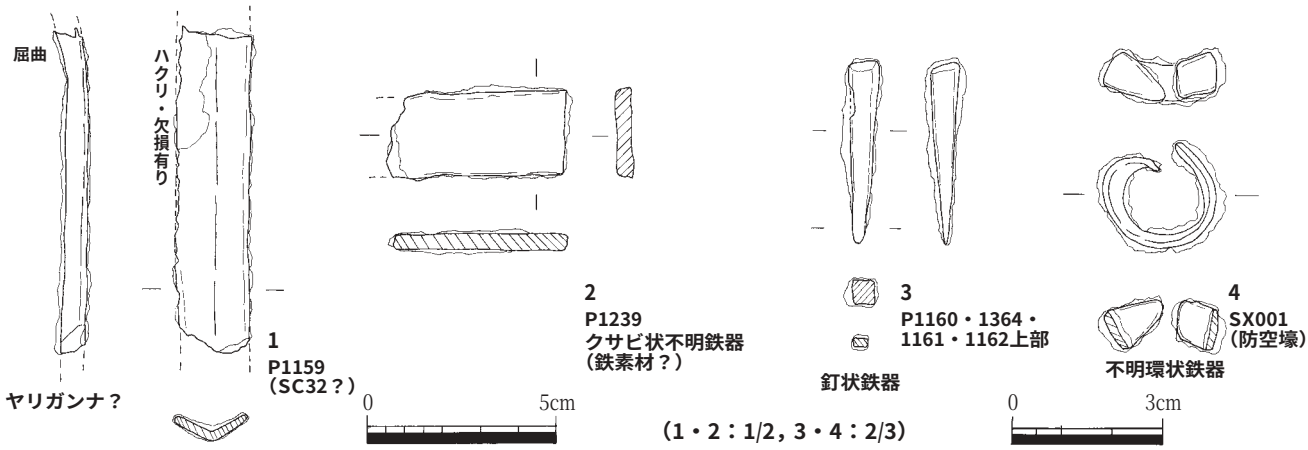


Fig. 47　鉄製品実測図（1／2，2／3）

Ⅲ. まとめ

最後に**遺構の変遷**などについて整理をしておく。**竪穴住居・土坑**と**掘立柱建物**を抽出した図を下に掲載した**(Fig. 48,49)**。各時期の遺構は次の通りである。**①弥生時代前期初頭～前半**：SX106, SX107, SX108。**②弥生時代中期前半～後半**：SK112, SX119。**③弥生時代後期（後半？）～終末期**：SB12？, SC08？, SK110, SX105。**④古墳時代前期初頭～前半**：SC04, SC06, SC17, SC03古？, SC12下部（SP1127）。**⑤古墳時代中期前半**：SC03。**⑥古墳時代後期**（ⅢA～ⅢB期）：SB10, SD102, SD1016, SC21。**⑥～⑦ⅢB期～Ⅳ期古相**：SC42？→SC11？, SC23？→SC15？→SC16？。**⑦Ⅳ-1～2期**（590年頃～625年頃：SB03, SB11, SB13, SB14, SC09→SC29（＝SC24？）→SC02。**⑧Ⅳ-2～3期**（7世紀前半）：SC01, SC05, SC25, SB02, SB07（瓦出土初現）。**⑨Ⅳ-4期**（7世紀中頃）：SB08（瓦）, SB09, SC12。**⑩Ⅳ-4期末～Ⅵ-1期初頭**（660年頃～670年代前半）：**SB01**（瓦葺き建物）。**⑪Ⅵ期**（7世紀4/4期）：SB05（瓦）, SB06（瓦）, SB15（瓦）？**（Ⅵ-1期）**→SB04**（Ⅵ-2期）**。以上のように整理できるが、出土遺物と切合関係に矛盾がある場合もあり、また遺構重複の認識ミスもありうるので問題も残る。しかし、⑦の大型柱穴の建物群が展開し始める時期、⑩の瓦葺き大型建物が存在する時期（Ⅴ期前後）を画期と認識できる。

瓦の出土は⑧新相（Ⅳ-３期）～⑪古相（Ⅵ-１期）までみられ、出土建物自体が瓦葺きであるかは別にして、**周囲に瓦葺き建物が連続して存在した可能性**がある。**大型建物SB01**は瓦葺きの蓋然性が非常に高いが、量的に屋根全面を葺いたか疑問も残り、一部を葺いたものか。ただし熨斗瓦らしきものもあり、葺き方は不明である。

今回の調査により那珂遺跡群の**初期瓦が相応する建物に伴うことが明らかになった**ことは意義が大きい。問題は瓦を伴う建物の性格であるが、寺院ではなく**官衙**と考え、歴史的脈絡から**国家的外交施設**を想定したい。**出土瓦**は、現状では牛頸小田浦79-1号窯（Ⅳ-4期）に様相が最も類似する。大浦2号窯（Ⅳ-4～Ⅴ期）、月ノ浦窯（Ⅳ-4期）とも似た様相があるが、微妙に異なる。那珂では32次SC3014、13次SC215（いずれもⅣ-4期）と同じ様相である。初期瓦の編年や建物群の歴史的意義については考えるところもあるが今後の課題としたい。

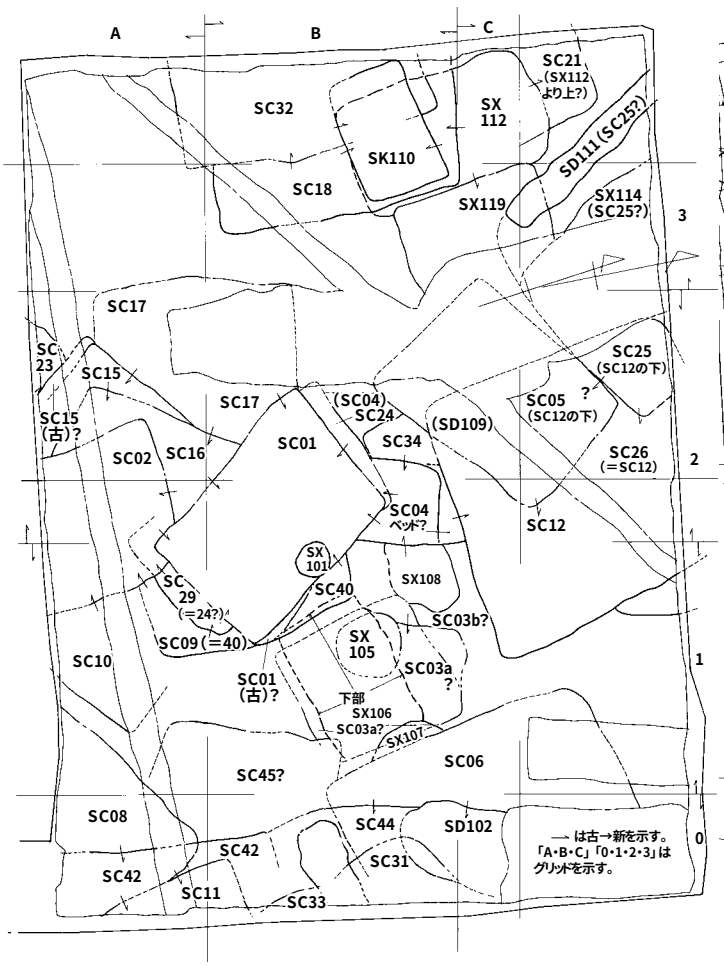


Fig. 48　竪穴住居・土坑等分布図（推定含む）（1/120）

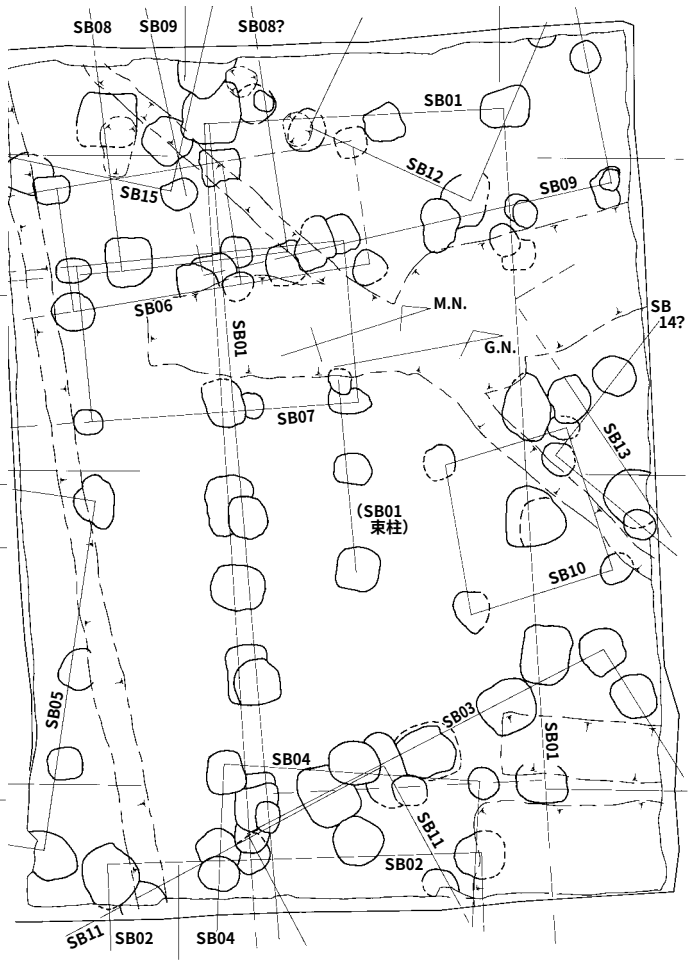


Fig. 49　掘立柱建物分布図（1/120）

1． 那珂115次調査区全景（東から）

2． 那珂115次調査区全景（西から）

1． 那珂115次調査区から那珂八幡古墳（後方）を臨む（西から）

2． 表土除去後遺構検出面状況（西から）

3． 中央南部遺構検出状況（西から、中央はSX001南半）

4． 中央北部遺構検出状況（西から、中央はSX001北半）

5． SC12・26ほか調査状況（北から、瓦片出土状況）

6． SC06（奥），SC08（手前）ほか東部遺構完掘状況（南から）

1.　SP1001，SD102ほか土層断面（北から）

2.　SP1001略完掘状況（北から、最下層出土状況）

3～6.　SP1001土器出土状況（3=上層、4・5=中層、6=下層 ※2は最下層）

7.　SP1002土層断面（西から）

8.　SP1098瓦片出土状況（西から）

9.　SP1004土層断面（南から）

10.　SC26（SC12北半）瓦出土状況（南から）

1. SX106（貯蔵穴）土層断面（東から）

2. SX106東半、SX107掘方確認状況（西から）

3. SK110西半土層断面（南から、下部SX112）

4. SX101炉址（SC01上）確認状況（西から）

5. SC26（SC12）北側壁拡張部瓦出土状況（南から）

6. SC26出土丸瓦（Fig.37-1）

7. SP1098（SB01？）出土丸瓦（Fig.38-8）

8. 包含層出土平瓦（Fig.41-7）

1.　調査区南西部遺構掘削状況（東から）

2.　調査区北西部遺構掘削状況（東から）

3.　調査区南東部遺構掘削状況（東から）

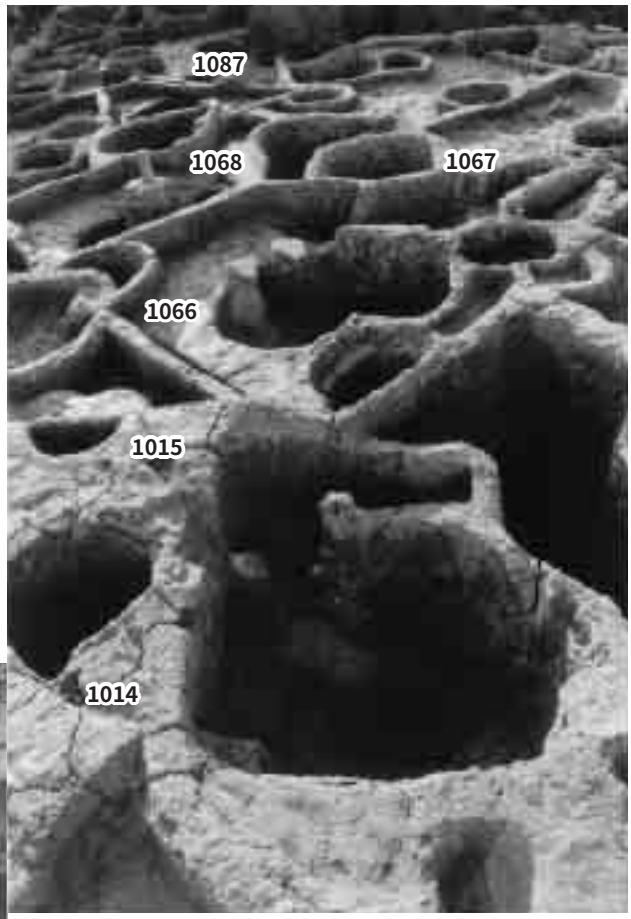
4.　調査区北東部遺構掘削状況（東から）

1.　調査区東半遺構掘削状況（北から）

2.　調査区東縁遺構掘削状況（第1面，南から）

3.　SX001（防空壕）完掘状況（北から）

4.　SX001北側土層断面（南から）



5.　SB01南側柱穴列（東から）

1. SK050（SB01）遺物出土状況（北から）

2. SK050（SB01）完掘状況（北東から）

3. SP1066（SB01）遺物出土状況（東から）

4. SP1160（SB01）掘削状況（北から）

5. SK051（SB10）遺物出土状況（南から）

6. SP1168・1169上層遺物出土状況（東から）

7. SX105，SC03遺物出土状況遠景（南から）

8. SX105，SC03遺物出土状況近景（南から）

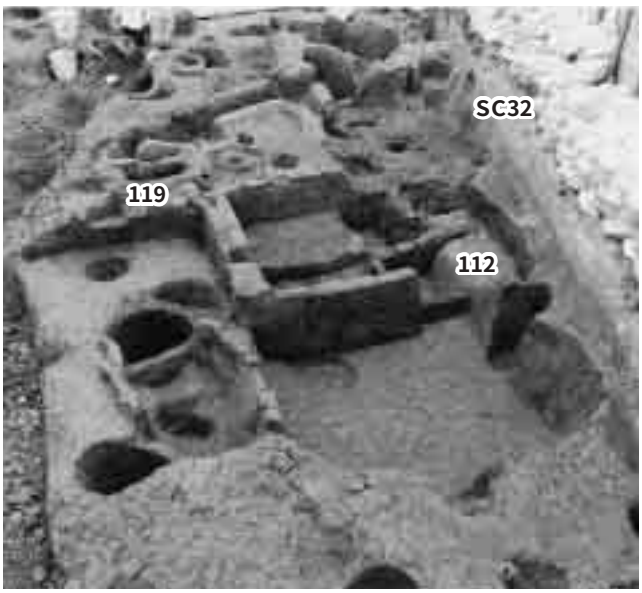
1. SX105（土器群A）遺物出土状況（下層,南東から）

2. SX108（貯蔵穴）掘削状況（東から）

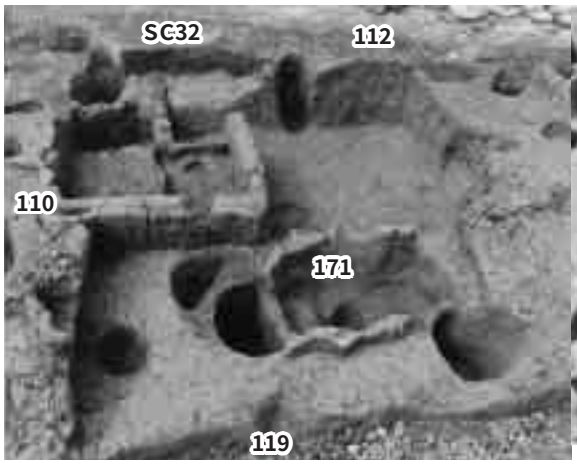
3. SX106（貯蔵穴）掘削状況（西から）

4. SX107（貯蔵穴）掘削状況（北東から）

5. SX107（貯蔵穴）掘削状況（南から）



6. 調査区西側SX 119, SX 112ほか掘削状況（北から）



1. SX119, SX112ほか掘削状況（東から）

2. SK110掘削状況（東から）

3. SC06-Ⅱ区土器01出土状況（東から）

4. SC06中央（Ⅲ区）土器02出土状況（東から）

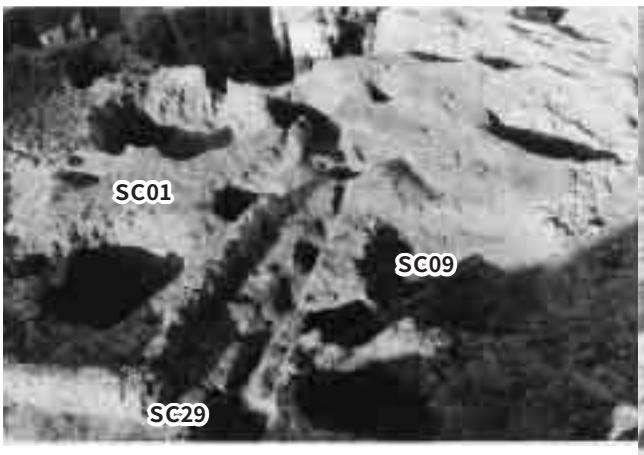
5. SC06（貼床面まで）ほか東側遺構掘削状況（南から）

6. SC06掘方完掘状況（東から）

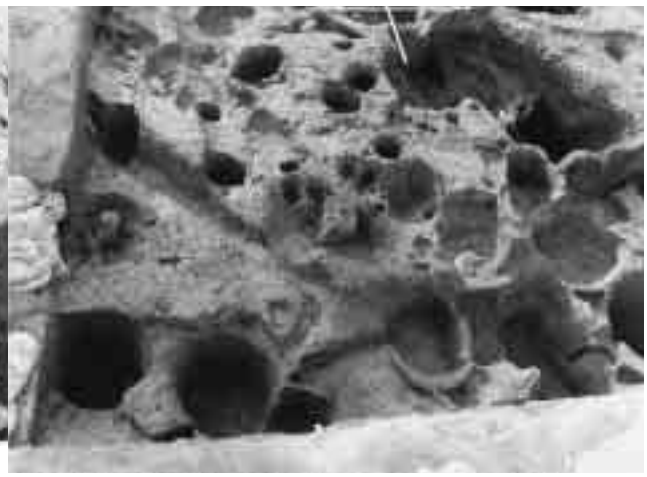
7. SC01ほか中央竪穴住居群掘削状況（北東から）

1. SX101炉址（SC01上）焼土上面確認状況（南西から）

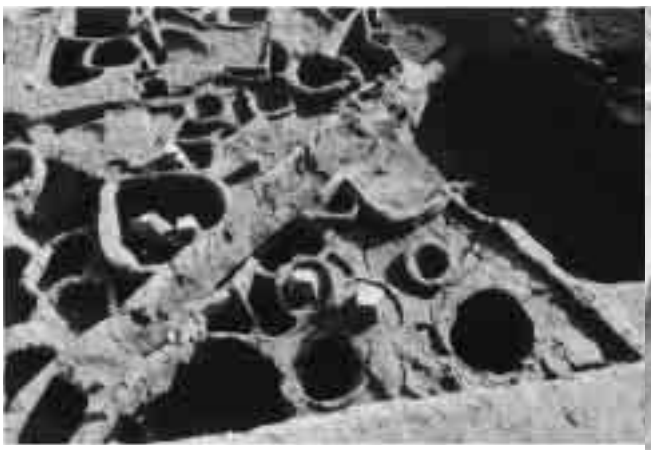
2. SC01東辺壁溝掘削状況（南西から）



3. SC29, SC09掘削状況（南西から）



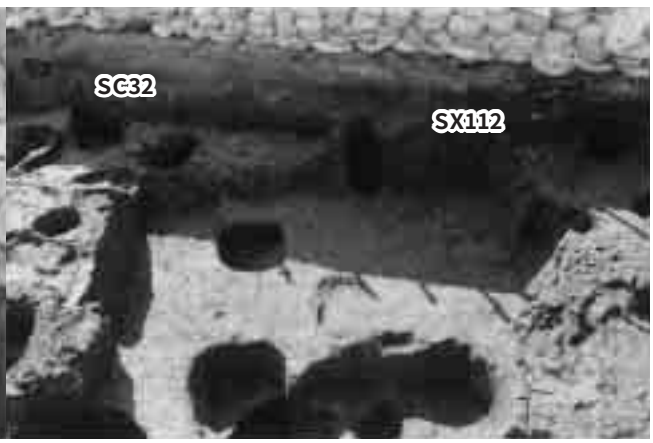
4. SC08, SC11ほか掘削状況（東から）



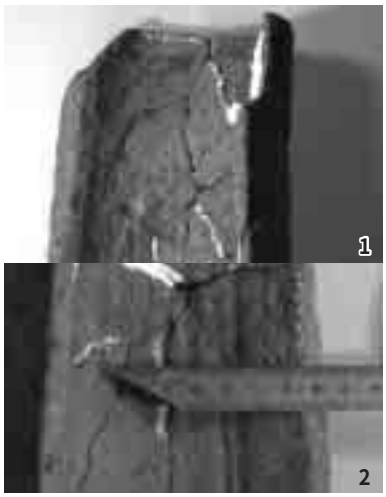
5. SC12（＝26), SC05, SC25掘削状況（北から）

6. SC26ほか掘方完掘状況（西から）

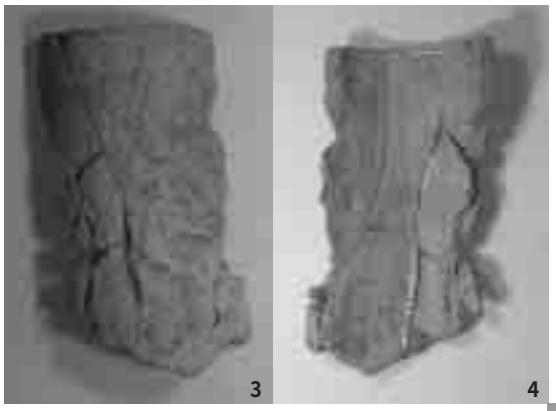
7. SC32ほか掘削状況（北から）



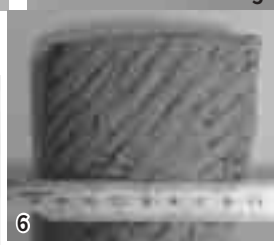
8. SX112, SC32完掘状況（東から）



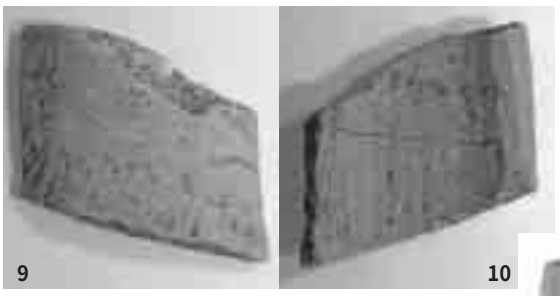
1・2（弓切・模骨）37-1丸瓦



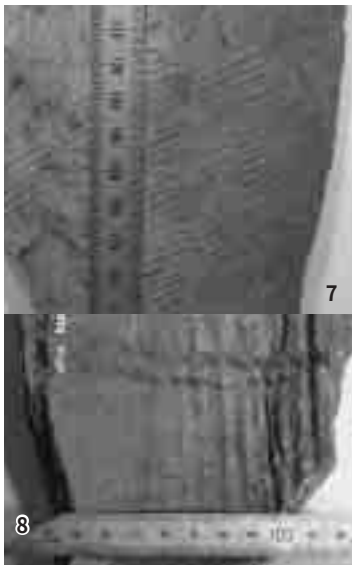
3・4（凸・凹）37-5丸瓦



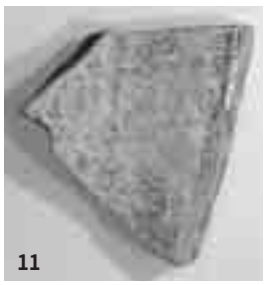
5・6（凸・タタキ）37-6丸瓦



9・10（凸・凹）37-7丸瓦

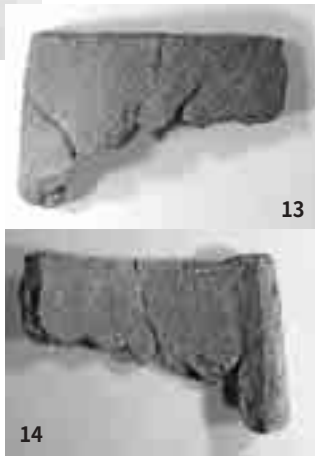


7・8（タタキ・摸骨）38-8丸瓦



11（凹）38-6丸瓦

12（凹）38-9丸瓦

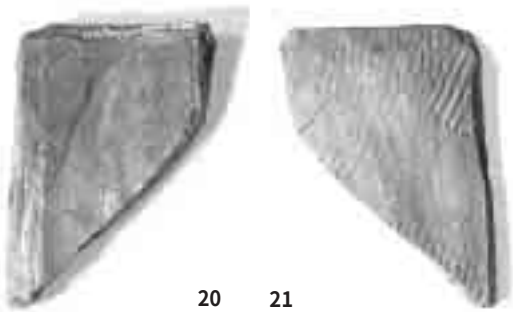


13・14（凸・凹）38-11丸瓦

16・17（凹・凸）39-10平瓦

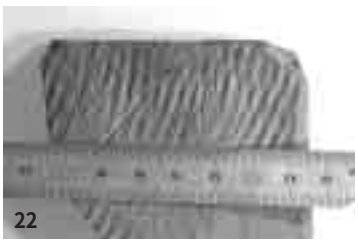
18（タタキ）39-10平瓦

15（タタキ）38-11丸瓦



20・21（凹・凸）40-1平瓦

19（凹）39-1平瓦



22（タタキ）40-1平瓦

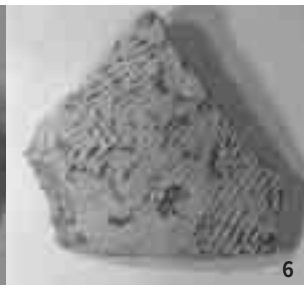
〈凡例〉
「凸」＝凸面、「凹」＝凹面、「弓切」・「摸骨」・「タタキ」は各成形痕の部分写真、「37-1」他はFig.番号

PL.11　出土初期瓦写真（1）

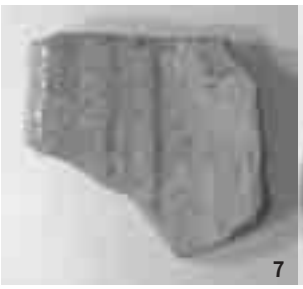
1・2（凹・凸）39-7平瓦

3（タタキ）39-2平瓦

4（凸）41-5平瓦

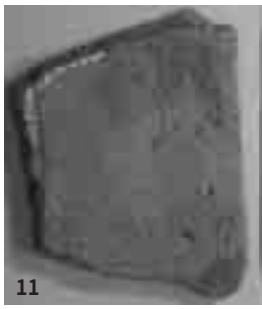


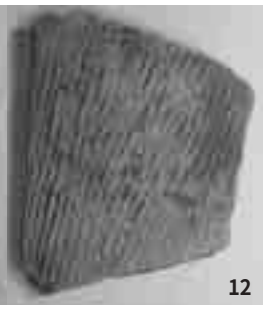
5・6（凹・凸）40-2平瓦



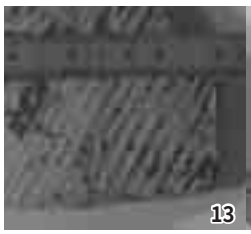
7・8（凹・凸）40-5平瓦

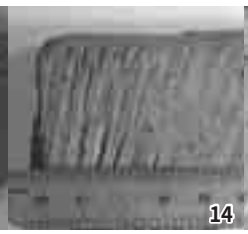
9・10（凹・凸）40-3平瓦

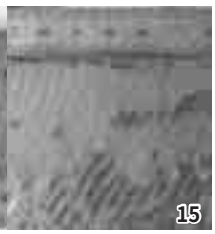




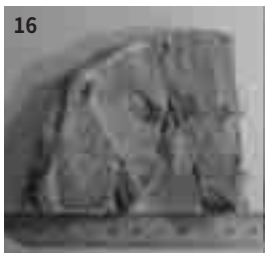
11・12（凹・凸）40-10平瓦

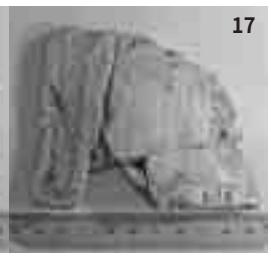




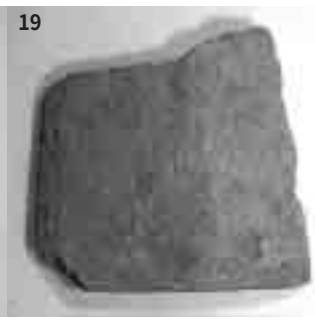


13・14・15（タタキ）40-（左から）2・3・5平瓦

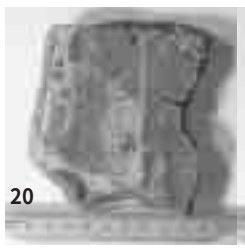


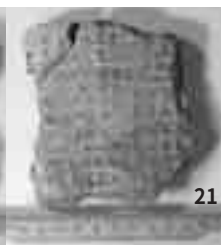


16・17（凹・凸）40-8平瓦

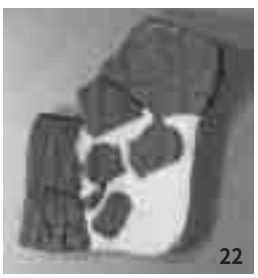


18・19（凹・凸）40-9平瓦

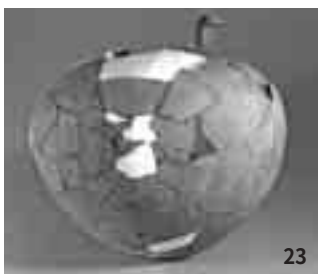




20・21（凹・凸）41-8平瓦



22　41-1平瓦



23　26-7須恵器壺

24　24-1須恵器大甕

25　36-1弥生末甕

PL.12　出土初期瓦写真（2），出土土器写真（2）

報告書抄録

ふりがな	なか50ーなかいせきぐんだい115じちょうさほうこくー
書名	那珂50
副書名	ー那珂遺跡群第115次調査の報告ー
巻次	
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	983
編著者名	久住猛雄(編集)、山口譲治(石器・石製品)、比嘉えりか(瓦観察表)
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	〒810−8621　福岡市中央区天神1丁目8−1　電話番号　092−711−4667
発行年月日	西暦2008年3月21日

遺跡名ふりがな		なかいせきぐんだい115じちょうさ		
遺跡名		那珂遺跡群第115次調査		
所在地ふりがな		ふくおかしはかたくなか1ちょうめ40ばんちない		
遺跡所在地		福岡市博多区那珂1丁目40番地内		
市町村コード		40130		
遺跡番号		0085		
北緯		33° 34′ 16″		
東経		130° 25′ 29″		
調査期間		2007. 01. 18〜2007. 03. 16		
調査面積(㎡)		141.27㎡		
調査原因		共同住宅兼個人専用住宅建設		
種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
集落、官衙？	弥生時代、古墳時代、飛鳥時代〜奈良時代	竪穴住居25以上＋溝3+掘立柱建物15以上+土坑7以上(うち貯蔵穴5か)＋柱穴多数	弥生土器＋土師器＋須恵器+瓦(初期瓦)＋鉄製品+石器＋石製品＋滑石製玉類+ガラス小玉	非常に密集した遺構群、弥生時代(前期初頭〜前半・中期前半〜後半)の貯蔵穴、弥生時代中期後半〜古墳時代前期の住居群、古墳時代後期〜飛鳥時代の住居群＋掘立柱建物群、飛鳥時代の瓦(初期瓦)を伴う大型掘立柱建物(初期官衙か)

福岡市

那　珂　50

ー那珂遺跡群第115次調査の報告ー

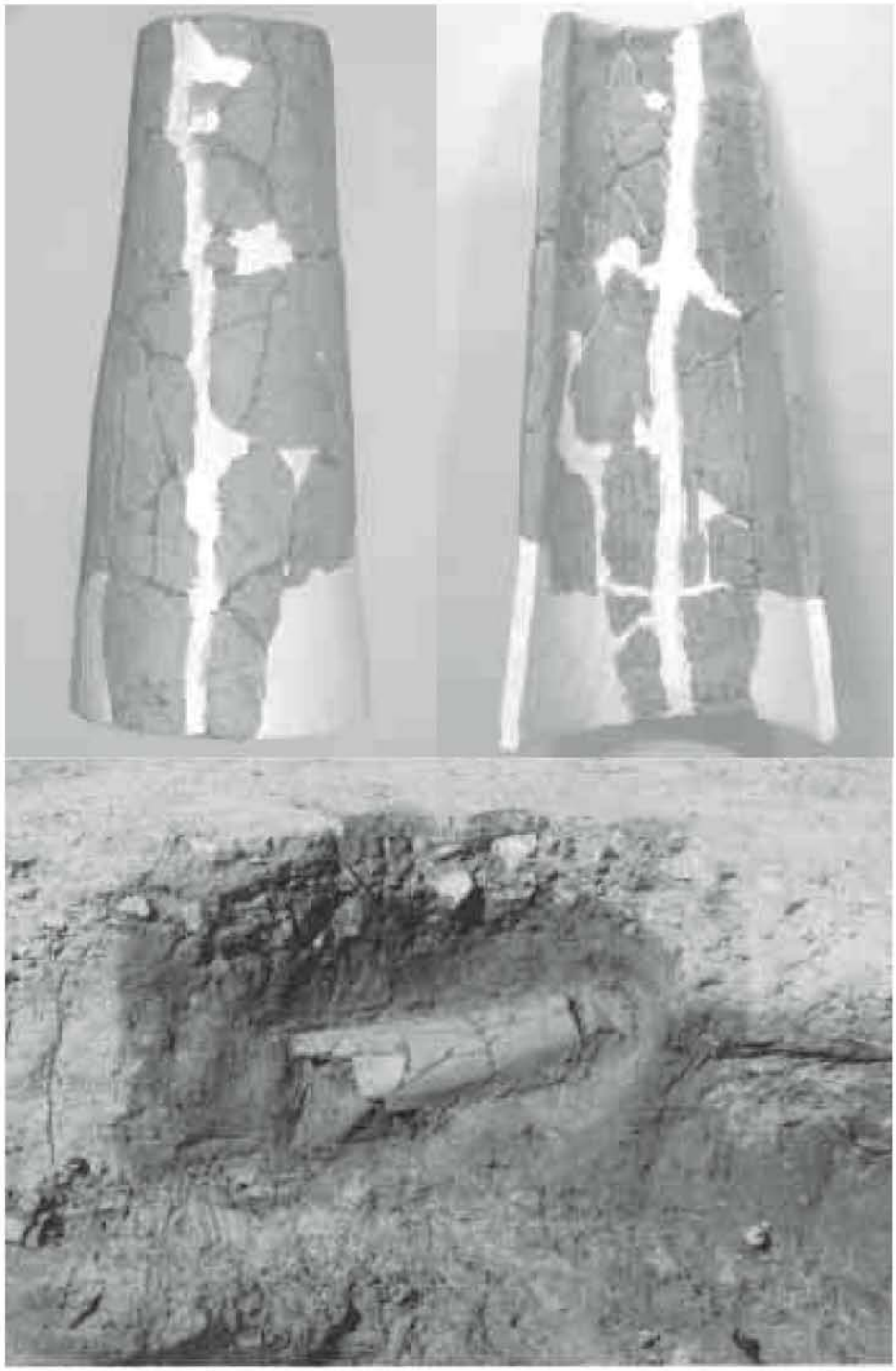
福岡市埋蔵文化財調査報告書第983集

2008. 3. 17

発行　福岡市教育委員会

福岡市中央区天神１丁目８－１

印刷　株式会社 宣技堂



福岡市埋蔵文化財調査報告書第九八三集
二〇〇八
福岡市教育委員会